

表 2-2-37 弥生時代グリッド出土遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	外面 口唇・口縁に付加条縄文 口縁下端に刺突	暗褐色 良			口縁片
2	弥生 壺	外面 口唇・口縁に付加条縄文 口縁下端に刺突	暗褐色 良			口縁片
3	弥生 壺	口縁外反 口唇・口縁ともに付加条縄文	黒褐色 良	緻密		口縁片
4	弥生 壺	複合口縁 外反 口縁・口唇ともに付加条縄文	褐色 良	緻密		口縁片
5	弥生 壺	外反 外唇 口唇外面に棒状工具による押圧を行う 内面 丁寧なミガキを行う	◎黒褐色 ◎褐色 良	緻密		頸部片
6	弥生 壺	外反 口唇・口縁共に付加条縄文	褐色 良	緻密		口縁片
7	弥生 壺	口唇を棒状工具による押圧を行い、小波状を呈する	黒褐色			口縁片
8	弥生 壺	波状口縁で外反する 口唇は棒状工具による押圧を行い、小波状を呈し、口縁は付加条縄文を施文	◎黒褐色 ◎褐色 良	緻密		口縁片
9	弥生 壺	外反 外面 口唇は付加条縄文のち原体の押圧	淡褐色 良	緻密		口縁片
10	弥生 壺	複合口縁 外面 口唇-付加条縄文 口縁-付加条縄文施文後複合部の下方から棒状工具による押圧 内面 ミガキ	黒褐色 良	緻密		口縁片
11	弥生 壺	折り返し口縁 口唇・口縁部にLR単節縄文を施文 口唇下端に刻み目 内面 ミガキ	◎黒褐色 ◎赤褐色 良	緻密		口縁片
12	弥生 壺	折り返し口縁で大きく外反 外面 RL縄文か 器面画線のため詳細不明	◎褐色 ◎赤褐色 普通		砂粒少含	口縁片
13	弥生 壺	外面 口唇LR縄文 口縁LR・RLの羽状縄文	褐色 良	緻密		口縁片
14	弥生 壺	外面 口唇-棒状工具による押圧 口縁-付加条縄文施文後口縁下部を原体による押圧	◎暗褐色 ◎褐色 普通	普通		口縁片
15	弥生 壺	外面 原体による押圧 口縁下部に付加条縄文を施文 内面 ミガキ	褐色 良	緻密		
16	弥生 壺	外面 無文 S字状結節文2段で区画し、以下付加条縄文	暗褐色 良	緻密		頸部片 CS-25G No.13と同じタイプか？ 胴部外面にター ル状表化物付着
17	弥生 壺	外面 S字状結節文2段以下 付加条縄文か？	◎黒褐色 ◎暗褐色 良	緻密		頸部片

18	弥生 甕	外面 頸部無文 最少な連続刺突文とS字状結節文による区画を行う	④暗褐色 ⑤褐良	緻密	頸部～ 胴部片	
19	弥生 甕	外面 LR・RL羽状縄文施文の役 円形浮文	褐色 青	砂粒 少含	頸部片	
20	弥生 甕	外面 無節L+無節Rや無節Lを構成 内面 縄文で羽状縄文	淡褐色 青	砂粒少含	胴部片	
21	弥生 甕	外面 頸部無文 S字状結節文2段で区画し、以下付加条縄文か?	褐 良	緻密	頸部～ 胴部片	
22	弥生	外面 頸部下端をL R縄文を施文し、その後ヘラ掻きによる網目状文で 内面 ミガキ 区画する。以下胴部についてはR熱糸文	④黒褐色 ⑤褐	緻密	頸部～ 胴部片	23と同一個体 か?
23	弥生	外面 頸部下端をL R縄文を施文し、その後ヘラ掻きによる網目状文を 内面 ミガキ 施文	④黒褐色 ⑤褐良	緻密	頸部片	
24	弥生	外面 3本歯の櫛状工具による櫛描波状文を施文後、縦スリットを施 す。胴部は付加条縄文 内面 ミガキ	黒褐 良	緻密	頸部片	
25	弥生 甕	7本歯による櫛描横走文 胴部上端を区画し頸部は櫛描による鋸歯構成 をとる 胴部以下は付加条縄文	橙褐 良	小角礫 少含	頸部片	
26	弥生 甕	頸部に4本歯の櫛描波状文を充填し縦位の区画をする スリット文か?	褐 良	緻密	頸部片	
27	弥生 甕	外面 頸部下端を櫛描横走文によって区画し、その後3本歯の櫛描波状 文	橙褐 青	砂粒 少含	頸部片	
28	弥生 甕	外面 頸部下端を櫛描横走文によって区画し、その後3本歯の櫛描波 状文	橙褐 青	砂粒 少含	頸部片	
29	弥生 甕	外面 頸部一櫛描波状文 胴部上半一付加条縄文?	④黒褐色 ⑤褐良	緻密	胴部片	
30	弥生 甕	外面 頸部一櫛描波状文 内面 ミガキ	④淡褐色 ⑤黒褐色 ⑥黒良	砂粒 少含	頸部片	
31	弥生 甕	外面 ヘラ書き。網目状文による縦区画を行い、区画間を4本歯による 櫛描横走文を段違い施文 内面 ミガキ	⑤黒褐色 ⑥暗褐良	緻密	頸部片	
32	弥生 甕	外面 胴部L熱糸?	褐 良	緻密	胴部片	
33	弥生 甕	胴部 付加条縄文 内面 ミガキ	④暗褐色 ⑤褐良	緻密	胴部片	
34	弥生 甕	L R単節縄文	黒褐 良	緻密	底部片	

35	弥生 壺	胴部上半 附加糸縄文?	⑤黒縄 ④暗縄 良	緻密	胴部片	
36	弥生 壺	胴部上半 附加糸縄文	⑤暗縄 ④黒縄 良	長石 石英 少含	胴部片	
37	弥生 壺	胴部上半 附加糸縄文	⑤暗縄 ④黒縄 良	緻密	胴部片	
38	弥生 壺	胴部上半 附加糸縄文	⑤黒縄 ④暗縄 良	緻密	胴部片	
39	弥生 壺	外面 胴部上半 R 燃糸文?	⑤淡褐 ④褐 良	砂粒 少含	胴部片	
40	弥生 壺	外面 胴部上半 L 燃糸? 内面 胴部上半 ミガキ	褐 良	砂粒 少含	胴部片	
41	弥生 壺	外面 頸部 附加糸縄文で羽状構成をする 内面 頸部 ミガキ	⑤暗褐 ④褐 良	緻密	頸部片	
42	弥生 壺	外面 頸部 R・L・R 縄文による羽状・縄文と思われるが器面剥離のため詳細不明	⑤橙褐 ④淡褐 音	緻密	頸部片	
43	弥生 壺	外面 胴部上半 附加糸縄文で羽状構成をする	⑤黒縄 ④褐色 音	砂粒 少含	胴部片	
44	弥生	外面 ヘラミガキ	褐 音	砂粒 少含	底部片	
45	弥生 壺	外面 胴部下半 R 燃糸文 下端ヘラケズリ 内面 ミガキ	赤褐 良	砂粒 少含	底部片	
46	弥生 壺	外面 胴部上半ヘラミガキ 下端ヘラケズリ 内面 器面剥離の為、不明	⑤暗褐 ④褐 音	砂粒 長石 石英 少含	底部片	
47	弥生 壺	外面 胴部下端附加糸縄文 底部木葉痕	⑤淡褐 ④灰褐 良	砂粒 少含	底部片	
48	弥生 壺	輪積み技法による底部の底上げ 底部外面は木葉痕をヘラケズリで消している痕跡あり	淡褐 音	砂粒 少含	底部片	
49	弥生 壺	外面 胴部下半 L R 縄文 底部木葉痕 内面 胴部下半ヘケ目調整	淡褐 音	砂粒含	底部片	
50	弥生 壺	全体縦位のナデ調整	褐 良	緻密		

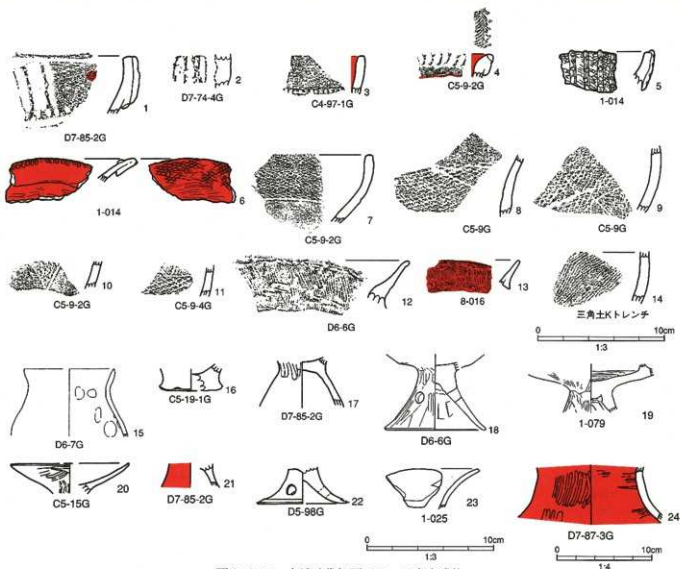


図 2-2-49 古墳時代初頭グリッド出土遺物

表 2-2-38 古墳時代初頭グリッド出土遺物観察表

(単位:mm)

No	種別形	法量 口径×底径×器高 成 形・調整等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 壺	折り返し口縁 口縁外反後ほぼ直立 外面 口縁網目状燃糸文を施文後、棒状浮文を貼りつけ、さらに浮文を押圧。口縁下端にも押圧を施し、最後に口唇についても網目状燃糸文を施文 内面 丁寧なミガキを施す	赤褐色 良	緻密	口縁片	赤彩 弥生終末 ~古墳初頭 以下全て同じ
2	土師器 壺	詳細不明 複合口縁の断片で半切竹管等で削り出し、棒状浮文の効果を出している	褐色 良	緻密	口縁片	
3	土師器 壺	口縁外傾 口唇については面取りを行い平坦面を作り出している。口縁下端に連続刺突を行い、複合口縁の効果を生みだしている。 内面はついでいなミガキを施し、赤彩を行っている	赤褐色 赤褐色 良	緻密	口縁片	
4	土師器 壺	折り返し口縁 口唇は平坦面を作り出す 外面 口唇平坦面にRL-LR縄文による羽状縄文を施文後、口縁外面より減退の押圧 内面 丁寧なミガキを行う	赤褐色 良	緻密	口縁片	
5	土師器	複合口縁 口唇は平坦面を作り出す 外面 口縁-口唇から網目状燃糸文の後、キザミ 棒状浮文貼付 内面 ヘラミガキか?	明褐色 悪	砂粒	口縁片	
6	土師器	大きく外反する 折返し口縁 外面 口唇-網目状燃糸文 外面横ナア後キザミ 内面 網目	赤褐色 良	緻密	口縁片	

7	土師器 壺 (鉢)	口縁外傾し直立する。口唇は面取りを行い、平坦面を作り出す。 外面 網目状赤文を施文し、下端を沈線で区画する	砂褐色 赤褐色 良	緻密	口縁片	
8	土師器 壺	網目状赤文を沈線で区画する	砂褐色 赤褐色 普通	緻密	頸部片	
9	土師器 壺	網目状赤文を施文し、沈線で器底状に区画	褐色 普通	緻密	胴部片	
10	土師器 壺	網目状赤文を沈線で器底状に区画	砂暗赤褐色 赤褐色 普通	緻密	胴部片	
11	土師器 壺	網目状赤文を沈線で器底状に区画	砂暗赤褐色 赤褐色 良	緻密	胴部片	
12	土師器 甕	ハケ目	褐色 良	砂粒	口縁片	
13	土師器 甕	外面 ハケ目 内面 ヘラミガキ	赤褐色 普通	緻密	口縁片	内外面赤彩か
14	土師器 甕	外面 胴部上半 ハケ目	砂暗褐色 黒褐色 良	緻密	胴部片	
15	土師器 壺		柚 普通	砂粒 少含	頸部へ	胴部
16	土師器 甕	外面 下通ナゲ調整	砂暗赤褐色 黒褐色 良	緻密	底部片	
17	土師器 台付甕	全体に縦位のヘラミガキ	暗赤褐色 普通	緻密	脚部	
18	土師器 高坏	坏部一段の稜をもち、外反する 脚部一透孔3ヶ。外反して広がる 脚部外面一縦位のヘラケズリ	砂褐色 赤褐色 普通	緻密	胴部	
19	土師器 高坏	切部内傾し、下端に突帯を有する。脚部、三角状を呈する透かし孔 3ヶ所 外面 ヘラ磨き 内面 ナゲ後ヘラミガキ	褐色 良	緻密	脚部	
20	土師器 高坏	坏部 内外面とも丁寧なヘラミガキ	砂暗褐色 赤褐色 良	緻密	坏部 1/4	
21	土師器 高坏	全体 縦位のヘラミガキ	褐色	緻密	脚部	外面赤彩か
22	土師器 高坏	全体 縦位のヘラミガキ	褐色 良	緻密	脚部	外面赤彩か
23	土師器 高坏	外面 丁寧なヘラミガキ 内面 ハケ調整	暗褐色 良	緻密	脚部	
24	土師器 甕	外面 縦位のヘラミガキ	赤褐色 良	緻密	頸部片	内外面赤彩

第2項 古墳時代後期

境遺跡における古墳時代後期の遺構・遺物は竪穴住居跡が1軒、遺構外の遺物が数点出土したのみで、数量的に少なく、そのあり方は、隣接する向境遺跡と類似している。

(1) 竪穴住居跡

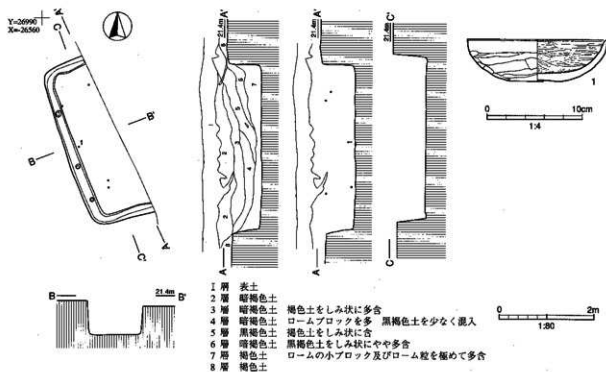


図 2-2-50 1-014

表 2-2-39 6-012遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 成 形・調整等 の 特徴	口径×底径×器高	色調 焼 成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(147)×-×44 外面 口縁-横ナテ 体部-底部-ヘラケズリ 内面 口縁-横ナテ後ヘラミガキ	口径立ち上がり口唇でわずかに外反	暗褐色	粗砂粒多	2/3	

1-014

検出地区 D7-96G。台地先端部に位置する。周辺の遺構としてB106、I101等がある。住居跡の大部分は、調査区外に延びている。

遺 構 方形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームを主体とした貼床で比較的良好に踏み固められている。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。その他、柱穴等の付属施設については検出されなかった。竈についても検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、住居跡の覆土としては6層に分層され、人為的な埋戻しの後自然堆積に依る埋没が想定される。

遺 物 床面直上～覆土上層にかけて少量(30点程度)出土。

所 見 出土遺物から古墳時代後期の竪穴住居跡と判断した。

(2) 遺構外出土遺物



図 2-2-51 6-010

古墳時代後期 グリッド遺物観察表

種別 器形	法 量 □径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1 土師器 環	体部上半に最大径を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。 内外面ともに丁寧なミガキを施し、赤彩を行っている。	赤褐色 良	緻密	口縁片	

表 2-2-40 古墳時代堅穴住居跡一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
1-014	D7-96	3.56×-×0.65 N-21°-W 床面直上~覆土上層にかけて少量出土	床、ロームを主体とした貼り床で比較的良 好に踏み固めている。 壁、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。 色調を基本に8層に分層。人為的な埋め戻 し後自然堆積と考えられる。	覆検出されず 周溝を画する 周溝幅 cm 主柱穴検出せず

第3節 奈良・平安時代

境堀遺跡の奈良・平安時代については、遺構の大部分が台地縁辺部に立地し、調査区南側に位置している。竪穴住居跡21軒、堀立柱建物跡18棟、土坑12基が検出された。集落の展開としては、景観的に調査区東側の第1群と中央部の第2群そして調査区西側の第3群に大別出来るかと思われる。以下、それぞれの群別に報告を進めていきたい。尚、個々の遺構の計測値等は、遺構一覧表にまとめてあるので、そちらを参照されたい。

第1項 第1群の遺構と遺物

第1群の遺構は、調査区東側に展開し竪穴住居跡5軒、堀立柱建物跡6棟、土坑5基、その他の遺構5基で構成される。時期的には8世紀後半～9世紀代に相当すると思われる。第1群の中で、さらに東側の支群と西側の支群に分けることも可能かと思われる。それぞれ竪穴住居跡と堀立柱建物跡が重複する状況で遺構群が検出されているが、何れも住居跡が古く堀立柱建物跡が新しい状況で検出されている。調査区が道路状の細い調査区域の為、検出された遺構も一部にとどまるものが多い。調査区両脇の未調査区を考慮に入れると相当数の集落が展開していた考えられる。

(1) 竪穴住居跡

1-004

検出地区 D7-36G。台地縁辺部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-006、1-005b等がある。

遺構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームによる貼床で、広範囲に硬化面を検出している。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。柱穴、出入口施設等は検出されなかった。住居跡中央に地床炉を1基検出している。焼土、灰等は完全に抜き取られていた。

竈は西壁ほぼ中央で検出された。両袖とも検出され、遺存状況は良好である。燃焼部では明瞭な火床も検出され、煙道部に至るまで赤化範囲が広がっていた。天井部も断面で明瞭に確認でき、自然崩落と考えられる。竈内に土製の支脚が出土している。

覆土は色調を基本とし、29層に分層され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に(950点程度)出土。墨書土器「在」の出土が目立つ。また、覆土中から、条痕文系土器、阿玉台式土器、黒曜石フレイク等が少量ながら出土していた。

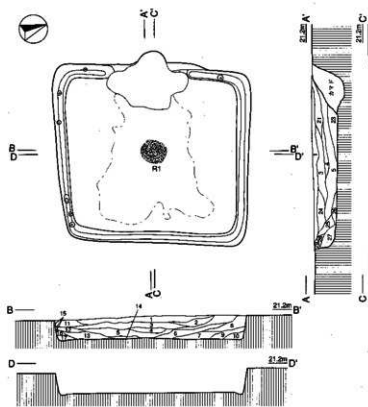
所見 出土遺物から平安期の竪穴住居跡と判断した。住居中央で検出された炉は、住居内における位置、形態、住居の時期等から鍛冶炉と判断した。

1-006

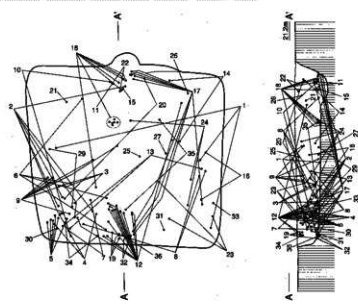
検出地区 D7-16G。台地縁辺部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-007、1-005b等がある。B101と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。住居跡の約1/2は、調査区外に延びている。

遺構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームによる貼床で、全体的にしっかりとしている。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。柱穴は2本のみ検出されたが恐らくは4本柱の住居跡であったであろう。P1は、位置的に貯蔵穴の可能性もあるが覆土の観察、形状等の観察からその可能性は低く、重複する堀立柱の付属施設か、或いは擾乱の可能性もある。出入口施設、竈等は検出されなかった。住居跡中央に地床炉を1基検出している。焼土、灰等は完全に抜き取られていた。

覆土は色調を基本とし、19層(1～19層)に分層された。12～13層は、柱穴の覆土であり、柱穴覆土の



- 1層 暗褐色土 においロームをしみ状に含
- 2層 暗褐色土 灰褐色をやや多くに白いローム
- 3層 暗褐色土 ローム粒を混入 上り暗い暗褐色
- 4層 暗褐色土 ローム粒をやや多含
- 5層 暗褐色土 ローム粒を多含 ロームの小ブロックを少含
- 6層 暗褐色土 黒褐色土においロームをほぼ同量含
- 7層 褐色土 ローム粒を少含 においローム粒をより多含
- 8層 褐色土 ローム粒、においロームを多含
- 9層 褐色土 暗褐色土をやや多くローム粒を少含
- 10層 褐色土 においローム、暗褐色土を少含
- 11層 暗褐色土 ローム粒を少含 ローム粒も極少量含
- 12層 暗褐色土 ローム粒をやや多くロームの小ブロックを少含 においロームをしみ状に見られる
- 13層 暗褐色土 においロームをより多く含 ローム粒を多含
- 14層 暗褐色土 ほぼ均一の層
- 15層 明褐色土 ロームの一次堆積
- 16層 暗褐色土 ローム粒をやや多含 やや明るい
- 17層 暗褐色土 暗い暗褐色土、炭化物を少含
- 21層 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を混入
- 22層 褐色土 明褐色土、粘土を少含
- 23層 暗褐色土
- 24層 褐色土 においロームロームブロックを少含
- 25層 褐色土 暗褐色土をやや多含
- 26層 褐色土 ローム粒を多含
- 27層 暗褐色土 より暗い暗褐色土
- 28層 暗褐色土 ローム粒をやや多含
- 29層 暗褐色土 においロームを混入



- 1層 暗褐色土 粘土を主体とする
- 2層 灰褐色土 粘土を多含
- 3層 暗灰褐色土 粘土を多含
- 4層 暗灰褐色土 粘土及び焼土を混入する ややさらさらする
- 5層 暗茶褐色土 焼土を主体とする粘土を少なく含
- 7層 赤褐色土 焼土を主体とする
- 8層 褐色土 ロームブロックを少含
- 17層 暗茶褐色土 焼土を多量に含 サラサラする
- 19層 暗褐色土 焼土を少含
- 22層 暗褐色土 ロームの小ブロック焼土粒を少含
- 23層 黒褐色土 焼土及び黒褐色土の生焼けのブロックを少含
- 24層 暗褐色土 焼土を少含
- 25層 暗褐色土 焼土をやや多含

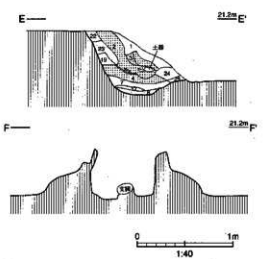
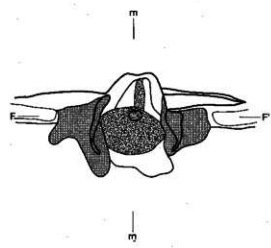


図2-3-1 1-004

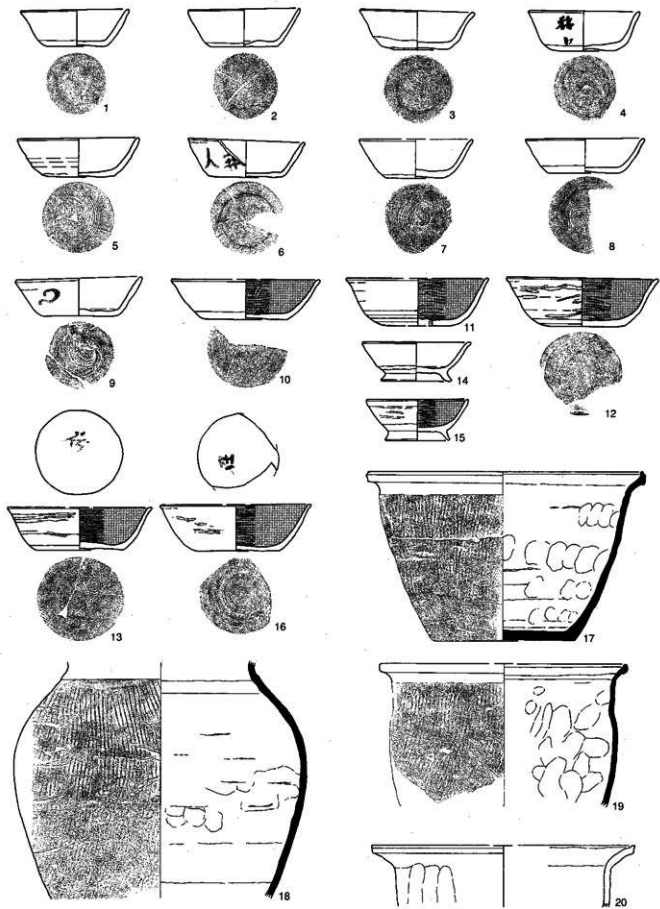


图 2-3-3 1-004

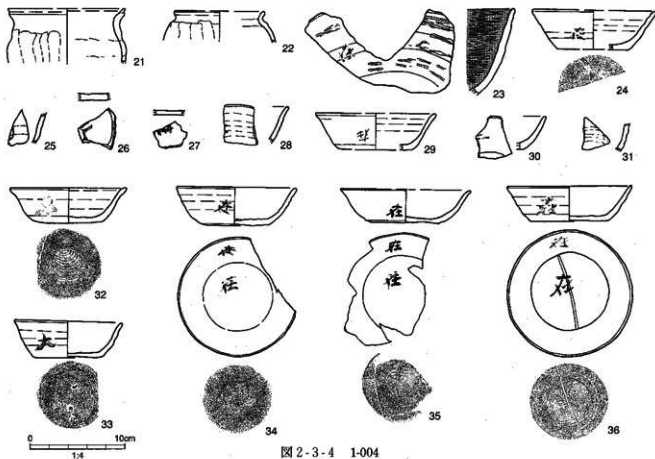


図 2-3-4 1-004

表 2-3-1 1-004遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	118×65×39 外面 ナテ 体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り 切り 離し後回転ヘラケズリ 内面 ナテ	淡褐色 ～黒褐 良	雲母 白色粒	略完形	内外面 スス状付着物 線刻底部内面 [□]
2	土師器 坏	117×70×40 外面 ナテ 体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り 切り 離し後回転ヘラケズリ 内面 ナテ	淡褐色 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	2/3	篆書「一」 底部外面
3	土師器 坏	121×71×45 外面 ナテ 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り 切り離 し後回転ヘラケズリ 内面 ナテ	褐色 良	黒色粒 赤色スコ リア 雲母長石	略完形	
4	土師器 坏	117×65×41 外面 ナテ 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り 切り離 し後回転ヘラケズリ調整 内面 ナテ 底部ヘラナテ	淡褐色 良	黒色粒 赤色スコ リア 雲母	4/5	墨書「□□」 体部外面正位
5	土師器 坏	128×75×41 外面 ナテ 底部一回転糸切り 切り離し後回転ヘラケズリ 内面 ナテ	淡褐色 良	黒色粒 赤色スコ リア 雲母長石	2/3	
6	土師器 坏	122×78×39 外面 ナテ 底部一回転糸切り 切り離し後回転ヘラケズリ 内面 ナテ	淡褐色 良	黒色粒 赤色スコ リア 雲母長石	2/3	墨書「人□」 体部外面正位
7	土師器 坏	(119)×61×41 外面 ナテ 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り 切り離 し後回転ヘラケズリ 内面 ナテ	淡褐色 赤赤褐 良	雲母 白色粒	1/4	
8	土師器 坏	125×80×36 外面 ナテ 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り 切り離 し後回転ヘラケズリ 内面 ナテ	褐色 良	黒色粒 雲母 灰石	2/3	

9	土師器 坏	132×72×42 外面 ナデ 底部-右回転糸切り 切り離し後回転ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色 良	雲母粒 白色粒	2/3	墨書「□」 底部外面
10	土師器 坏	(156)×86×42 外面 ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ調整 底部-回転糸切り 切り 離し後回転ヘラケズリ 内面 横位のヘラミガキ	赤褐色 砂黒濁 良	雲母粒 白色粒	1/2	内黒 炭素着色処理だ がうまくのらず 部分的に残存
11	土師器 坏	(150)×(80)×30 ロクロ成形 外面 ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部切り離し不明回転ヘラケ ズリ 内面 横位のヘラミガキ 底部-ヘラミガキ	褐色 漆黒良	雲母 白色粒	1/2	内黒 一部残存 外面にスス状付 着物
12	土師器 坏	159×90×52 ロクロ成形 外面 ナデ後口ロ口は確なミガキで滑される 体部下端-回転ヘラリ 底部-右回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ 内面 横位ヘラミガキ 底部-ヘラミガキ	赤褐色 砂黒濁 良	雲母 白色粒	2/3	内黒 炭素着色黒色 処理
13	土師器 坏	150×90×45 ロクロ成形 外面 ナデ 横位ヘラミガキ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-右回 転糸切り後ヘラケズリ 内面 横位ヘラミガキ 底部-ヘラミガキ	赤褐色 漆黒濁 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	2/3	墨書「□」 底部外面 内黒
14	土師器 高台付坏	113×台部径74×41 ロクロ成形 外面 ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-坏部整形後高台部貼り 付け 内面 ナデ	淡褐色 良	白色粒 赤色スコ リア 黒色 粒 雲母	完形	高台部内面スス 状付着物
15	土師器 高台付坏	108×台部径68×43 ロクロ成形 外面 ナデ後粗いヘラミガキ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-高台 部貼り付け 内面 粗いヘラミガキ	赤褐色 砂黒濁 良	白色粒 雲母 砂粒	略劣形	高台部内面スス 状付着物 内黒
16	土師器 坏	(158)×85×49 ロクロ成形 外面 ナデ 部分的に粗いヘラミガキ 底部-回転糸切り後ヘラケズリ 内面 横位ヘラミガキ 底部-放射状ヘラミガキ後中央に十字のヘラミ ガキ	赤褐色 漆黒濁 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	1/3	墨書「在」 底部外面 内黒
17	須恵器 甕	294×150×178 輪積みロクロ併用 口縁端部つまみ上げ 外面 口縁-頸部-横ナデ 胴上半-中位-段位タキ目胴部下半- 下端-横位、斜位手持ちヘラケズリ 内面 口縁-頸部-横ナデ胴部 -当て具痕明瞭タキ後ナデ 底部-内外面ナデ	淡褐色 淡灰濁 良	白色粒 雲母 砂粒 小石粒	1/2	
18	須恵器 甕	-×-×- 最大径304 輪積み ロクロ併用 外面 頸部-横ナデ 胴上半-下半-縦位平行タキ目 内面 頸部-横ナデ 胴上半-下半-当て具痕 タキ後ナデ	淡褐色 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母少	頸部- 胴下半	胴部中央から下 半外面において 二次地成による 器面の荒れ著しい
19	須恵器 甕	(262)×-×(150) 輪積み 外面 口縁-横ナデ 頸部-胴上半-縦位平行タキ目 内面 口縁-横ナデ 頸部-胴上半-当て具痕	暗褐色 濁良	白色粒 雲母	口縁- 胴上半	
20	土師器 甕	(276)×-×(64) 輪積み 外面 口縁-横ナデ 胴上半-縦位ヘラケズリ 内面 口縁-横ナデ 胴上半-横位ヘラナデ	赤褐 黒濁良	白色粒多	口縁- 胴上半	
21	土師器 小型甕	(124)×-×(58) 輪積み 口縁端部つまみ上げ 外面 口縁-横ナデ 胴上半-下方向の縦位ヘラケズリ 内面 口縁-横ナデ 胴上半-ナデ	茶褐 黒濁良	雲母 長石 小石	口縁- 胴上半	内外面 炭化物付着
22	土師器 小型甕	(95)×-×(32) 輪積み 外面 口縁-頸部-横ナデ 胴上半-下方向の縦位ヘラケズリ 内面 口縁-横ナデ 頸部-ヘラナデ 胴上半-ナデ	暗茶褐 黒濁 善	白色粒 雲母	口縁- 胴上半	内外面 炭化物付着
23	土師器 大型坏	-×-×- 輪積み 外面 横ナデ 体部中位-下端-回転ヘラケズリ部分的にヘラミガキ 内面 横位のヘラミガキ	赤茶褐 一部黒濁 砂漆黒 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	口縁- 体部	墨書「在」 体部外面正位 内黒
24	土師器 坏	(130)×(74)×42 ロクロ成形 外面 ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-停止糸切り後回転ヘラ ケズリ 内面 ナデ	褐色 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	1/2	墨書「在」 体部外面正位
25	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色 良	白色粒 雲母 小石粒	体部片	墨書「□」 体部外面
26	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色 淡濁 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	底部片	墨書「□」 底部外面
27	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 回転糸切りか? 周縁ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色 良	雲母 砂粒	底部片	墨書「□」 底部外面

28	土師器 環	—X—X— 内外面 ナデ	ロクロ成形	淡黄褐色 良	雲母 黒色粒	口縁片	墨書「□」 体部外面
29	土師器 環	(126)×(76)×38 外面 ナデ 体部下端—回転ヘラケズリ 内面 ナデ	ロクロ成形 底部—周縁回転ヘラケズリ	淡茶褐色 暗褐色 良	雲母	1/6	刻劃「在」 体部外面側位
30	土師器 環	—X—X— 外面 ナデ 体部—周縁ヘラケズリ 内面 ナデ	ロクロ成形 底部—周縁ヘラケズリ	赤褐色 暗褐色 良	白色粒 雲母砂粒 赤色粒	口縁— 底部片	墨書「□」 体部外面
31	土師器 環	—X—X— 外面 ナデ 体部下端—ヘラケズリ 内面 ナデ	ロクロ成形 体部下端—ヘラケズリ	淡褐色 良	雲母 砂粒	体部片	墨書「部」 体部外面
32	土師器 環	122×74×37 外面 ナデ 体部下端—回転ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ	ロクロ成形 体部下端—回転ヘラケズリ後ナデ 体部—回転ヘラケズリ	淡褐色 良	赤色スコ リア 雲母 長石	完形	墨書「千」 体部外面正位
33	土師器 環	113×70×38 外面 ナデ 体部下端—回転ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ	ロクロ成形 体部下端—回転ヘラケズリ後ナデ 体部—回転ヘラケズリ	濃褐色 淡茶褐色 一部黒褐色 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	略完形	墨書「大」 体部外面正位
34	土師器 環	126×72×40 外面 ナデ 体部—回転ヘラケズリ後回転ヘラケズリ 内面 ナデ	ロクロ成形 体部—回転ヘラケズリ後回転ヘラケズリ	淡褐色 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	略完形	墨書「在」 体部外面正位 底部外面「在」
35	土師器 環	(135)×(80)×35 外面 ナデ 体部—回転ヘラケズリ後回転ヘラケズリ 内面 ナデ	ロクロ成形 体部—回転ヘラケズリ後回転ヘラケズリ	淡褐色 良	白色粒 雲母 赤色スコ リア	2/3	墨書「在」 体部外面正位 底部外面「在」
36	土師器 環	128×82×37 外面 ナデ 体部下端—回転ヘラケズリ 内面 ナデ	ロクロ成形 体部下端—回転ヘラケズリ 体部—右回転糸切り後回転ヘ	淡茶褐色 良	白色粒 雲母 小石粒	完形	墨書「在」 体部外面正位 底部外面「在」 底書「日」

観察から、柱材は引き抜かれたことが判る。また、覆土下層から多くの焼土を検出していることなどから人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に(140点程度)出土。覆土中から条痕文系土器、阿玉台式土器などの出土も目立った。

所見 出土遺物等から奈良・平安期の堅穴住居跡と判断した。

1-007

検出地区 D7-25G。台地縁辺部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-006、B101等がある。B102と重複関係にあるが本住居跡の方が古い。

遺構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームによる貼床で、住居跡中央で広範囲に硬化面を検出している。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。柱穴は検出されなかった。P1については位置的に出入口施設と考えられる。

竈は西壁は中央で検出された。両袖とも検出され、遺存状況は良好である。燃焼部では明瞭な火床も検出され、天井部も断面で明瞭に確認でき自然崩落と考えられる。袖から天井部にかけて竈を補強するためと思われる、土師器、須恵器片が出土した。

覆土は色調を基本とし、12層に分層され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に(570点程度)出土。竈直前から出土した石器は、砥石或いは磨石としての用途が考えられる。また、覆土中から、縄文時代早期条痕文系土器の出土が目立った。

所見 出土遺物から平安期の堅穴住居跡と判断した。竈直前から出土した石器は、弥生時代中期の太型蛤歯石斧の転用とも考えられる。

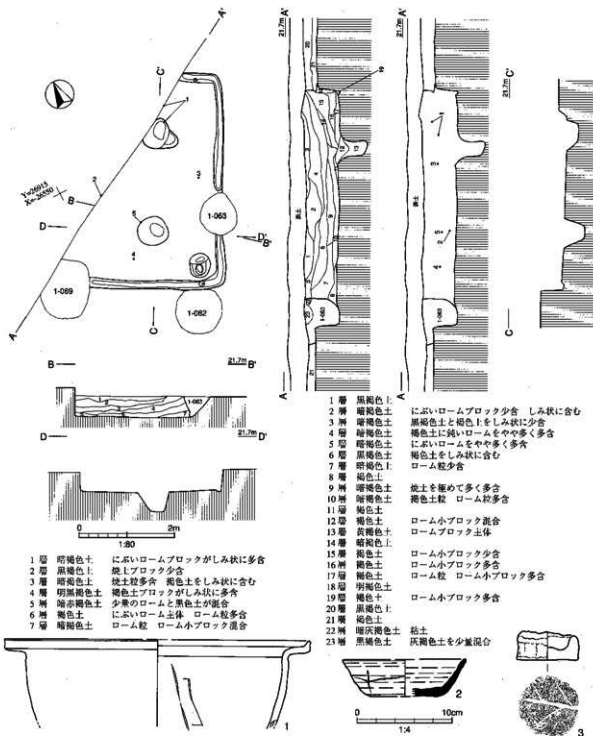


図 2-3-5 1-006

表 2-3-2 1-006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	上師器 甕	(320)×(95) 輪積み 口唇部つまみ上げ 外面 口縁～頸部一横ナデ 胴上半～ナデ 内面 口縁～頸部一横ナデ 胴上半～ヘラナデ		茶褐 一部黒斑 良	石英雲母 白色粒 小石粒	口縁～ 胴上半	
2	須恵器 坏	(128)×(70)×39 ロクロロ成形 外面 ナデ 底部一切り履し不切 ヘラケズリ 内面 ナデ		暗灰 青	雲母 白色粒 長石	1/3	銅書「E」 体部外面
3	土師器 坏	55×64×30 手捏ね 外面 ナデ 底部一木葉痕 内面 ナデ		黒灰褐 良	雲母長石 赤色ス コリア	完形	

表 2-3-4 1-005b遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 内外面 ナデ	淡褐色 良	雲母 砂粒	口縁片	墨書「□」 底部外面
2	土師器 坏	128×84×34 ロクロ成形 外面 ナデ 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一切り難し不明 回転ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	4/5	墨書 体部外面「十」 底部外面「十」 灯明皿
3	土師器 坏	(124)×82×40 ロクロ成形 外面 口縁—ナデ 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り周縁 右回り回転ヘラケズリ 内面 ナデ	橙褐色 良	白色粒 雲母	1/3	墨書 体部外面「□」 底部外面「十」
4	土師器 坏	(124)×(84)×41 ロクロ成形 外面 ナデ 底部一回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面 ナデ	橙褐色 淡褐色 良	白色粒 赤色スコ リア少 雲母	1/3	墨書「十」 底部外面
5	土師器 坏	(124)×84×37 ロクロ成形 外面 口縁—ナデ 体部下端—ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 内面 ナデ	淡赤褐色 一部外面 黒褐色 雲母	白色粒 赤色スコ リア 雲母	1/3	底部外面に2個 並列の性格不明 瓦痕が4個あり
6	土師器 高台付坏	—×白部径78×(17) ロクロ成形 外面 高台部貼り付け後ナデ 内面 横位ヘラミガキ	橙褐色 良	赤色スコ リア 雲母 小石粒	底部片	外面底部—体部 下縁にスス付着
7	須恵器 蓋	140×つまみ部径27×27 ロクロ成形 外面 天井部、体部中位一回転ヘラケズリ 下平—下端—ナデ つまみ 部は本体成形後接合 内面 ナデ	青灰 良	白色粒 長石多	1/4	内外面に重ね焼 きによる火だす き色調の変化が 見られる
8	土師器 小型甕	(130)×—×43 輪挽み 外面 口縁—頸部—ナデ 胴部上半—縦位ヘラ 内面 口縁—胴部上半—ナデ	赤褐色 赤黒灰褐色 良	白色粒 赤色スコ リア 雲母	口縁— 胴部 1/4	
9	土師器 甕	—×—×— 口唇部つまみ上げ 輪挽み 内外面 口縁—横ナデ	淡茶褐色 良	雲母石英 白色粒 小石粒	口縁片	
10	土師器 坏	—×(76)×(23) ロクロ成形 外面 体部中位—ナデ 底部—静止糸切り後回転ヘラケズリ 体部下端 —回転ヘラケズリ 内面 体部—底部—ナデ	淡褐色 良	雲母 砂粒	底縁片	墨書「□」 底部外面
11	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外面 ナデ 体部中位—ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色 良	雲母 砂粒	口縁片	墨書「十」 体部外面
12	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外面 底部一切り難し不明 回転ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色 良	雲母 砂粒	底縁片	墨書「□」 底部外面

1-005b

検出地区 D7-6G。台地縁辺部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-004、1-006、B101等がある。1-005aと重複関係にあるが本住居跡の方が新しい。住居跡の大部分は調査区外に延びている。

遺構 方形の住居跡と思われる。床は、黒色土とロームブロックとの混合土による床床で、全体にやや軟弱。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝、柱穴は検出されなかった。

竈は北壁側で部分的に検出された。PIは煙道部の一部と思われる。袖部、天井部、燃焼部ともに明確には検出されず、焼土、粘土等が散っていたことから判断した。

覆土は色調を基本とし、22層に分層され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中に多量に出土。墨書土器の出土がやや目立つ。

所見 出土遺物から奈良・平安期の竪穴住居跡と判断した。

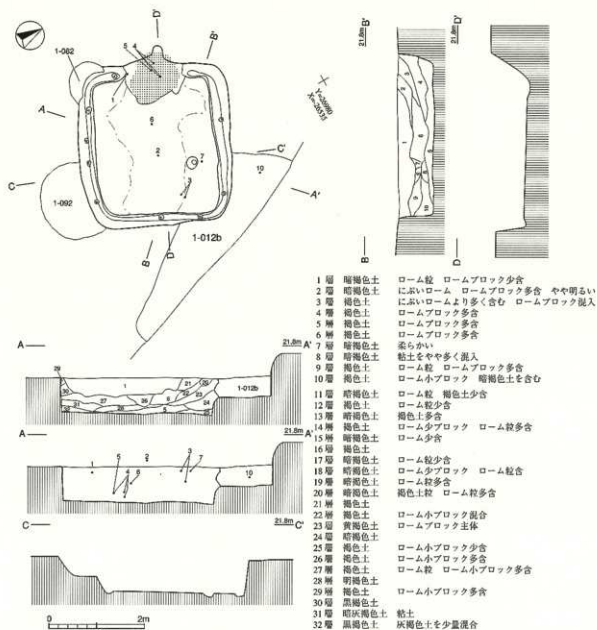


図 2-3-8 1-012a

1-012a

検出地区 D7-74G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB104、B105等がある。1-012bと重複関係にあるが本住居跡の方が新しい。住居跡の大部分は、調査区外に延びている。

遺 構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームの良好な床で住居跡中央に硬化面を広範囲に検出した。壁は、ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。P1を検出したが、用途は不明。柱穴は検出されなかった。

竈は西壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残存し、遺存状況は良好であった。燃焼部については焼土、灰、炭化物が多量に残され、燃焼部から煙道部にかけて赤化範囲が広範囲に広がっていた。

覆土は色調を基本とし、32層に分層され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺 物 覆土中に多量に出土。

所 見 出土遺物から奈良・平安期の竪穴住居跡と判断した。

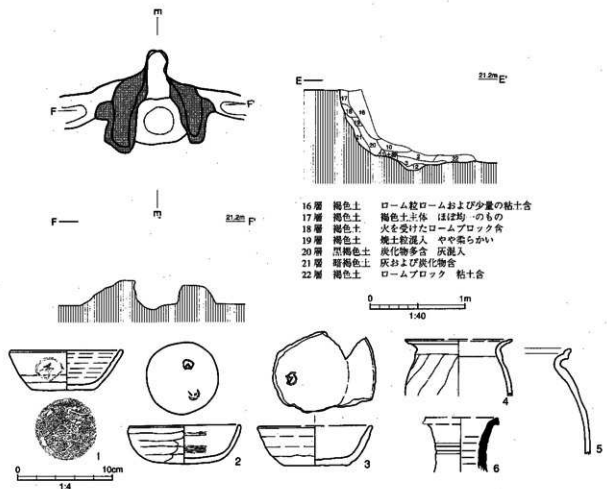


図 2-3-9 1-012a

表 2-3-5 1-012a遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	120×66×43 ロクロ成形 外面 ナテ 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 ナテ 体部～底部一タール状付着物	淡褐色 一部黒斑 良	雲母 白色粒 赤色スコリア	2/3	墨書「㊦」 体部外面
2	土師器 坏	120×82×41 輪積み 外面 口縁一横ナテ 体部一横位ヘラケズリ 底部一手持ちヘラケズリ 内面 ナテ 体部～底部一横位ヘラミガキ	暗茶灰褐 ～淡褐色 良	雲母石英 白色粒 小石粒赤色 スコリア	1/2	刻書 「□」「□」 底部内面
3	土師器 坏	(118)×67×42 ロクロ成形 外面 ナテ 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一切り離し不明 回転ヘラケズリ 内面 ナテ	淡褐色 良	雲母 赤色スコリア 小石粒	1/3	刻書「□」 底部内面
4	土師器 小型壺	(112)×-×(59) 輪積み ロクロ併用 口縁部ハの字状に囲き端部つまみ上げ 外面 口縁一横ナテ 胴上半一縦位ヘラケズリ 内面 口縁一横ナテ 頸部ヘラナテ 胴上半一ナテ	黒茶褐 ～橙褐色 良	白色粒	口縁～ 胴部	破片段階に二次 焼成を受けて いる
5	土師器 壺	-×-×- 輪積み 内外面 口縁一横ナテ 胴上半一ナテ	橙褐 良	雲母 石英 長石	口縁～ 胴上半部	
6	須恵器 長頸壺	(75)×-×(57) ロクロ成形 頸部中位外面に2条の沈線が廻る 内外面 ナテ	灰白 良	緻密	口縁～ 頸部片	外面に自然軸

(2) 掘立柱建物跡

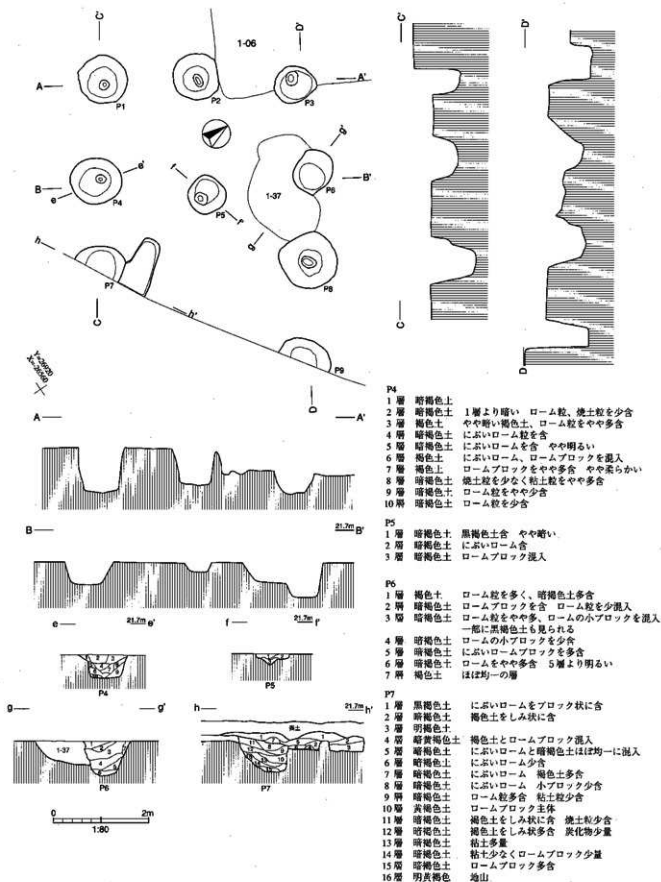


図2-3-10 B101

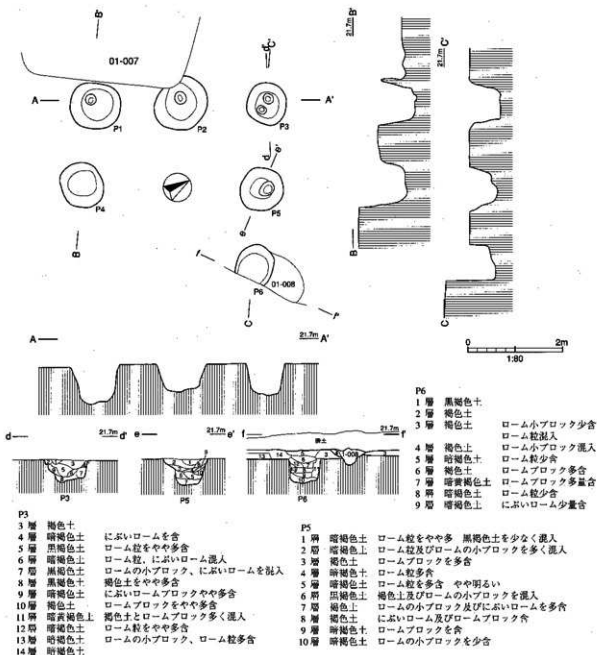


図 2-3-11 B102

B101 (I1-200)

検出地区 D7-16G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-006、1-005b等がある。1-006と重複関係にあるが本遺構の方が新しい。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺 構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、梁行2間(4.24m)で桁行3間以上、桁行きの主軸方向はN-55°-Wとなる庇付きの側柱の堀立柱建物跡と考えられる。底部分はP1~P3が相当すると考えられる。各柱穴の形状は不整形でしっかりと掘込まれていた。柱痕は検出されず、土層断面の観察等からも柱材は引き抜かれたと考えられる。

遺 物 柱穴覆土中から縄文土器(条痕文系土器、阿玉台式)が少量出土したが、本遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の堀立柱建物跡と判断した。

B102 (旧1-201)

検出地区 D7-25G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-007、B101等がある。1-007と重複関係にあるが本遺構の方が新しい。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺 構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、梁行2間(3.7m)で桁行2間或いは2間以上の側柱の掘立柱建物跡である。桁行きの主軸方向はN-56°-Wとなる。各柱穴の形状は不整形形でしっかりと掘込まれていた。柱痕は検出されず、土層断面の観察等からも柱材は引き抜かれたと考えられる。

遺 物 柱穴覆土中から縄文土器(条痕文系土器、)が少量出土したが、本遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

B103 (旧1-204b)

検出地区 D7-74G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-012a、B104等がある。1-004と重複関係にあるが本遺構の方が新しい。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺 構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、梁行2間(4.48m)で桁行2間或いは2間以上の側柱の掘立柱建物跡である。桁行きの主軸方向はN-40°-Eとなる。各柱穴の形状は不整形のものとなし、それぞれは、しっかりと掘込まれていた。

当初、住居跡内の攪乱と誤認し、土層観察は行わなかった。

遺 物 遺物は検出されなかった。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

B104 (旧1-204a)

検出地区 D7-74G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-012a、B103等がある。1-011と重複関係にあるが本遺構の方が新しい。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺 構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、梁行2間(4.24m)で桁行2間或いは2間以上の側柱の掘立柱建物跡である。桁行きの主軸方向はN-55°-Eとなる。P2とP3は出入口施設と考えられる。各柱穴の形状は不整形形でしっかりと掘込まれていた。

当、初住居跡内の攪乱と誤認し、土層観察は行わなかった。

遺 物 遺物は検出されなかった。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

B105 (旧1-075,76,77,78,79,80)

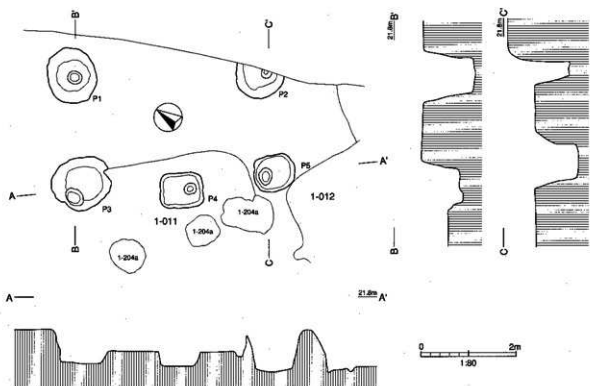
検出地区 D7-85G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-012a、B106等がある。1-028と重複関係にあるが本遺構の方が新しい。遺構の一部のみが検出されたに過ぎないが、掘立柱建物跡として捉えた。

遺 構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、2棟の掘立柱建物跡が重複しているものと考えられる。各柱穴の形状は不整形形でしっかりと掘込まれていた。

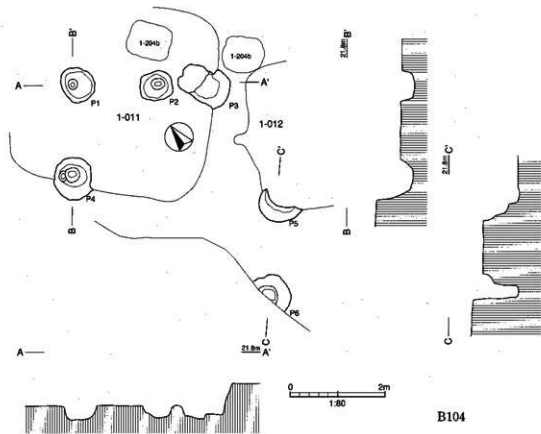
当、初住居跡内の攪乱と誤認し、土層観察は行わなかった。

遺 物 遺物は検出されなかった。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。



B103



B104

图 2-3-12 B103·B104

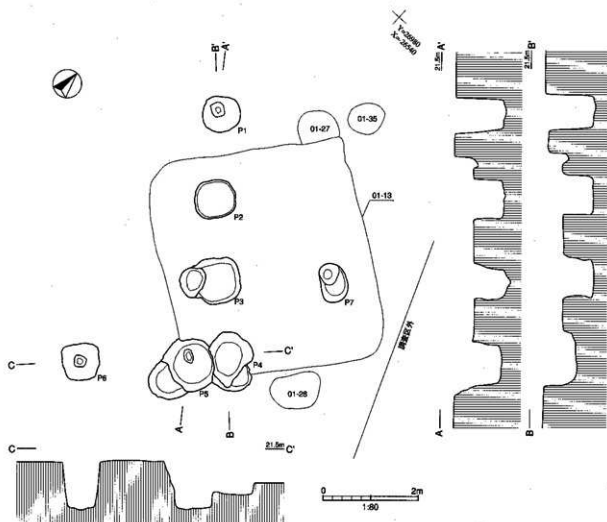


図 2-3-13 B105

B106 (旧1-202a)

検出地区 D7-86G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB105等がある。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺 構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、梁行2間(3.38m)で桁行2間或いは2間以上の側柱の掘立柱建物跡である。桁行きの主軸方向はN-59°-Eとなる。各柱穴の形状は不整形円でしっかりと掘込まれていた。

当、初住居跡内の攪乱と誤認し、土層観察は行わなかった。

遺 物 遺物は検出されなかった。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

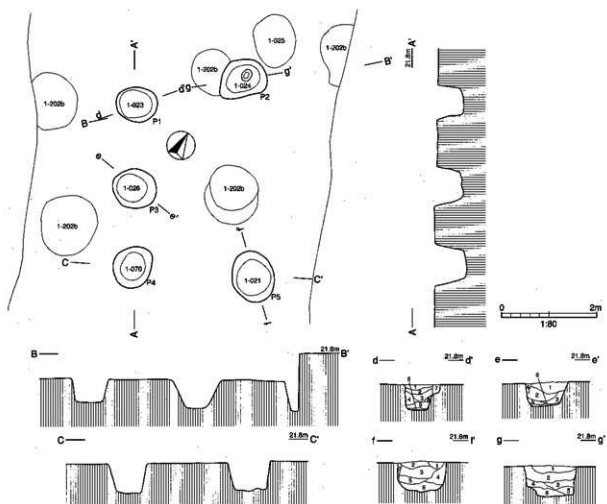
I101 (旧1-202b)

検出地区 D7-86G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB105等がある。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺 構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、2列の構列或いは掘立柱建物跡の一部として捉えた。各柱穴の形状は不整形円でしっかりと掘込まれていた。

遺 物 遺物は検出されなかった。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の遺構として捉えた。B106、I101周辺は土坑が密集している地域で、上記のような組み合わせを想定したが他にも組み合わせも可能と思われる。



1-021

- | | | |
|-----|------|--------------------------------|
| 1 層 | 照褐色土 | 褐色土を少量混入 |
| 2 層 | 暗褐色土 | やや明るい暗褐色土 にぶいロームを少量混入 |
| 3 層 | 暗褐色土 | ロームブロックを混入 2層より細かい |
| 4 層 | 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロックを混入 3層より明るい |
| 5 層 | 暗褐色土 | ロームブロックを多く混入 |
| 6 層 | 暗褐色土 | ロームの小ブロック ローム粒を多量
黒褐色土を少量混入 |
| 7 層 | 明褐色土 | ロームを多量 |

1-023

- | | | |
|-----|------|-----------------|
| 1 層 | 暗褐色土 | |
| 2 層 | 暗褐色土 | 褐色土ブロックを混入 |
| 3 層 | 暗褐色土 | 褐色土ブロックを主体とする |
| 4 層 | 褐色土 | にぶいロームをより多量 |
| 5 層 | 褐色土 | 4層よりやや暗い ほぼ均一の層 |
| 6 層 | 明褐色土 | にぶいロームを多量 |
| 7 層 | 褐色土 | ほぼ均一の層 |
| 8 層 | 褐色土 | ロームの小ブロックを少量 |

1-024

- | | | |
|-----|------|------------------------|
| 1 層 | 暗褐色土 | 褐色土をしみ状に混入 |
| 2 層 | 褐色土 | にぶいロームの小ブロックを少量混入 |
| 3 層 | 暗褐色土 | やや暗い暗褐色土を主体にロームブロックを混入 |
| 4 層 | 褐色土 | 暗褐色土及び大型のロームブロックを混入 |
| 5 層 | 暗褐色土 | ほぼ均一の層 |
| 6 層 | 明褐色土 | にぶいロームをやや多く混入 |

1-026

- | | | |
|-----|------|---------------------|
| 1 層 | 暗褐色土 | にぶいロームを少量混入 |
| 2 層 | 暗褐色土 | 褐色土をしみ状に混入 |
| 3 層 | 暗褐色土 | ほぼ均一の層 |
| 4 層 | 暗褐色土 | ソフトロームを多量 やや明るい暗褐色土 |
| 5 層 | 褐色土 | ロームを多量 |
| 6 層 | 褐色土 | ロームを多くロームブロックを少量混入 |

図 2-3-14 B106

1-025

検出地区 D7-86G。台地平坦部に位置する。周囲の奈良・平安時代の遺構としてB106、I101等があり、それらと組み合わせない土坑の一つである。

遺 構 楕円形の土坑で2基の土坑の重複である。坑底は平坦で底面に小穴1基を検出している。しっかりとした掘込みをもち、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺 物 遺物は検出されなかった。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えた。

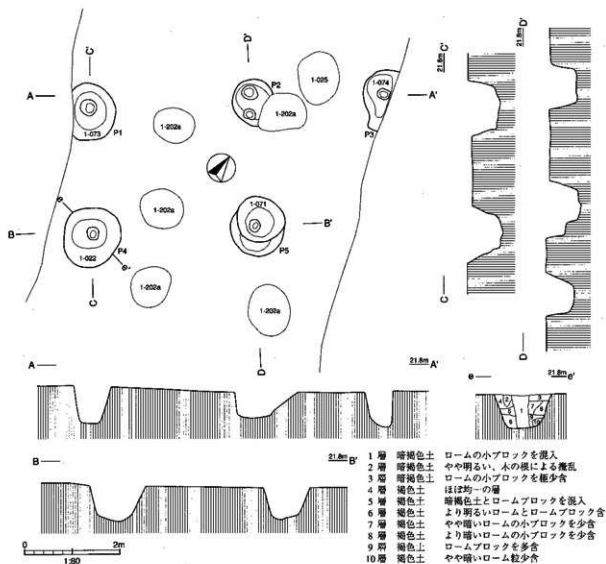


図 2-3-15 I101

1-072

検出地区 D7-86G。台地平坦部に位置する。周囲の奈良・平安時代の遺構としてB106、I101等があり、I-025同様、それらと組み合わない土坑の一つである。

遺 構 不整形円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦で、斜めに立ち上がる。

遺 物 遺物は検出されなかった。

所 見 遺構の形状等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えた。

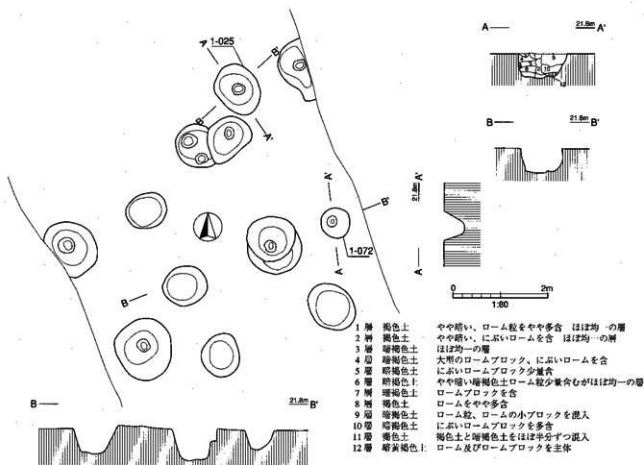
I102 (I101-041、52、53、54)

検出地区 D7-7G。台地平坦部に位置する。周囲の奈良・平安時代の遺構としてI-024等がある。

遺 構 4基の土坑で構成され、それぞれが不整形円形もしくは楕円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。P3(I-041)は2基の土坑の重複である。

遺 物 本土坑群に伴う遺物は検出されなかったが、P3の覆土中からは、土師器、須恵器小片に混ざり、縄文土器(条痕文土器、阿玉台式)の混入が少量認められた。

所 見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えた。



1-025・1-072

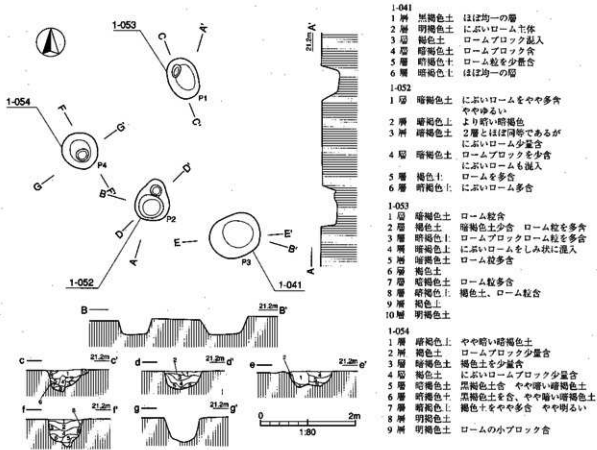
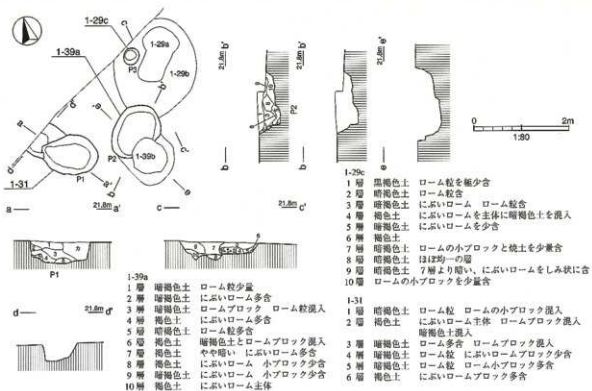


図 2-3-16 1-025・1-072・1102



I103

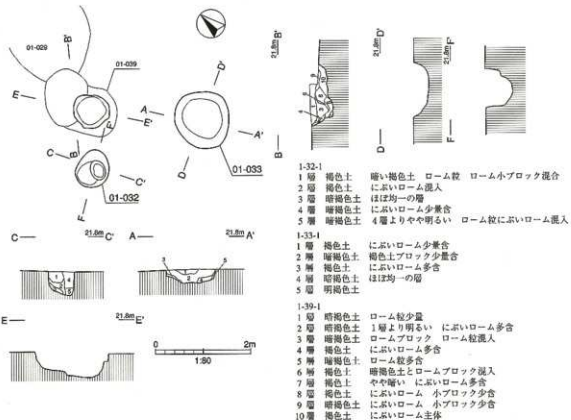


図 2-3-17 I103・I104

I103 (旧1-029c、31、39a)

検出地区 D7-25G。台地平坦部に位置する。周囲の奈良・平安時代の遺構として1-007、I104等がある。遺構の一部は調査区外に延びていると思われる。

遺 構 3基の土坑で構成され、それぞれが不整形形あるいは楕円形の土坑でしっかりとした掘込み

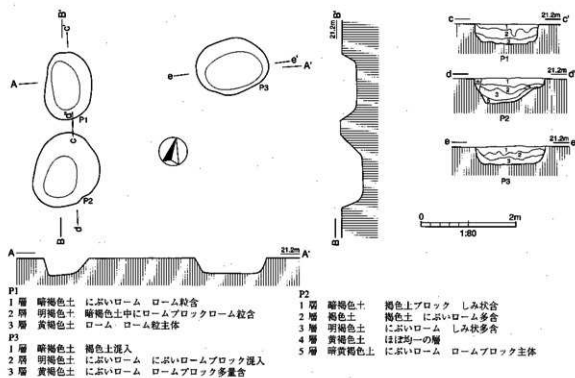


図2-3-18 I105

をもつ。P1~P3までそれぞれが他の土坑と重複関係にある。

遺物 本土坑群に伴う遺物は検出されなかったが、各土坑の覆土中からは、土師器、須恵器小片に混ざり、縄文土器(条痕文系土器、阿玉台式)の混入が少量認められた。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えた。

I104 (旧I-032、33、39b)

検出地区 D7-25G。台地平坦部に位置する。周囲の奈良・平安時代の遺構としてI-007、I103等がある。

遺構 3基の土坑で構成され、それぞれが不整形円形或いは楕円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。P3は他の土坑と重複関係にある。

遺物 本土坑群に伴う遺物は検出されなかったが、各土坑の覆土中からは、土師器、須恵器小片に混ざり、縄文土器(条痕文系土器、阿玉台式)の混入が少量認められた。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えた。

I105 (旧I-048、49、50)

検出地区 D7-54G。台地平坦部に位置する。他の奈良・平安時代の遺構から離れ孤立して立地している。

遺構 3基の土坑で構成され、それぞれが不整形円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。

遺物 本土坑群に伴う遺物は検出されなかったが、各土坑の覆土中上層から縄文土器(条痕文系土器)の混入が少量認められた。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えたが、尚、検討の余地が残る。

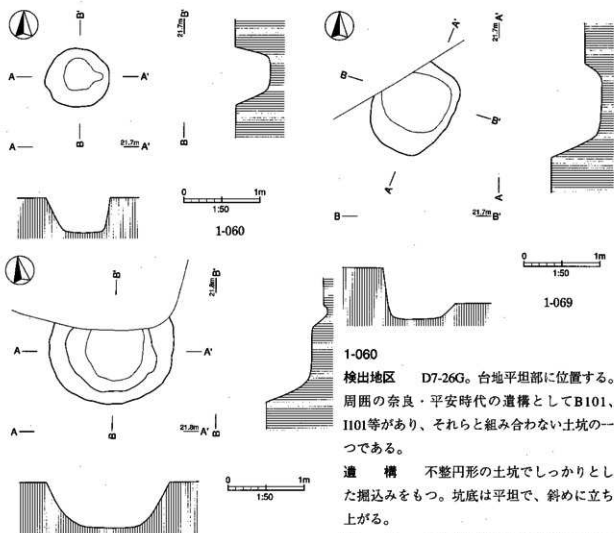


図 2-3-19 1-060・1-069・1-092

覆土中に縄文土器(条痕文系土器、阿玉台式)が少量混入していた。

所見 遺構の形状等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えた。或いはB101の一部かもしれない。

1-069

検出地区 D7-16G。台地平坦部に位置する。周囲の奈良・平安時代の遺構としてB101等があり、それらと組み合わない土坑の一つである。1-006と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。

遺構 不整形円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦で、斜めに立ち上がる。

遺物 本土坑に伴う遺物は検出されなかった。覆土中に縄文土器(阿玉台式)が少量混入していた。

所見 遺構の形状等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えた。或いはB101の一部かもしれない。

1-092

検出地区 D7-85G。台地平坦部に位置する。周囲の奈良・平安時代の遺構としてB104、等があり、それらと組み合わない土坑の一つである。1-012と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。

遺構 不整形円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦で、斜めに立ち上がる。

遺物 遺物は検出されなかった。

所見 遺構の形状等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、当該期の遺構として捉えた。

第2項 第2群の遺構と遺物

境堀遺跡の調査区北側の細長い調査区で検出された一群を第2群とした。竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟が検出された。未調査区域を多く含むため、グループ化に問題もあるが、暫定的な措置としてこのようにしてみた。未調査区域を考慮に入れば検出された遺構数は当然ながら増え、また、新たな集落展開が見えるかと思われる。

(1) 竪穴住居跡

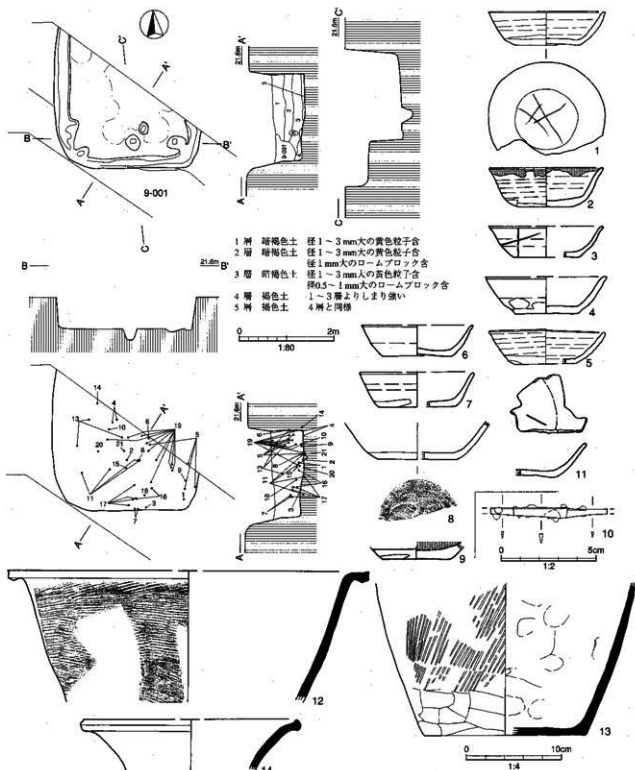


図 2-3-20 9-002

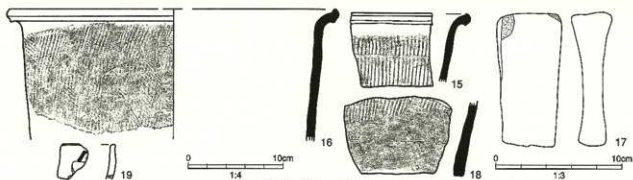


図 2-3-21 9-002

表 2-3-6 9-002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の 特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	120×66×36 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り後回転ヘラケズリ	ロクロ成形 口唇やや角張状を呈する	明褐色 やや蒸	砂粒 金雲母	1/2	線刻「□」 底部外面
2	土師器 坏	120×70×42 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り 手持ちヘラケズリ	ロクロ成形	褐色		1/3	外面にスス状炭 化物付着 灯明 皿として使用?
3	土師器 坏	(120)×72×33 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り 回転ヘラケズリ	ロクロ成形	褐色	緻密	1/4	線刻「×」 体部外面
4	土師器 坏	(126)×67×39 外面 底部-回転ヘラ切り	ロクロ成形	褐色	赤色スコ リアア少	1/4	
5	土師器 坏	121×65×38 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り後回転ヘラケズリ	ロクロ成形 歪みを持つ 口唇内割ぎ状	褐色 やや蒸	砂粒 雲母	4/5	外面スス付着
6	土師器 坏	(116)×(74)×33 外面 底部-回転糸切り 回転ヘラケズリ	ロクロ成形	淡褐色	緻密	1/4	
7	土師器 坏	120×80×37 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り 回転ヘラケズリ	ロクロ成形	褐色	緻密	1/4	
8	土師器 坏	-(84)×(38) 外面 底部-回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面 ミガキ	ロクロ成形	淡褐色 黒	緻密		体部- 底部 内黒
9	土師器 坏	-(70)×(13) 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ 内面 ミガキ	ロクロ成形	淡褐色 黒		底部片	内黒
10	鉄器 刀子	長軸122.5×短軸7.0×厚さ2.0 重量11.8g 10.0 4.0 5.5 2.0					
11	土師器 坏	-()×36 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面 体部-ミガキ	ロクロ成形	淡褐色	緻密	口縁- 底部	線刻「□」 底部内面
12	須恵器 甕	(380)×-×-		良	緻密	口縁- 胴部片	
13	須恵器 甕	-(170)×(162) 外面 胴下半-平行タタキ 胴下半-ヘラケズリ 内面 胴下半-ヘラナデ及び指痕によるナデ、圧痕		暗茶褐色	砂粒 白色粒多	胴部- 底部片	
14	須恵器 甕	(232)×-×- ロクロ成形		灰褐色	雲母 石英少	口縁片	

15	須恵器 甕	-X-X- ロク口成形	襷裾 普	蓋書 石英少	口縁片	
16	須恵器 甕	-X-X- 外面 胴下半~下端-タタキ後ヘラケズリ	灰 普	石英少	胴下半 ~底部	
17	石器 砥石	長さ105×幅46×厚さ16 重量183.2g	灰白			
18	須恵器 甕	(348)X-X- ロク口成形 口縁部最上段のみ輪積 外面 胴部-タタキ目	灰 良	蓋書 石英少	口縁~ 胴部	
19	土師器 坏	-X-X- ロク口成形	淡褐 良	織密	口縁片	蓋書「口」 体部外面

9-002

検出地区 C4-64G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として9-004がある。中近世以降の溝、9-001と重複関係があるが、本住居跡の方が古い。遺構の一部は調査区外に広がっている。

遺 構 方形或いは長方形の小型の住居跡と考えられる。床は、ロームと褐色土の混合土による貼床で、住居跡中央に硬化面を検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周すると思われる。P1については出入口施設と考えられる。P3・4については、掘り込みは浅いが、柱穴の可能性はある。竈は、検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、住居跡の覆土としては5層に分層された。覆土中に若干、焼土を検出してはいるものの、概ね自然堆積に依る埋没が想定される。

遺 物 床面直上~覆土上層にかけて比較的多量に(90点程度)出土。床面直上から灯明皿、砥石、刀子が出土している。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の堅穴住居跡と判断した。

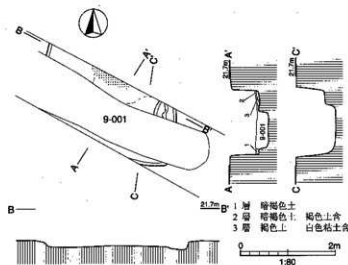


図2-3-22 9-004

9-004

検出地区 C4-85G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として9-002がある。中近世以降の溝、9-001と重複関係があるが、本住居跡の方が古い。遺構の大部分は調査区外に広がっている。

遺 構 方形の小型の住居跡と考えられる。床は、ロームを主体とした床で少量の暗褐色土、褐色土が混ざる。住居跡中央に硬化面を検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は一部で検出。小穴等の付属施設については検出されなかった。竈も、検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、住居跡の覆土としては3層に分層された。床面直上で粘土を広範囲で検出してはおり、人為的な埋め戻しが想定される。

遺 物 覆土中から土師器、須恵器小片を少量出土。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の堅穴住居跡と判断した。

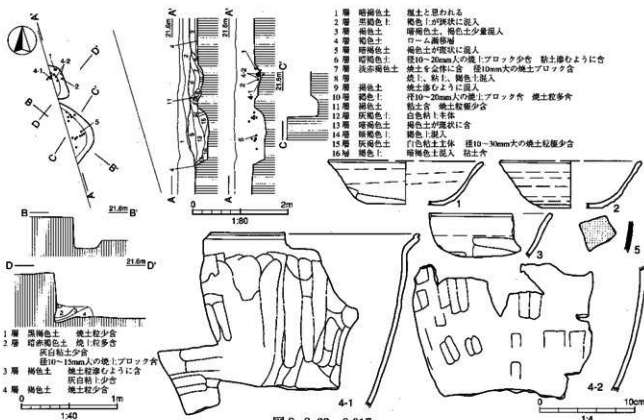


図 2-3-23 9-017

表 2-3-7 9-017遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	外面 体部下端—手持ちヘラケズリ 底部—手持ちヘラケズリ	(164)×(84)×46 ロクロ成形	褐色 暗赤	緻密	1/3	
2	土師器 坏	外面 体部下端—ヘラケズリ 底部—ヘラケズリ	(150)×(66)×50 ロクロ成形	褐色 暗赤	砂粒少	1/4	
3	土師器 坏	外面 体部下端—ヘラケズリ	—×—×— ロクロ成形	暗赤褐	砂粒少	口縁片	
4-1	土師器 壺	外面 胴上半—縦位のヘラケズリ 胴中位—横位のヘラケズリ	—×—×— ロクロ成形	褐色 暗赤	雲母少	口縁片	
4-2	土師器 壺	外面 胴上半—縦位のヘラケズリ	—×—×— ロクロ成形	暗赤	雲母少	胴部片	
5	灰釉陶器 埴輪壺	—×—×—	—×—×—	灰白 良	緻密	胴部片	

9-017

検出地区 D6-41G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB107、I106がある。

遺構の大部分は調査区外に広がっている。

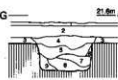
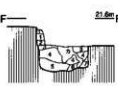
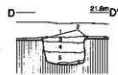
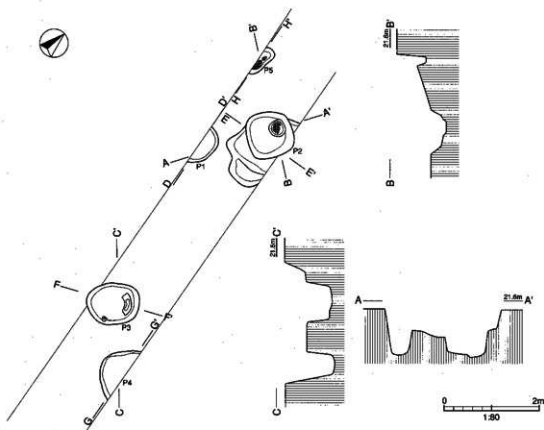
遺構 方形の小型の住居跡と考えられる。床は、ソフトロームの床で、壁は、ロームの壁では垂直に立ち上がる。小穴等の付属施設は検出されなかった。竈については、煙道部を一部検出した。されなかった。

覆土は色調を基本とし、住居跡の覆土としては12層に分層された。

遺物 覆土中から少量(30点程度)出土。灰釉陶器が1点出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。

(2) 掘立柱建物跡



- | | | |
|----|------|-----------------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | 径20mm以下の黄色粒子少含 |
| 2層 | 褐色土 | 漸移層 |
| 3層 | 黒褐色土 | 褐色土少量混入径10~20mm大の黄色粒子含 |
| 4層 | 暗褐色土 | 径10~20mm大のロームブロック含 |
| 5層 | 暗褐色土 | 褐色土混入 径30mm大のロームブロック含 |
| 6層 | 褐色土 | |
| 1層 | 暗褐色土 | 粘土混入 |
| 2層 | 暗褐色土 | 褐色土が塵状に含 |
| 3層 | 暗褐色土 | 径10~20mm大の黄色粒子含 |
| 4層 | 暗褐色土 | 褐色土が塵状に含 径10~20mm大の黄色粒子含 |
| 5層 | 褐色土 | 暗褐色土混入 径10~20mm大のロームブロック含 |
| 6層 | 褐色土 | 暗褐色土少量混入 径10~20mm大のロームブロック含 |
| 7層 | 褐色土 | 暗褐色土が均一に混台 |
| 8層 | 褐色土 | 径20~30mm大のロームブロック含 |
| 9層 | 褐色土 | 径30~40mm大のロームブロック含 |
| 1層 | 褐色土 | |
| 1層 | 暗褐色土 | |
| 2層 | 暗褐色土 | 褐色土混入 |
| 3層 | 暗褐色土 | 褐色土混入 径10~20mm大の黄色粒子含 |
| 4層 | 暗褐色土 | 部分的にローム含 径10mm大のロームブロック少含 |
| 5層 | 黒褐色土 | 径10mm大のロームブロック少含 |
| 6層 | 暗褐色土 | 径50mm大のロームブロック混入 |
| 7層 | 暗褐色土 | 径50mm大のロームブロック含 |
| 1層 | 褐色土 | 道路の為硬化 |
| 2層 | 暗褐色土 | 褐色土上含 |
| 3層 | 褐色土 | 漸移層 |
| 4層 | 暗褐色土 | 径10~30mm大のロームブロック少含 |
| 5層 | 暗褐色土 | 径10~30mm大のロームブロック少含 |
| 6層 | 褐色土 | 径10mm大のロームブロック含 |
| 7層 | 黒褐色土 | 径10~30mm大のロームブロック少含 |
| 8層 | 褐色土 | 暗褐色土混入 径50mm大のロームブロック少含 |
| 9層 | 褐色土 | 暗褐色土混入 |
| 1層 | 暗褐色土 | 粘土混入 |
| 2層 | 暗褐色土 | 径30mm大のロームブロック含 |
| 3層 | 暗褐色土 | 黒褐色土が雜むように含 |
| 4層 | 褐色土 | |

図 2-3-24 9-018・9-019・9-020・9-021・9-022

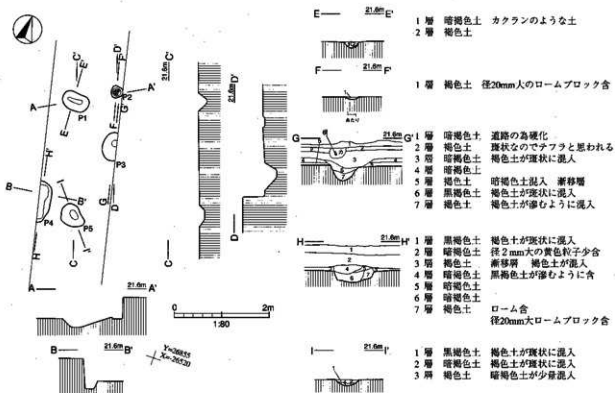


図 2-3-25 9-018・9-019・9-020・9-021・9-022

B107 (旧9-018、19、20、21、22)

検出地区 D7-86G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として9-017、I106等がある。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺構 全体が検出されて無いため、梁行、桁行等は不明である。主軸方向はN-●-Eとなると思われる。各柱穴の形状は不整形でしっかりと掘込まれていた。P2、P5の坑底において「あたり」と考えられる硬化面を検出している。

覆土は、それぞれロームブロック等を含む暗褐色土系の土が充填され、柱材を固定するための突き固めた土と考えられる。

遺物 柱穴、覆土中から小破片が少量出土した。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。P1～P4までが掘立柱建物跡の本体でP5が底部分の柱穴と考えたが、なお、検討の余地がある。

I107 (旧9-025、26、27、28、29)

検出地区 D7-86G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として9-017、B107等がある。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺構 全体が検出されて無いため、梁行、桁行等は不明である。各柱穴の形状は不整形で浅い。P2の坑底において「あたり」と考えられる硬化面を検出している。

遺物 柱穴、覆土中から小破片が少量出土した。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

第3項 第3群の遺構と遺物

境塚遺跡の奈良・平安時代の第3群の集落は、調査区中央に展開する1群で、竪穴住居跡13軒、堀立柱建物跡11棟、土坑8基が検出された。北側の未調査区域を考慮に入れば、更に広がる可能性がある。第3群の中で南側に展開する小型の住居跡については、8世紀後半、北側の堀立柱建物跡と近接する住居跡群については9世紀前半の時期が与えられるかと思われる。また、境塚遺跡第3群は、隣接する向境遺跡第3群と接しており、本来、両者一帯となって集落を形成していたと考えられる。

(1) 竪穴住居跡

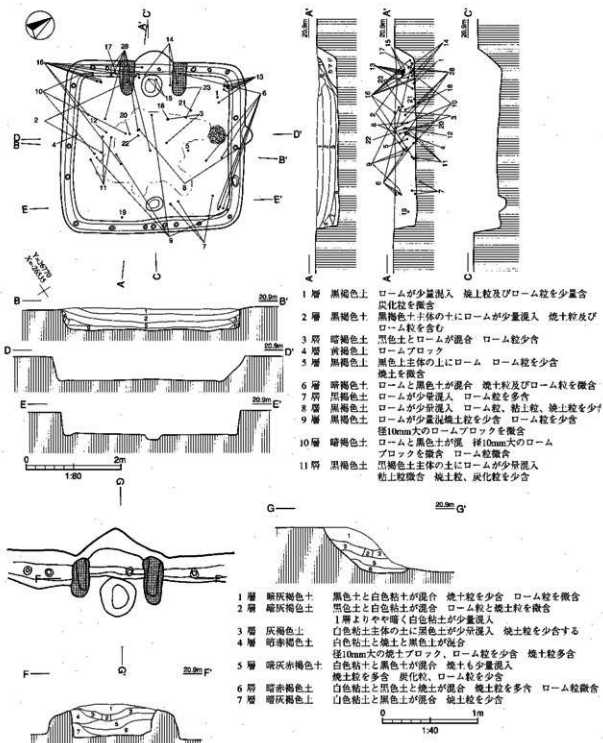
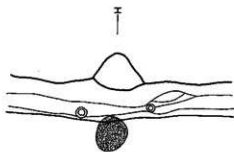


図 2-3-26 8-003



- 1層 暗褐色土 暗褐色土に粘土とロームが少量混入 焼土粒を多含
ローム粒を少含 径5mmの焼土ブロックが混入
- 2層 暗褐色土 暗褐色土に粘土とロームが少量混入 焼土粒及びローム粒少含
径5mm程度の焼土ブロック混入
- 3層 暗褐色土 暗褐色土に粘土とロームが少量混入 焼土粒及び粘土粒を微含
ローム主体の上に暗褐色土が少量混入
- 4層 暗褐色土 暗褐色土とロームが混入 焼土粒、粘土粒を微含

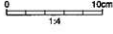
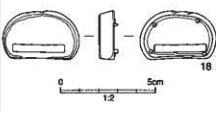
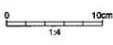
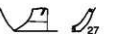
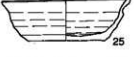
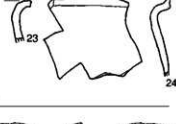
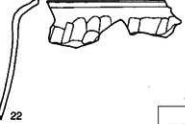
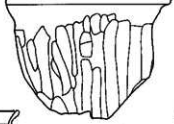
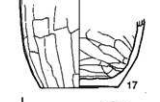
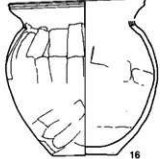
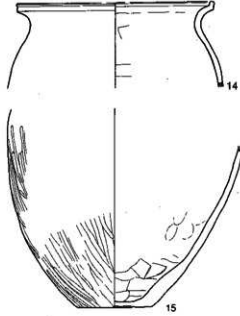
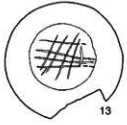
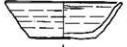
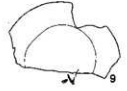
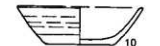
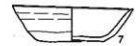
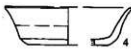


図 2-3-27 8-003

表2-3-8 8-003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須臾器 高台付坏	—×—×— ロクロ成形	灰 良	緻密	口縁片	
2	土師器 坏	162×68×40 ロクロ成形 外面 体部下端—ヘラケズリ 底部—回転ヘラ切り	暗褐 青	砂粒少	1/4	
3	土師器 坏	140×72×40 ロクロ成形 外面 体部下端—ヘラケズリ 底部—ヘラ切り 内面 ミガキ	赤褐色 砂黒 青	緻密	1/5	内黒
4	土師器 坏	162×89×50 ロクロ成形 口縁外反 底部やや上げ底 外面 体部下端—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り後回転ヘラケズリ 後ヘラミガキ 内面 磨なヘラミガキ	橙褐 青	砂粒	2/3	墨書「①」 体部外面 内黒
5	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外面 体部下端—ヘラケズリ 底部—回転ヘラ切り	褐 青	砂粒		
6	土師器 坏	120×76×39 ロクロ成形 歪みを持つ逆台形状 外面 体部下端—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐 青	砂粒	4/5	墨書「田」 体部外面
7	土師器 坏	126×70×39 ロクロ成形 歪みを持つ 体部外傾 外面 体部下端—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り後回転ヘラケズリ	明橙褐 青	砂粒 雲母	完形	
8	土師器 坏	(114)×57×43 ロクロ成形 体部外傾 上半でやや括れる 口縁外 反 底部小さく 器高や高い 底部内面丸みを持つ 外面 体部下端—底部—回転ヘラケズリ	明褐 青	砂粒 雲母	1/2	
9	土師器 坏	(121)×(72)×37 ロクロ成形 外面 体部下端—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 疎らにヘラミガキ 器面摩耗し、はっきりしない	暗橙褐 青	砂粒 雲母	1/2	墨書「□」 底部外面
10	土師器 坏	132×70×40 ロクロ成形 外面 体部下端—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 青	緻密	1/4	
11	土師器 坏	(118)×(67)×34 ロクロ成形 体部外傾 外面 体部下端—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 疎らにヘラミガキ	暗橙褐 青	砂粒 雲母 赤色粒	1/2	内面スス付着
12	土師器 坏	131×74×40 ロクロ成形 外面 体部下端—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 青		1/6	
13	土師器 坏	127×71×40 ロクロ成形 体部外傾 外面 底部—回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 口縁—体部—一部ヘラミガキ	明橙褐 青	砂粒 雲母	4/5	縁刺「□」 底部外西 体部—底部外面 スス付着
14	土師器 壺	(208)×—×(91) 口縁外反 上端つまみ上げられる 外面凹線状に調整 外面 口縁—頸部—横ナデ 胴上半—ヘラケズリ 内面 口縁—頸部—横ナデ 胴上半—ヘラナデ	橙褐 青	粗砂粒 雲母多	口縁— 胴上半	
15	土師器 壺	—×78×(211) 外面 胴下半—下端—ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 内面 胴下半—下端—ヘラナデ 底部ヘラケズリ	赤褐色 暗褐 青	粗砂粒 雲母多	胴底— 底部	
16	土師器 小型壺	(143)×67×166 口縁外反 上端つまみ上げられる 外面凹線状に調整 外面 口縁—頸部—横ナデ 胴上半—縦位のヘラケズリ 胴下半—下端— 斜位のヘラケズリ 内面 口縁—頸部—横ナデ 胴上半—下端—ヘラナデ	赤褐色 暗褐 青	砂粒 白色粒		
17	土師器 小型壺	—×82×(95) 回転台 外面 胴下半—下端—ヘラケズリ 底部—回転糸切り 内面 胴下半—下端—ヘラナデ	橙褐 青		1/3	

18	青銅器 丸刷	長軸40×短軸24×厚さ10 重量17.9g				
19	鉄滓	長さ80×幅90×厚さ24 重量182.6g				錆付着 裏面に土砂付着
20	鉄器 刀子?	長軸35.5×短軸7×厚さ2 重量2.8g				
21	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形	橙褐 音	緻密	口縁へ 胴上半	
22	土師器 甕	-X-X- 外面 胴上半一縦位のヘラケズリ	褐 音	緻密	体部片	墨書「田」 体部外面
23	土師器 甕	-X-X- ロクロ成形 外面 胴上半一縦位のヘラケズリ	砂橙 淡褐 音	緻密	口縁片	
24	土師器 甕	-X-X- ロクロ成形 口唇つまみ上げ	褐 音	砂粒多	口縁片	墨書「□」 体部外面
25	土師器 坏	(133)×80×44 ロクロ成形 口縁外反 歪みを持つ 外面 体部下端～底部一回転ヘラケズリ	茶褐 音	砂粒 赤色粒	1/2	
26	土師器 坏	134×(86)×40 ロクロ成形 外面 体部下端～ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り	褐 音		1/5	
27	土師器 坏	-X(70)×(25)	砂淡褐 淡褐 音	緻密	体部～ 底部	
28	土師器 皿	180×64×20 ロクロ成形 平たい皿? 口唇厚みを持つ 外面 体部下半～底部一回転ヘラケズリ	明褐 やや悪	砂粒 雲母	1/2	
29	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形	褐 音	緻密	口縁片	墨書「」 体部外面
30	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形	淡褐 音	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
31	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形	橙褐 音	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
32	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形	砂橙褐 淡褐 音	緻密	底部片	墨書「□」 底部外面

8-003

検出地区 D5-64G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB108等がある。

遺構 方形の住居跡である。床は、ロームを主体とした貼床で、住居跡中央に硬化面を広範囲に検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。床面で小穴を1基検出。出入口施設と考えられる。周溝は全周する。

竈は2基検出された。KAは住居跡西壁ほぼ中央で検出され、両袖、天井部ともに残存し良好な遺存状況であった。天井部において土器の差込口を確認することができた。燃焼部については、若干の掘り込みが認められ、赤化するほどではないが、熱を受け劣化している状況は確認できた。煙道部は、斜めに立ち上がり、燃焼部同様、劣化する状況が確認できた。また、周溝は竈の下を巡っていた。天井部、袖の検出状況から本竈は住居跡絶時に壊されることなく、自然崩壊したものと考えられる。KBは、煙道の一部と燃焼部の火床を確認したに過ぎなかった。以上の状況から、本住居跡から検出された2基の竈は、KBからKAへの作り替えと考えられる。

覆土は色調を基本とし、11層に分層され、覆土下層から焼土、ロームブロック等を検出していることから、人為的な埋め戻しの後自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量(350点程度)出土。椀状鉄滓、帯金具、陶書土器などの出土は注目される。

所見 出土遺物から平安時代の竪穴住居跡と判断した。また、B108(8-010)出土遺物と接合する遺物があり、両者に有機的な関連が想定される。

8-004

検出地区 D5-56G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として3-002、4-004、B109、B110、B111等がある。中近世以降の溝と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

遺構 隅丸長方形の住居跡と思われる。床は、ロームと黒色土の混合土による貼床で、住居跡中央に硬化面を検出。壁は、ロームの壁で浅く、斜めに立ち上がる。周溝は一部で検出。竈についても検出されなかった。

P1～P3は、住居跡絶後に掘られた土坑で本住居跡に伴わない。検出された焼土も土坑群に伴うものと考えられる。検出された土坑群は形状等から判断して、掘立柱建物跡の一部と考えられる。

覆土は色調を基本とし、住居跡の覆土としては2層に分層された。床面で、焼土、炭化材等を検出したことから人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土下層にかけて少量(70点程度)出土。床面直上から鉄製品が出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。

3-002

検出地区 D5-66G。台地先端部から谷頭の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として4-004、B108等がある。中近世以降の溝と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

遺構 方形の住居跡である。床は、ロームと暗褐色土の混合土による貼床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出し、更に中央で熱を受け赤化した範囲が認められた。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。付属施設として小穴5基を検出した。P1～P4は柱穴でP5は用途不明のピットである。周溝は全周する。

竈は住居跡北壁ほぼ中央で検出された。境掘遺跡、隣接する向境遺跡の中で、最大級の規模の竈である。片袖のみの検出で、天井部は崩落していた。燃焼部において掘込みを検出した。明瞭な火床や熱を受けて劣化した痕跡は検出できなかった。煙道部に関しては、赤化範囲が認められた。

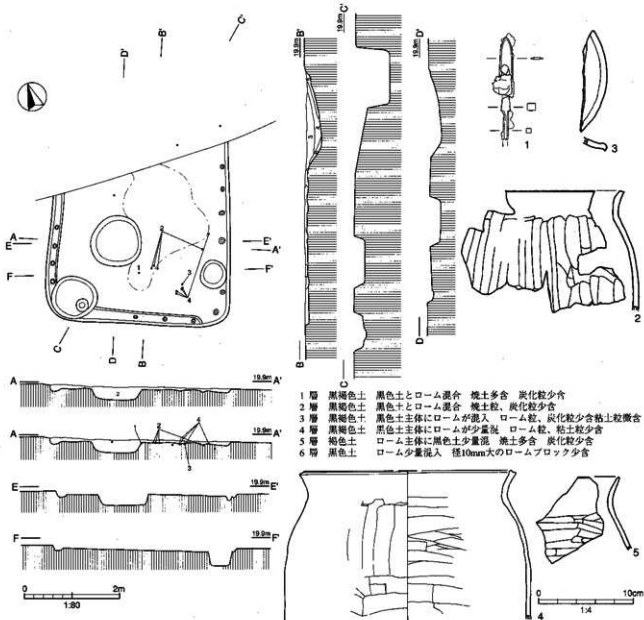


図 2-3-28 8-004

表 2-3-9 8-004遺物観察表

(単位:mm)

種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 鉄器 鉄鏝	長軸108×短軸13.0×厚さ2.0 重量21.6g 8.5 7.5 5.0 5.0					
2 土師器 甕	-X-X- ロクロ成形 「口縁面取りを行い、平出面を作る		①暗褐色 ②暗赤褐色	長石石英 赤色スコ リア 砂粒各少	口縁片	
3 土師器 蓋	-X-X- ロクロ成形 内面 丁寧なミガキ		褐色	緻密	口縁片	
4 土師器 甕	(219)×-(157) 口縁受け口状 上端つまみ上げられる 外面稜を持つ 頸部緩やかな「く」の字状 外面 口縁～頸部一横ナデ 胴上半一横位のヘラケズリ 胴下半一横位のヘラケズリ 内面 口縁～頸部一横ナデ 胴部一ヘラナデ		暗褐色	砂粒	口縁～胴部片	
5 土師器 甕	-X-X- 外面 口縁～頸部一横ナデ 胴上半一横位のヘラケズリ		褐色		口縁片	

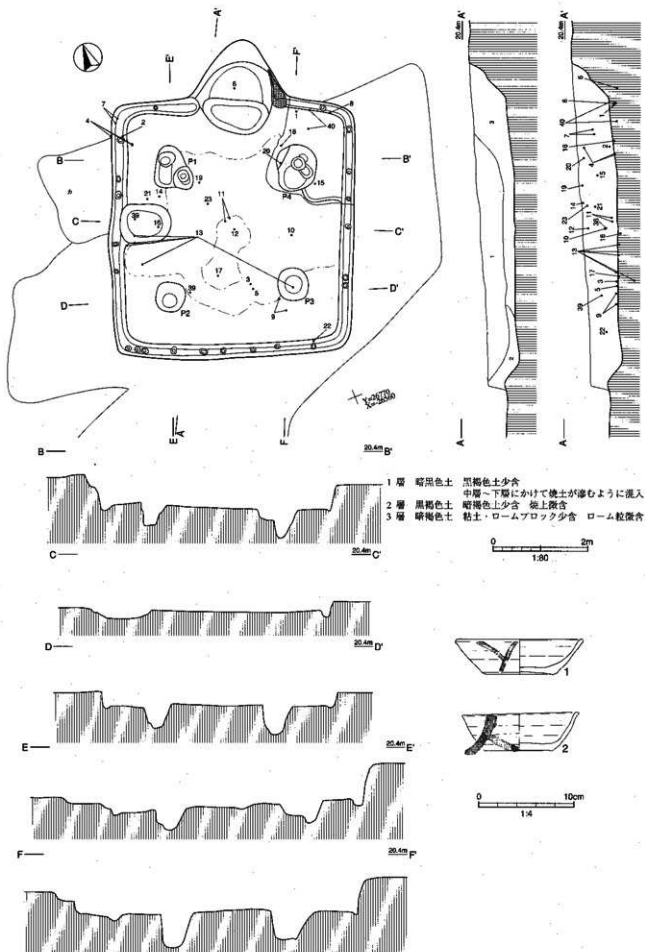


図 2-3-29 3-002

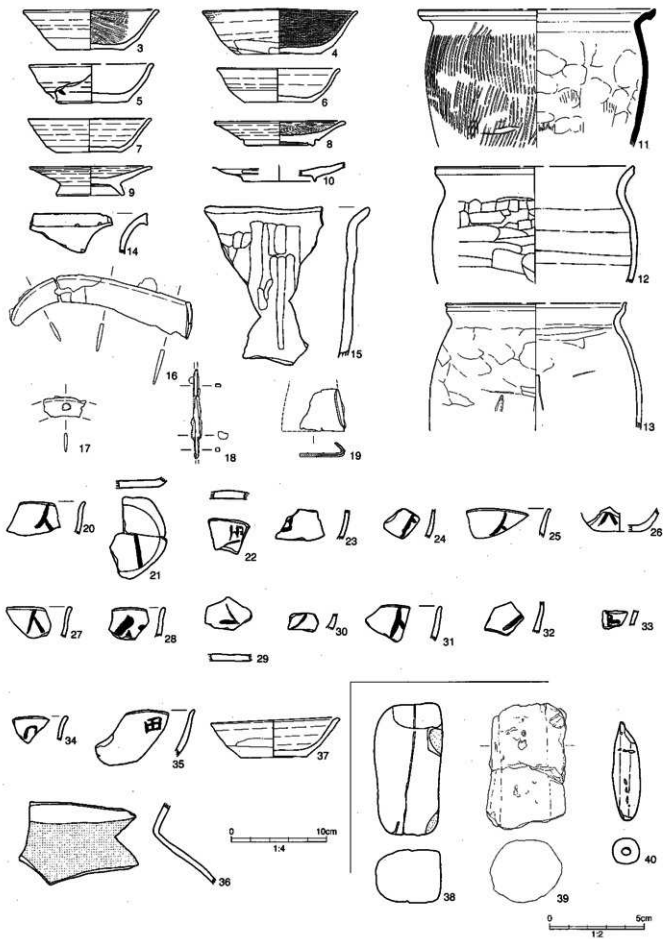


图 2-3-30 3-002

表 2-3-10 3-002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 環	130×70×38 ロクロ成形 口径厚みを持つ 底部やや上げ底 外面 体部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転糸切り後ヘラケズリ	橙褐色	砂粒 金雲母	3/4	墨書「人」 体部外面逆位
2	土師器 環	120×70×44 ロクロ成形 口径外反 体部中央やや膨らむ 外面 体部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転糸切り後ヘラケズリ	明褐色	砂粒 金雲母	3/4	墨書「人」 体部外面正位
3	土師器 環	(136)×70×42 ロクロ成形 口径外反しやや厚みを持つ 外面 体部下端～底部～回転糸ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	暗褐色	砂粒	1/3	
4	土師器 環	162×88×48 ロクロ成形 口径外反 外面 口径一部ヘラミガキ 体部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転糸 切り後ヘラケズリ 内面 全面密なヘラミガキ	明橙褐色	砂粒	4/5	
5	土師器 環	(130)×70×41 ロクロ成形 外面 体部下端～ヘラケズリ 底部～回転糸切り後ヘラケズリ	淡褐色		1/4	墨書「□」 体部外面
6	土師器 環	(127)×70×36 ロクロ成形 口径外反 外面 体部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転ヘラケズリ	橙褐色 赤褐色 やや黒	砂粒 金雲母	2/3	内面被熱による ヒビ割れ
7	土師器 環	126×68×36 ロクロ成形 体部外傾 外面 体部下端～底部～回転ヘラケズリ	暗茶褐色	砂粒 赤色粒	3/4	
8	土師器 環	135×70×36 ロクロ成形 口径厚みを持ち外反 体部下端後持つ 外面 底部～回転ヘラケズリ 内面 密なヘラケズリ	明橙褐色	砂粒 金雲母	2/3	
9	土師器 高台付皿	126×70×31 ロクロ成形 口径外反 高台部「ハ」の字状 外面 底部～回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色	砂粒 小色粒	2/3	器面の磨耗が見 られる
10	土師器 高台付皿	—×(76)×(45) ロクロ成形 外面 体部下端～ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 黒	緻密	体部～ 底部	内黒
11	土師器 甕	(250)×—×(148) 折り返し口径、外反 口径下端に稜を持つ 外面 口径～頸部～横ナデ 胴上半～平行タタキ 内面 口径～頸部～横ナデ 胴上半～ナデ及び指頭痕	黒褐色	砂粒	口径～ 胴部片	
12	土師器 甕	(210)×—×(125) 外面 胴上半～中位～縦位のヘラケズリ後横位のヘラケズリ 内面 胴上半ナデ	褐色		口径～ 胴部	
13	土師器 甕	(188)×—×(135) 口径やや立ち上がる 口径つまみ上げられ外反 部稜い「く」の字状 外面 口径～頸部～横ナデ 胴下半底部～回転糸切り後ヘラケズリ 内面 口径～頸部～横ナデ 胴部～ヘラナデ	橙褐色	粗砂粒 雲母	口径～ 胴部片	外面コゲ付着
14	須恵器 甕	—×—×— 外面 自然釉	灰 良	緻密	胴部片	
15	土師器 甕	—×—×— 口径外反 長胴型 外面 胴上半～縦位のヘラケズリ 内面 胴上半～ナデ	褐色		口径～ 胴部片	
16	鉄器 鎌	長軸190×短軸22×厚さ3.5 重量97.2g 29 4.0 37 4.0				
17	鉄器 小鎌	長軸45×短軸19.5×厚さ3 重量6.6g				
18	鉄器 鉄杖	長軸95×短軸5×厚さ3 重量10.5g 10 8 4 4				

19	鉄器 鍔先	長軸47×短軸45×厚さ4 重量 23.6g				
20	土師器 坏	-X-X-	褐 書		口縁片	墨書「人」 体部外面
21	土師器 坏	-X-X- 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り ヘラケズリ	淡褐 書		底部片	墨書「口」 底部外面
22	土師器 坏	-X-X- 外面 底部-回転糸切り	淡褐 書		底部片	墨書「」 底部外面
23	土師器 坏	-X-X-	赤褐 の黒 書		体部片	墨書「口」 体部外面 内黒
24	土師器 坏	-X-X- 外面 体部下端-ヘラケズリ	褐 書		体部片	墨書「」 体部外面
25	土師器 坏	-X-X-	褐 書		口縁片	墨書「人」 体部外面
26	土師器 坏	-X-X- 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-ヘラケズリ	褐 書		体部- 底部	墨書「人」 体部外面
27	土師器 坏	-X-X-	淡褐 書		口縁片	墨書「人」 体部外面
28	土師器 坏	-X-X-	褐 書		口縁片	墨書「」 体部外面
29	土師器 坏	-X-X-	淡褐 書		底部片	墨書「人」 底部内面
30	土師器 坏	-X-X- 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ	橙褐 書		底部片	墨書「」 底部外面
31	土師器 坏	-X-X-	淡褐 書		口縁片	墨書「人」 体部外面
32	土師器 坏	-X-X- 内面 ミガキ	赤淡褐 の黒 書		体部片	墨書「口」 体部外面 内黒
33	土師器 坏	-X-X- 内面 ミガキ	赤褐 の黒 書		体部片	墨書「口」 体部外面 内黒
34	土師器 坏	-X-X-	褐 書		口縁片	墨書「」 体部外面
35	土師器 坏	-X-X- 外面 体部下端-ヘラケズリ 内面 ミガキ	橙褐 良		口縁片	墨書「田」 体部外面
36	須恵器 甕	-X-X- 外面自然軸	灰 良	緻密	頸部片	
37	土師器 坏	133×69×41 ロクロ成形 蓋み持つ 口唇内削ぎ状で厚み持つ 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り後ヘラケズリ	明褐 書	砂粒	1/2	墨書「口」 体部外面

38	石製品 砥石	長さ70×幅35×厚さ28 重量126.7g			
39	土製品		淡褐色		
40	土製品 文牌	長さ130×幅82×厚さ76 重量576g 円筒状を呈する 器面は面取り状に削られる			

覆土は色調を基本とし、住居跡の覆土としては2層(2～3層)に分層された。人為的な埋め戻しが想定される。遺構内で検出された焼土は、重複する溝に伴うものと考えられる。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量(1900点程度)に出土している。鉄製品、墨書土器「人」の出土が目立つ。覆土上層出土の遺物に関しては、重複する溝が埋め戻される段階で混入したものと考えられる。

所見 出土遺物から平安時代の竪穴住居跡と判断した。また、柱穴の状況から2～3回の建て替えが考えられる。

4-004

検出地区 D5-67G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として3-002、3-005等がある。中近世以降の溝と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

遺構 方形の住居跡と思われる。床は、ロームを主体とした貼床で、住居跡中央で硬化面を検出し、更に中央で熱を受け赤化した範囲が認められた。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。付属施設として小穴6基を検出した。P1～P5は柱穴でP6は出入口施設のピットである。周溝は一部で検出したが、本来、全周していたものと考えられる。P7については住居跡に伴うものではないと判断した。

竈は住居跡北壁ほぼ中央で検出された。片袖のみの検出で、天井部は崩落していた。燃焼部において掘込みを検出した。明瞭な火床は検出できなかったが、熱を受けて劣化した痕跡は検出された。袖内側、煙道部に関しては、僅かに赤化範囲が認められた。竈断面の天井部の観察から竈は自然崩落したものと考えられる。

覆土は色調を基本とし、住居跡の覆土としては6層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量(900点程度)に出土している。鉄製品、紡錘車、墨書土器の出土が目立つ。

所見 出土遺物から平安時代の竪穴住居跡と判断した。出土遺物の時期、構成等3-002と類似点が多い。

3-005

検出地区 D5-77G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として4-004、B113等がある。B114と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

遺構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームを踏み固めた床で竈と反対側に硬化面が2ヶ所に分かれて検出された。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。

竈は住居跡東壁ほぼ中央で検出された。片袖のみの検出であった。燃焼部において掘込みを検出した。明瞭な火床は検出できなかったが、熱を受けて劣化した痕跡は検出された。袖内側、煙道部に関しては、僅かに赤化範囲が認められた。煙道部はB114に切られている。

覆土は色調を基本とし、7層に分層された。床面直上で、焼土、炭化材を検出していることから人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が想定される。

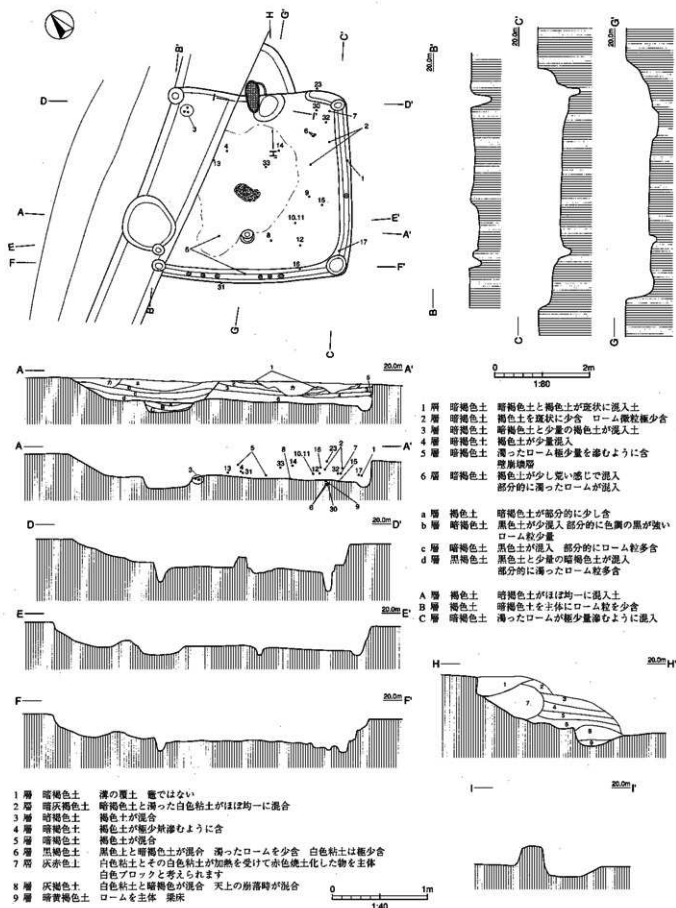


図 2-3-31 4-004

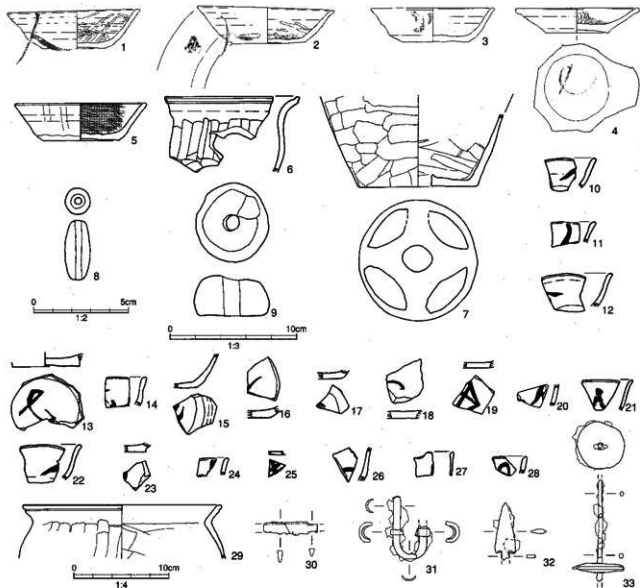


表 2-3-11 4-004遺物観察表

図 2-3-32 4-004

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	{39×74×41 外面 体部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転糸切り後ヘラケズリ 内面 麻らにヘラケズリ	明掲 青	砂粒	3/4	墨書「人」 体部外面正位
2	土師器 坏	{41×76×41 外面 体部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転糸切り後ヘラケズリ	暗掲 青	砂粒	3/4	墨書 体部外面「口」 体部外面正位 「人」
3	土師器 坏	{128×71×36 外面 体部下端～底部～回転ヘラケズリ	掲 良	砂粒	1/3	墨書「口」 体部外面
4	土師器 坏	{128×66×26 外面 底部～回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 放射状ヘラミガキ	明掲 青	砂粒	1/3	墨書「口」 底部外面
5	土師器 坏	{137×80×40 外面 体部下端～回転ヘラケズリ 内面 麻らにヘラミガキ	暗掲 暗青 掲青	砂粒	1/2	内外面タル状 付着物
6	土師器 甕	-×-×- 外面 胴上半～縦位のヘラケズリ	暗掲 青			口縁片

7	土師器 甔	-×126×(97) 底部は円形の孔を中心に木葉形の孔4個対称に配置 外面 胴下半-ヘラケズリ 内面 胴下半-ヘラナア	櫻楓 音	砂粒 白色粒	胴部- 底部片	
8	土製品	上径7×下径8×厚さ32 最大径14 軸孔4 重量5.0g	褐 壺	粗		
9	石製品 紡錘車	上径29×ト径39×厚さ21 軸孔8 重量44.4g	灰白			砂岩系
10	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	櫻楓 音	鐵密	口縁片	墨書「□」 体部外面
11	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	櫻楓 音	鐵密	口縁片	墨書「□」 体部外面
12	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐 音	鐵密	口縁片	墨書「□」 体部外面
13	土師器 皿	-×70×(13) ロクロ成形			底部片	墨書「□」 底部外面
14	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形			口縁片	墨書「□」 体部外面
15	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端-ヘラケズリ	淡褐 音	鐵密	底部片	墨書「□」 底部外面
16	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端-ヘラケズリ	淡褐 音	鐵密	底部片	墨書「□」 底部内面
17	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐 音	鐵密	底部片	墨書「□」 底部外面
18	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	櫻楓 音	鐵密	底部片	墨書「□」 底部内面
19	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形			底部片	墨書「□」 底部外面
20	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形			体部片	墨書「□」 体部外面
21	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐 音	鐵密	口縁片	墨書「□」 体部外面
22	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐 音	鐵密	口縁片	墨書「□」 底部外面
23	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り ヘラケズリ	淡褐 音	鐵密	底部片	墨書「□」 底部外面
24	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐 音	鐵密	口縁片	墨書「□」 体部外面
25	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐 音	鐵密	底部片	墨書「□」 底部外面
26	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	櫻楓 音	鐵密	体部片	墨書「□」 体部内面

27	土師器 坏	-X-X-	ロクロ成形			口縁片	墨書「口」 体部外面
28	土師器 坏	-X-X-	ロクロ成形		褐青	緻密	墨書「口」 体部外面
29	土師器 甕	(208)X-X(57)	口縁外反 直下に沈線一条 頸部「く」の字状 外面 口縁~頸部一横ナデ 胴上半~ヘラケズリ 内面 口縁~頸部一横ナデ 胴上半~ヘラナデ		褐青	砂粒	口縁片
30	鉄器 刀子	長軸57×短軸12×厚さ5.0 8 7.5	重量10.1g				
31	鉄器	長軸67×短軸7.5×厚さ2.0 13.0 5.0 5.0 1.5 14.0 6.0	重量33.0g				
32	鉄器 鉄鏝	長軸60×短軸16.5×厚さ5 9.0 3	重量12.6g				
33	鉄器 紡錘車	長軸107×短軸3.5×厚さ4.5 4.0 5.0	重量32.4g				

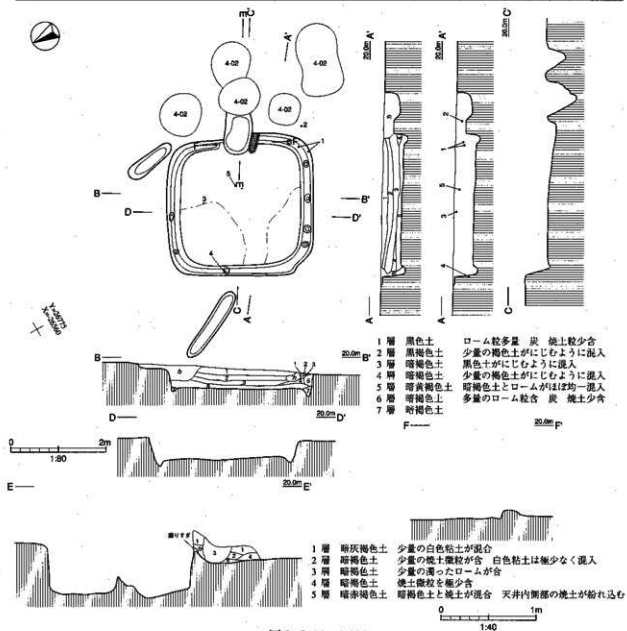


図 2-3-33 3-005



図 2-3-34 3-005

表 2-3-12 3-005遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の 特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 皿	(100)×(48)×25 外面 底部一回転糸切り	口縁外反 底部低い台状をなす	褐色～ 暗褐色 香	砂粒	1/2	
2	土師器 壺	—×—×— 外面 胴上平一縦位のヘラケズリ		褐色 香		口縁片	
3	土師器 壺	—×—×— 口唇部つまみ上げ		暗褐色 香		口縁片	
4	土師器 坏	—×—×—		淡褐色 香		口縁片	墨書「□」 体部外面
5	鉄器 釘	長軸43×短軸2.5×厚さ5 2.0 4					

3-001

検出地区 D5-58G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として3-005、5-007、B114等がある。中近世以降の溝と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

遺構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームをよく踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を広範囲に検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。小穴を1基検出、出入口施設用のビットと考えられる。その他、柱穴等の付属施設は検出されなかった。周溝は全周する。

竈は住居跡西壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残る遺存状況が比較的良好な竈であった。袖の内側は熱を受け、若干、赤化していた。燃焼部は浅い掘込みが認められた。明瞭な火床は検出できなかった。煙道部に関しては、煙道部は比較的良好に掘り込まれ、斜めに立ち上がっていた。赤化範囲は検出できなかったが、熱を受けて劣化した状況を確認する事ができた。天井部も断面において明瞭に確認する事ができ、土層の観察から、自然崩落したものと考えられる。

覆土は色調を基本とし、12層に分層された。人為的な埋め戻しの後、再度、土坑として掘削され、貝などの投棄がされた(8層)。その後は、ほぼ、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土下層～上層にかけて多量(460点程度)に出土した。鉄製品、墨書土器等が出土している。
所見 出土遺物から平安時代の竪穴住居跡と判断した。

4-001

検出地区 D5-88G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として5-007、B113等がある。

遺構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームをよく踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を広範囲に検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。柱穴等の付属施設は検出されなかった。周溝は全周する。

竈は住居跡北壁やや東側で検出された。両袖とも残る遺存状況が比較的良好な竈であった。袖の内側は熱を受け赤化していた。燃焼部は浅い掘込みが認められ、明瞭な火床は検出できなかったが、熱を受

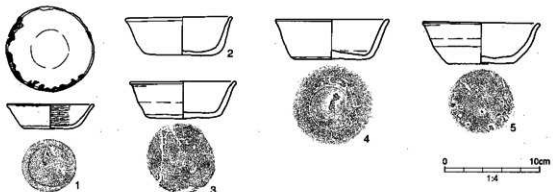
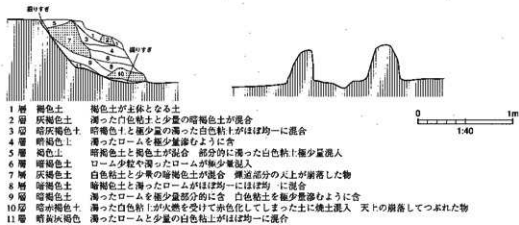
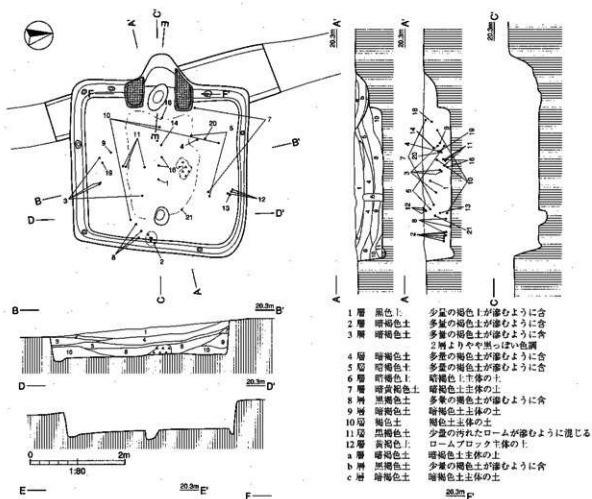


図 2-3-35 3-001

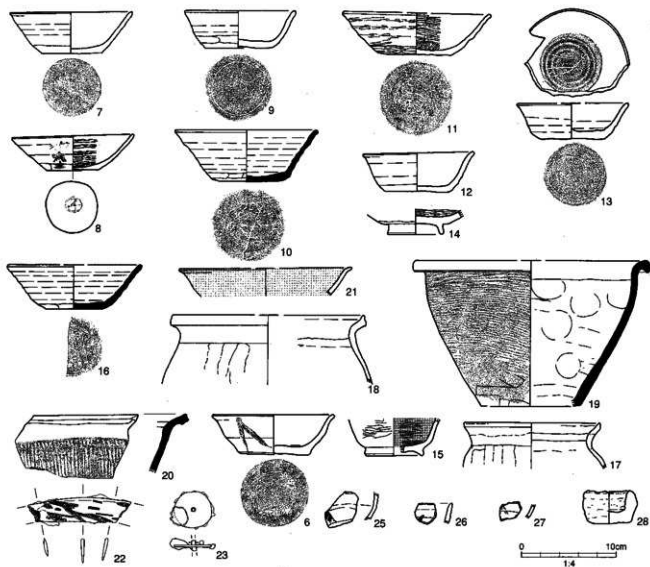


図 2-3-36 3-001

表 2-3-13 3-001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	90×56×26 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-右回転糸切り後 回転ヘラケズリ 内面 横位ヘラミガキ	淡茶褐色 良	赤色スコ リア 雲母 小石粒	完形	灯明皿
2	土師器 杯	110×78×40 ロクロ成形 外面 ナデ 底部-回転ヘラ切り 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	橙褐色 暗褐色 著	白色粒 雲母 小石粒	4/5	
3	土師器 杯	110×78×40 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り後手 持ちヘラケズリ	淡橙褐色 淡灰褐色 著	雲母 長石 砂粒	4/5	
4	土師器 杯	119×82×42 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り後手持 ちヘラケズリ 内面 口縁-ナデ 底部-ヘラナデ後ナデ	橙褐色 一部黒斑 良	白色粒 雲母 小石粒	完形	
5	土師器 杯	123×67×46 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り後 回転ヘラケズリ 内面 ナデ	淡橙褐色 良	赤色スコ リア 雲母	完形	
6	土師器 杯	128×72×43 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-ヘラケズリ後ナデ 底部-右回転糸切り 後周縁回転ヘラケズリ内面 ナデ	橙褐色 良	赤色スコ リア 雲母	完形	墨書「四」 体部外面正位

7	土師器 坏	128×62×43 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ後ナデ 底部-右回転糸 切り後回転ヘラケズリ 内面 ナデ	澄褐色 良	雲母 赤色スコ リア少	略定形	
8	土師器 坏	127×54×38 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-切り難し不明 手持ちヘラケズリ 内面 体部上半-粗いヘラミガキ 体部中位-底部-密なヘラミガキ	澄褐色 良	赤色スコ リア 白色粒 小石粒	2/3	墨書 底部外面「㊦」 体部外面 「□□」
9	土師器 坏	115×71×40 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-手持ちヘラケズリ 底部-回転糸切り後 右回転ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色 一部黒灰 良	雲母 赤色スコ リア	2/3	
10	須恵器 坏	149×76×55 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-手持ちヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り か? 内面 ナデ	淡褐色 良	雲母 長石多	4/5	
11	土師器 坏	154×78×44 ロクロ成形 外面 横位ヘラミガキ 体部下端-ヘラケズリ後横位ヘラミガキ 底 部-右回転糸切り後回転ヘラケズリ(粗いヘラミガキ) 内面 体部-横位ヘラミガキ 底部-放射状のヘラミガキ	赤褐色 一部黒褐 良	雲母 白色粒 小石粒	1/2	
12	土師器 坏	116×66×41 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り 全体に回転ヘラケズリ 内面 ナデ	澄褐色 良	雲母 赤色スコ リア	略定形	
13	土師器 坏	(116)×(66)×39 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り後回 転ヘラケズリ 内面 ナデ	澄褐色 良	赤色スコ リア少 雲母 石英	2/3	細書「□」 底部内面
14	土師器 高台付坏	一×台部径58×(25) ロクロ成形 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-高台部貼り付け 内面 ヘラミガキ	淡褐色 良	赤色スコ リア 雲母		内黒? (炭吸着)
15	土師器 高台付坏	一×台部径61×(39) 外面 体部中位-下半-横位ヘラミガキ 下端-ナデ 底部-高台部貼 り付け 内面 体部-横位ヘラミガキ 底部-ヘラミガキ	赤褐色 良	白色粒 砂粒	体部- 底部	内黒 内外面の露面 剥離目立つ
16	須恵器 坏	(140)×(59)×47 ロクロ成形 外面 口縁-ナデ 体部下端-手持ちヘラケズリ 底部-切り難し不明 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	青灰 良	白色粒多 雲母 長石 石英	1/2	口縁端部外面に 重ねた痕跡
17	土師器 甕	144×-×49 輪積み 外面 口縁-頸部-横ナデ 胴部上半-横位ヘラケズリ 内面 口縁-頸部-横ナデ 胴部上半-ヘラナデ	澄褐色 暗灰褐 青	白色粒多 雲母 小石粒	口縁- 胴部 上半	一次焼成による 露面剥離著しい
18	土師器 甕	(198)-×(73) 輪積み 口縁頸部つまみ上げ 外面 口縁-頸部-横ナデ 胴部上半-ヘラナデ 内面 口縁-頸部-横ナデ 胴部上半-ナデ	澄褐色 良	雲母多 石英 白色粒	口縁- 胴上半	
19	須恵器 甕	(248)×(105)×155 輪積み 叩き締り整形 折り返し口縁 胴下部-横位ヘラケズリ 外面 口縁-頸部-横ナデ 胴上半-下半-横位平行タタキ目文 胴下部-横位ヘラケズリ 内面 口縁-頸部-横ナデ 胴部-当て具による叩き後ナデ 一×-×- 輪積み 叩き締り整形	黒茶褐 青	雲母多 赤色スコ リア 白色粒	口縁- 底部 1/4	
20	須恵器 甕	外面 口縁-頸部-横ナデ 胴部-縦位平行タタキ目文 内面 口縁-横ナデ 胴部-ヘラナデ 胴部-当て具痕による楕円形 の凹み	青灰 良	雲母 石英 白色粒	口縁片	
21	陶磁器 碗	(180)×-×(29) ロクロ成形 口縁端部、外反顕著 内外面 ナデ	淡緑 灰白 良	緻密	口縁片	遺存部両面に 灰釉を均質に 施釉している
22	鉄製品 鐔	長軸108×短軸19×厚さ3 重量 30.8g 25.0 3.0 23.5 3.0				
23	鉄製品 紡錘車	長軸40×短軸4×厚さ4 重量 13.7g				
25	土師器 坏	一×-×- ロクロ成形 外面 ナデ 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色 良	黒色粒 雲母 赤色スコ リア	体部片	墨書「□」 体部外面
26	土師器 坏	一×-×- ロクロ成形 内外面 ナデ	淡褐色 良	白色粒 雲母	口縁片	墨書「□」 体部外面

27	土師器 坏	-X-X-X- 外面 ナデ 内面 ナデ	ロクロ成形	淡褐色 良	雲母 白色粒	体部片	墨書「□」 体部外面
	土師器 坏	52×44×35 外面 口縁～体部一指ナデ 内面 指ナデ	手捏ね ヘラナデ 底部-ヘラナデ	淡茶褐 一部黒斑 良	石英 雲母 小石粒	4/5	

け劣化している痕跡を検出した。煙道部は、比較的長く掘り込まれていて一部、オーバーハンクしている。天井部も断面において明瞭に確認する事ができ、土層の観察から自然崩落したものと考えられる。

覆土は色調を基本とし、14層に分層された。床面直上で検出された粘土は、竈崩壊時に流れた粘土と考えられ、住居跡自体は自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量(80点程度)出土した。覆土中から碗状鉄滓が出土している。

所見 出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡と判断した。

5-007

検出地区 D5-88G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として3-001、4-001、5-008等がある。

遺構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームをよく踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を広範囲に検出。住居跡中央で小穴2基を検出。用途の断定はできないが、P1は何らかの工作用のビット、P2もそれに関連する施設か。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。その他、柱穴等の付属施設は検出されなかった。周溝は全周する。

竈は住居跡北壁やや東側で検出された。両袖とも残る遺存状況が比較的良好な竈であった。袖の内側は熱を受け赤化していた。燃燒部は浅い掘込みが認められ、明瞭な火床は検出できなかった。煙道部は壁を僅かに掘込み、斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本とし、13層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量(60点程度)出土した。竈内から須恵器の坏形土器が伏せた状態で出土した。支脚としての転用と思われる。また、覆土中から鉄製品、紡績車等が出土している。

所見 出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡と判断した。

5-008

検出地区 D6-8G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として5-007、4-001、5-002等がある。

遺構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームをよく踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を広範囲に検出。住居跡中央で小穴1基を検出。出入口施設に伴うビットと考えられる。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。その他、柱穴等の付属施設は検出されなかった。周溝は全周する。

竈は住居跡西壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残る遺存状況が比較的良好な竈であった。袖の内側は熱を受け赤化していた。燃燒部は浅い掘込みが認められ、明瞭な火床は検出できなかったものの熱を受け劣化した状況が窺えた。煙道部は壁を僅かに掘込み、急傾斜で立ち上がっていた。

覆土は色調を基本とし、12層に分層された。床面直上で焼土を検出し人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量(210点程度)出土した。須恵器の出土が多い。

所見 出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡と判断した。

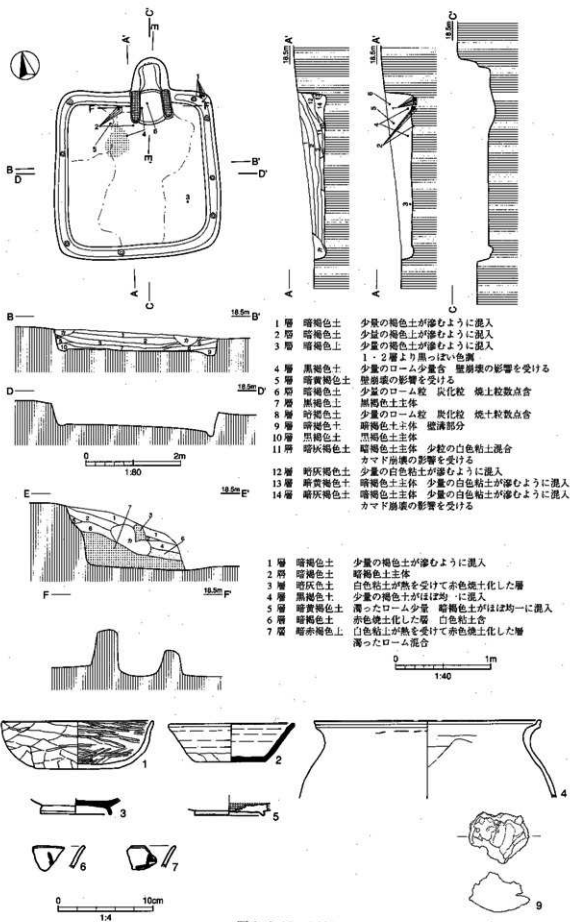


図 2-3-37 4-001

表 2-3-14 4-001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	156×90×52 底部より体部下半外傾 上半やや立ち上がる 外面 全体ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 全体横ナデ後ヘラミガキ	橙褐色	砂粒	完形	
2	須恵器 杯	130×72×40 ロクロ成形 体部外傾 断面逆台形状 外面 胴下端～底部ヘラケズリ	暗灰褐 やや悪	粗砂粒多	1/2	
3	須恵器 高台付杯	—×台部径(74)×(15) 外面 底部ヘラケズリ	灰白良	緻密	底部片	
4	土師器 壺	(238)×—×(83) 口縁外反し上端つまみ上げられ外面凹線状の調整 外面 口縁～頸部一横ナデ 胴上半ヘラミガキ 内面 口縁～横ナデ 頸部～胴上半ヘラミガキ	暗赤褐 善	砂粒 雲母多	口縁片	
5	土師器 高台付杯	—×台部径(72)×(13) 外面 底部一回転ヘラ切りご高台部貼り付け 内面 ミガキ	赤褐 砂黒良		底部片	内黒
6	土師器 杯	—×—×— 内面 ミガキ	淡褐色		口縁片	墨書「□」 体部外面
7	土師器 杯	—×—×—	褐色		口縁片	墨書「□」 体部外面
8	土師器 杯	—×—×— 外面 体部下端ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ	赤褐 砂黒善		体部片	内黒
9	鉄製品 碗状鉄滓	長さ55×幅64×厚さ43 重量131.5g			断片	錆付着 裏面に炉壁土を 残す

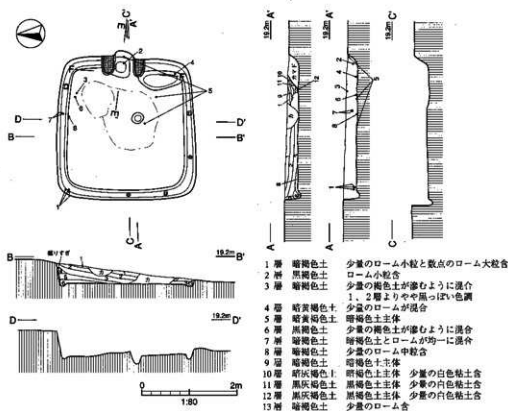


図 2-3-38 5-007

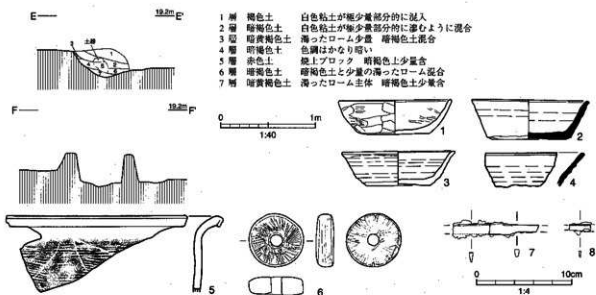
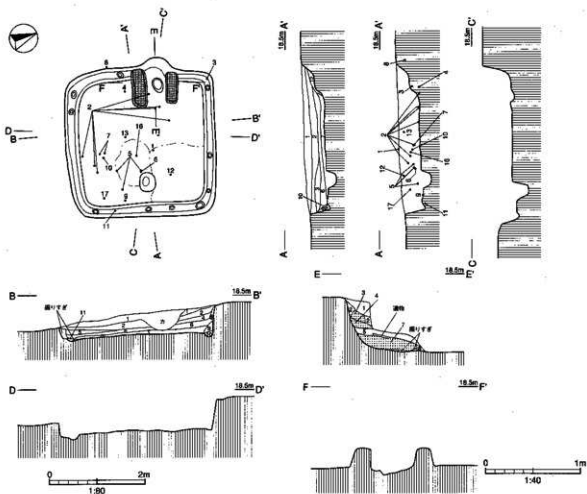


図 2-3-39 5-007

表 2-3-15 5-007遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高 等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	118×75×37	広めの平たい底部を持ち体部外傾 口縁やや内湾 外面 口縁-横ナテ 体部-底部-ヘラケズリ 内面 器面の割離著しく残存部少ない ヘラミガキが残る	橙褐 やや悪	砂粒	略完形	内外面スス付着
2	須恵器 坏	121×76×43	ロクロ成形 逆台形状で歪みを持つ 外面 体部下端-底部-ヘラケズリ	灰茶褐 悪	砂粒	完形	
3							
4	須恵器 坏	-×-×-	ロクロ成形	青灰 良	砂粒	胴部片	
5	須恵器 甕	-×-×-		灰白 良		口縁片	
6	石製品 石製 紡錘車	長さ42×幅43×厚さ15 重量47.9g ほぼ円形を呈し下面は平坦、上面は中央がやや盛り上がる 上面、側面は良く研削される 上下面に放射状に縦条痕が見られる					
7	鉄器 刀子	長軸91×短軸10×厚さ4 8 5 重量12.5g					
8	鉄器 刀子	長軸23×短軸6.5×厚さ2 重量 1.9g					



- 1層 黒褐色土 少量の褐色土が均一に混入 ロームが滲むように含 機土微粒 炭化物粒含
 2層 暗褐色土 暗褐色土+土体 少量の褐色土含
 3層 暗褐色土 暗褐色土主体
 4層 暗褐色土 暗褐色土主体 多量のローム中粒と数点の炭化物粒含
 5層 暗褐色土 暗褐色土主体
 6層 黒色土 黒色土と少量の褐色土が均一に混入 ロームが滲むように含数点の機土微粒・炭化物粒含
 7層 暗褐色土 ロームが滲むように含 炭化物微粒がバラバラと見られる
 8層 暗褐色土 ロームと少量の暗褐色土が均一に混入
 9層 黒色土 黒色土と少量の褐色土が均一に混入
 10層 暗褐色土 ロームブロックのような少量の褐色土含
 11層 暗褐色土 暗褐色土主体 少量のローム少粒含
 12層 暗褐色土 暗褐色土主体 少量の汚れたロームが滲むように含 少量の白色粘土粒と数点の機土微粒・炭化物粒含

- 1層 褐色土 極少量の白色粘土を滲むように部分的
 2層 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土は均一に混入
 3層 暗褐色土 濁った白色粘土が熱を受けて赤色酸化したものと褐色土が混入 天井部崩落層
 4層 暗褐色土 少量の褐色土が滲むように含 白色粘土はほぼ無い
 5層 暗褐色土 暗褐色土と濁った白色粘土が混入
 6層 暗褐色土 暗褐色土が主体となり濁った白色粘土が混入
 7層 暗赤褐色土 白色粘土と熱を受け赤化した粘土に暗褐色土が少量混入

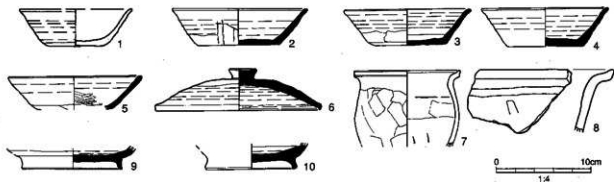


図 2-3-40 5-008

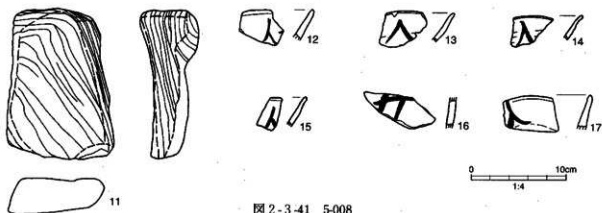


図 2-3-41 5-008

表 2-3-16 5-008遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 坏	(118)×56×39 ロクロ成形 外面 体部下端へラケズリ 底部一回転へラ切り	褐 香	緻密	1/4	
2 須恵器 坏	141×86×40 ロクロ成形 口縁やや広く、外反 外面 体部下端へラケズリ	灰白 悪	粗砂粒	4/5	縦割「□」 体部外面
3 須恵器 坏	132×78×39 クロ成形 口縁広く、外反 歪みを持つ 外面 体部下端へラケズリ	灰褐 悪	粗砂粒	略定形	
4 須恵器 坏	132×78×41 クロ成形 逆台形状 外面 体部下端へラケズリ	暗灰褐 香	粗砂粒多	1/2	底部外面縦割?
5 須恵器 坏	(140)×(79)×(36) ロクロ成形 体部外縁 外面 体部下端へラケズリ 内面 一部にヘラミガキ	暗灰 香	粗砂粒多	口縁片	
6 須恵器 壺	口径177 かえり径170 つまみ径29 つまみは小さく中がくぼみ中央がやや突出する 外面 口縁・臺頂部へラケズリ 頸部一回転ナデ	灰白 悪	砂粒 小礫	略定形	
7 土師器 小型壺	(111)××(80) 口縁上端はつまみ上げられ、外面に凹縁状の調整 頸部縁やかな「く」の字状 胴部との境に軽い段を有する 外面 口縁へラケズリ 横ナデ 胴上半へラケズリ 内面 口縁へラケズリ 横ナデ 胴上半へラケズリ	暗褐 香	砂粒多 雲母	口縁へ 胴部	
8 土師器 壺	×××× 外面 頸部へラケズリ 胴上半へラケズリ	砂褐 白濁 香	砂粒少	口縁片	常態型
9 須恵器 壺	××106×(24) ロクロ成形 高台部やや内湾 下端でやや外反 外面 底部一回転へラケズリ	青灰 良	砂粒	底部片	
10 須恵器 壺	××98×(28) ロクロ成形 高台部「ハ」の字状 外面 底部一回転へラケズリ	灰褐 やや悪	粗砂粒多	底部片	底部外面縦割?
11 石製品 砥石	長さ159×幅102×厚さ37 重量1300g				
12 土師器 坏	××××	褐 香	緻密	口縁片	墨書「人」 体部外面
13 土師器 坏	××××	褐 香	緻密	口縁片	墨書「人」 体部外面

14	土師器 坏	-X-X-	褐 書	緻密	口縁片	墨書「人」 体部外面
15	土師器 坏	-X-X-	褐 書		口縁片	墨書「人」 体部外面
16	土師器 壺	-X-X-	褐 書	白色粒 砂粒少		
17	土師器 坏	-X-X-	赤 褐色		口縁片	墨書「人」 体部外面 内裏

5-002

検出地区 D6-08G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として5-008、1-001等がある。

遺 構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームを踏み固めた床である。壁は、ロームの壁では垂直に立ち上がる。柱穴等の付属施設は検出されなかった。周溝は全周する。

竈は住居跡北壁ほぼ中央で片袖のみの検出であった。燃焼部は浅い掘込みが認められ、明瞭な火床は検出できなかったものの熱を受け劣化した状況が窺えた。煙道部は比較的良く掘り込まれ、急傾斜で立ち上がっていた。

覆土は色調を基本とし、12層に分層された。床面直上で焼土を検出し、人為的な埋め戻しが想定される。

遺 物 覆土下層～覆土上層にかけて少量(40点程度)出土した。須恵器の出土が多い。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。

1-001

検出地区 D6-28G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-002、5-002、5-008等がある。時期不明の土坑と重複するが、本住居跡の方が新しい。

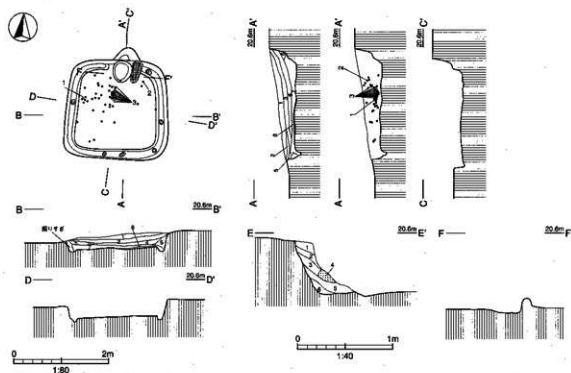
遺 構 方形の小型の住居跡である。床は、ロームを踏み固めた床である。壁は、ロームの壁では垂直に立ち上がる。小穴5基を検出した。P1～P4は柱穴、P5は出入口施設に伴うピットと考えられる。周溝は一部で検出した。

竈は住居跡西壁ほぼ中央で検出した。両袖とも残る遺存状況が比較的良好な竈であった。燃焼部は浅い掘込みが認められた。明瞭な火床は検出できなかったものの熱を受け劣化した状況が窺えた。煙道部は比較的良く掘り込まれ、斜めに立ち上がる。天井部は断面において検出された。土層の観察から、天井部は自然崩落したと考えられる。

覆土は色調を基本とし、12層に分層された。床面直上で焼土を検出し人為的な埋め戻しが想定される。

遺 物 覆土下層～覆土上層にかけて多量に出土した。覆土中から多量の阿玉台式土器の混入が認められた。図示はしなかったが、土坑覆土から、石鏃が2点出土した。また、同様に遺構近隣から、北宋銭がまとまって8枚出土した。

所 見 出土遺物から平安時代の竪穴住居跡と判断した。土坑覆土からは、体部削り調整の土師器坏、または、箱形の土師器坏が多く出土していた。さらに重複する土坑は、オーバーハンクしていて、天井部が崩落していた。本住居跡は、土坑の天井部崩落後作られたものと考えられる。よって土坑は奈良時代後半の所産、そして竪穴住居跡は平安時代前半の所産と判断した。また、土坑の性格については不明部分が多いが、一つの可能性として、粘土探掘坑が考えられる。



- 1層 暗褐色土 暗褐色土主体の土である
 2層 暗褐色土 ローム少粒数点含
 3層 暗褐色土 暗褐色土主体の土
 4層 暗褐色土 暗褐色土主体の土で少量の褐色土が滲むように含ローム少粒がバラバラと散っていて黄少粒が数点含
 5層 暗褐色土 暗褐色土主体の土で少量の褐色土が含ローム少粒がバラバラと散っている
 6層 暗黄褐色土 暗褐色土とロームが均一に混合 壁崩壊の影響を受けている
 7層 暗褐色土 少量褐色土が粗く混合し部分的に少量のロームを含む 微量の焼土、炭化物を含む
 8層 黄褐色土 ロームブロック主体の床層

- カマド 土坑
 1層 暗褐色土 暗褐色土全体
 2層 暗褐色土 微量の褐色土がほぼ均一に混合した層
 3層 暗褐色土 暗褐色土に濡ったロームがほぼ均一に混合した層
 4層 灰褐色土 濡った白色粘土と暗褐色土の混合土、天井部崩落層
 5層 暗褐色土 焼土微粒 やや多く含む
 6層 暗黄褐色土 濡ったロームと少量の暗褐色土がほぼ均一に混合した層

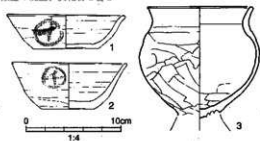


図2-3-42 5-002

表2-3-17 5-002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	123×67×37 ロクロ成形 口径上平坦に調整 体部やや括れる 外面 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色	砂粒 金雲母	定形	墨書「田」 体部外面 内外面にスス、 タール状付着物
2	土師器 坏	120×54×50 ロクロ成形 体部外傾 底部は小さく口径の開きも小さい 深めの鉢に近い器形	橙褐色	砂粒 金雲母	4/5	墨書「田」 体部外面
3	土師器 小型台付 蓋	110××(116) 口縁やや外反 胴上半に膨らみを持ち下端に向けてすぼまる 外面 口縁～頸部一横ナデ 胴部一ヘラケズリ 内面 口縁～頸部一横ナデ 胴部一ヘラナデ	暗橙褐色	砂粒 赤色粒		

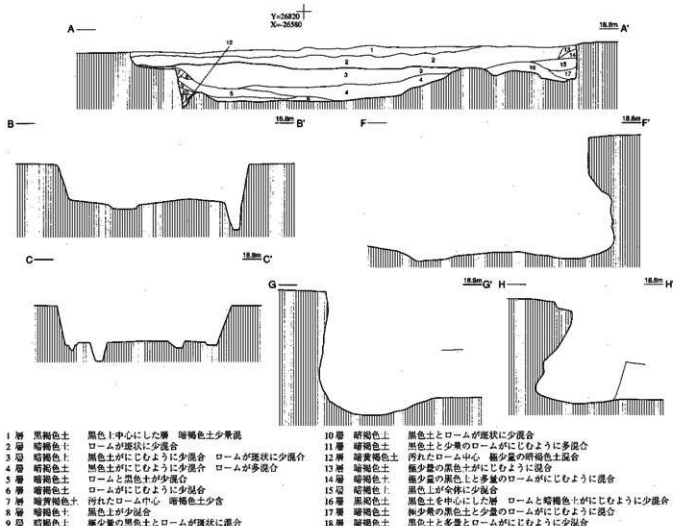
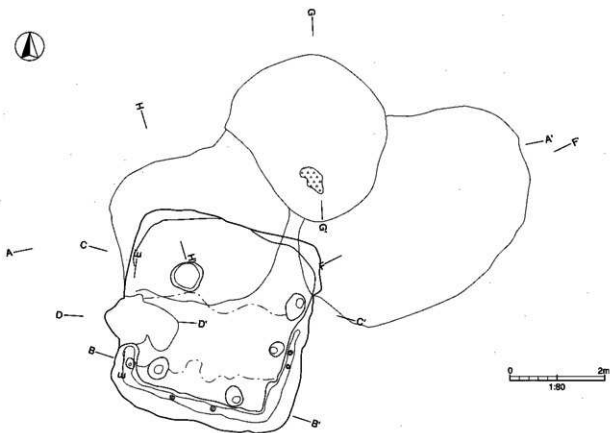
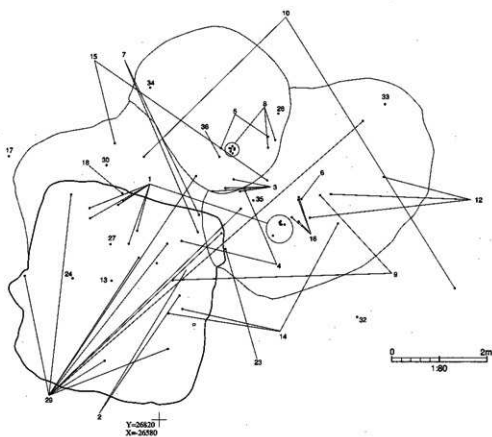


図 2-3-43 1-001



Y=26820
X=26870



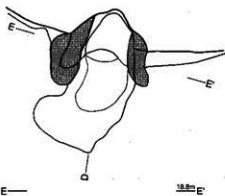
0 1.90 2m

Y=26820
X=26880

0

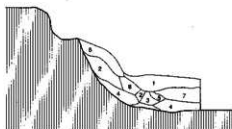
D—

18.8m D



E—

18.8m E



0 1m
1:40

- 1層 暗褐色土 黒色土中心にした層 暗褐色土少量混
- 2層 灰褐色土 少量のロームが斑状に混合
- 3層 暗赤褐色土 少量の黒色土がにじむように混合 少量のロームが斑状に混合
- 4層 黒褐色土 少量のロームと黒色土が混合 多量のロームが混合
- 5層 暗赤褐色土 少量のロームと黒色土が混合
- 6層 暗褐色土 少量のロームがにじむように混合
- 7層 暗褐色土 汚れたローム中心、暗褐色土少量
- 8層 暗褐色土 少量の黒色土が混合



図2-3-44 1-001

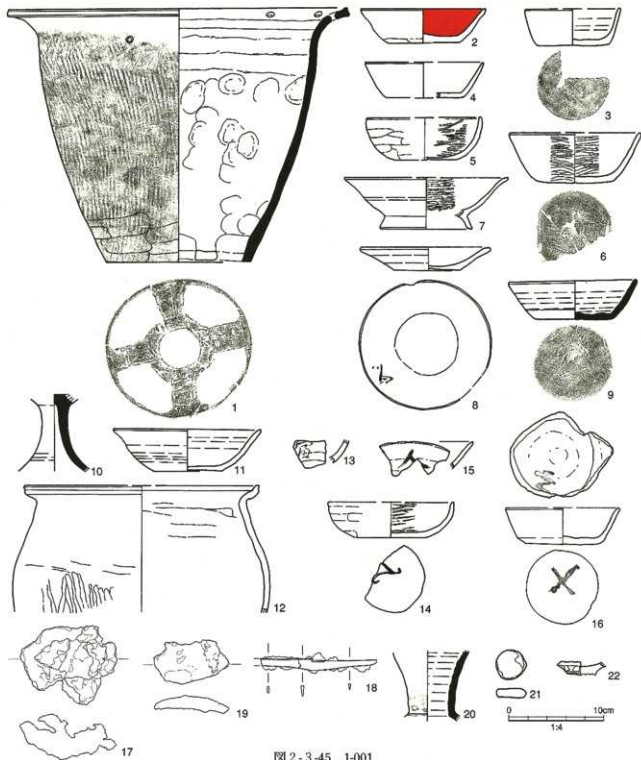


図 2-3-45 1-001

表 2-3-18 1-001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 鉢	(354)×152×265 外面 口縁-横ナデ 横位ハラケズリ 内面 口縁-横ナデ 胴部-縦位の平行タキ目 頸部-胴上半-ハラナデ 胴上半-下半-当て具整形後ナデ調整	底部分成時、凹形と台形による五孔を穿つ 下端-平行タキ目 後	外暗灰~ 暗青 内灰 良	雲母多 長石 石英	2/3	
2	土師器 坏	130×73×36 外面 ナデ 体部下端-不明瞭だが手持ちハラケズリ 不明 全面に手持ちハラケズリ再調整	底面 内面 ナデ	茶褐~ 暗褐 昏	白色粒 雲母 砂粒	3/4	赤彩 内外底面含む

3	土師器 坏	10×75×39 外面 ナテ 底部-静止糸切り後周縁回転ヘラケズリ調整 内面 ナテ	淡褐色 良	黒色粒 白色粒 雲母少	1/2	
4	土師器 坏	137×80×38 外面 ナテ 底部-切り離し不明 回転ヘラケズリ再調整 内面 ナテ	淡褐色 良	白色粒 小石片	1/4	
5	土師器 坏	120×64×45 外面 口縁-横ナテ 体部-横位ヘラケズリ 底部-手持ちヘラケズリ 内面 体部-粗い横方向ヘラミガキ	暗赤褐～ 黒茶褐 良	白色粒 赤色スコ リア 小 石片雲母	1/3	内面内黒か？
6	土師器 坏	136×80×52 外面 横位ヘラミガキ 底部-手持ちヘラケズリ調整 内面 横位ヘラミガキ 炭素吸着黒色処理	外橙褐 内淡黒 良	長石 石英 白色粒	3/4	内黒
7	土師器 高台付坏	171×77×55 外面 ナテ 高台部-本体作成後貼付 内面 横位のヘラミガキ調整	淡茶褐 良	赤色スコ リア 雲母長石	1/3	
8	土師器 皿	136×67×25 外面 ナテ 底部-右回転糸切り 切り離し未調整 内面 ナテ	淡茶褐 良	赤色スコ リア 雲母長石		略定形
9	須恵器 坏	135×82×42 外面 ナテ 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-切り離し不明 手持ち ヘラケズリ再調整 内面 ナテ	淡青灰 良	長石 雲母多		略定形 常形産
10	須恵器 高坏	1-X-X(81) 脚基部径 33 外面 ナテ 内面 ナテ	暗青灰～ 淡青灰 良	長石 石英 緻密		胴部全 周
11	土師器 坏	154×72×46 外面 ナテ 底部-回転糸切り未調整 内面 ナテ	茶褐～ 暗赤褐 音	白色粒 雲母 砂粒		略定形
12	土師器 甕	244-X-X(134) 口縁端部つまみ上げ 外面 口縁-横ナテ 胴上半-上方向ヘラナテ 中位-縦位ヘラミガキ 内面 口縁-横ナテ 胴上半～中位ヘラナテとナテ	外深赤褐 内深赤褐 ～暗茶褐 良	長石 雲母 石英	1/3	常形型甕
13	土師器 坏	1-X-X-X 外面 ナテ 体部下端ヘラケズリ 内面 ナテ	淡橙褐 良	雲母石英 小石混 砂粒		体部片 墨書「面」？ 体部外面正位
14	土師器 坏	130×72×38 ロケロ未使用 外面 口縁-横ナテ 体部-横位、縦位のヘラケズリ 底部-手持ちヘ ラケズリ 内面 口縁-体部ト位-横位ヘラミガキ 底部-多方向の ヘラミガキ全体に密			1/2	墨書「人」 体部外面
15	土師器 坏	1-X-X-X 内外面 ナテ	淡橙褐 良	赤色スコ リア 雲母長石 黒色粒		口縁片 墨書「人」 体部外面正位
16	土師器 坏	(118)×76×39 外面 ナテ 底部-静止？糸切り後周縁回転ヘラケズリ調整 内面 ナテ	淡橙褐 良	赤色スコ リア 雲母長石		墨書 底部外面「十」 底部内面「子」
17	鉄滓	長さ84×幅101×厚さ48 重量274.2g				一部に木炭灰 錆付着
18	鉄器 刀子	長軸122×短軸7×厚さ2 重量12.8g 11 3 6 2				
19	鉄滓	長さ47×幅80×厚さ15 重量78.4g				断片 一部に木炭灰
20	須恵器 長頸甕	1-X-X(74) 最大径 79 頸部、胴部を別々に作成後接合 外面 ナテ 内面 ナテ	深青灰 良 硬質	白色粒 緻密 黒色粒		口縁～ 頸部全 周 頸部外面 自然釉
21	土師器 十製円盤	長径2.9×厚10 土師器製胴部片転用 周縁打ち削り後研磨により2.9mm程度の円形に整 えている	黒灰褐 良	雲母 長石混		

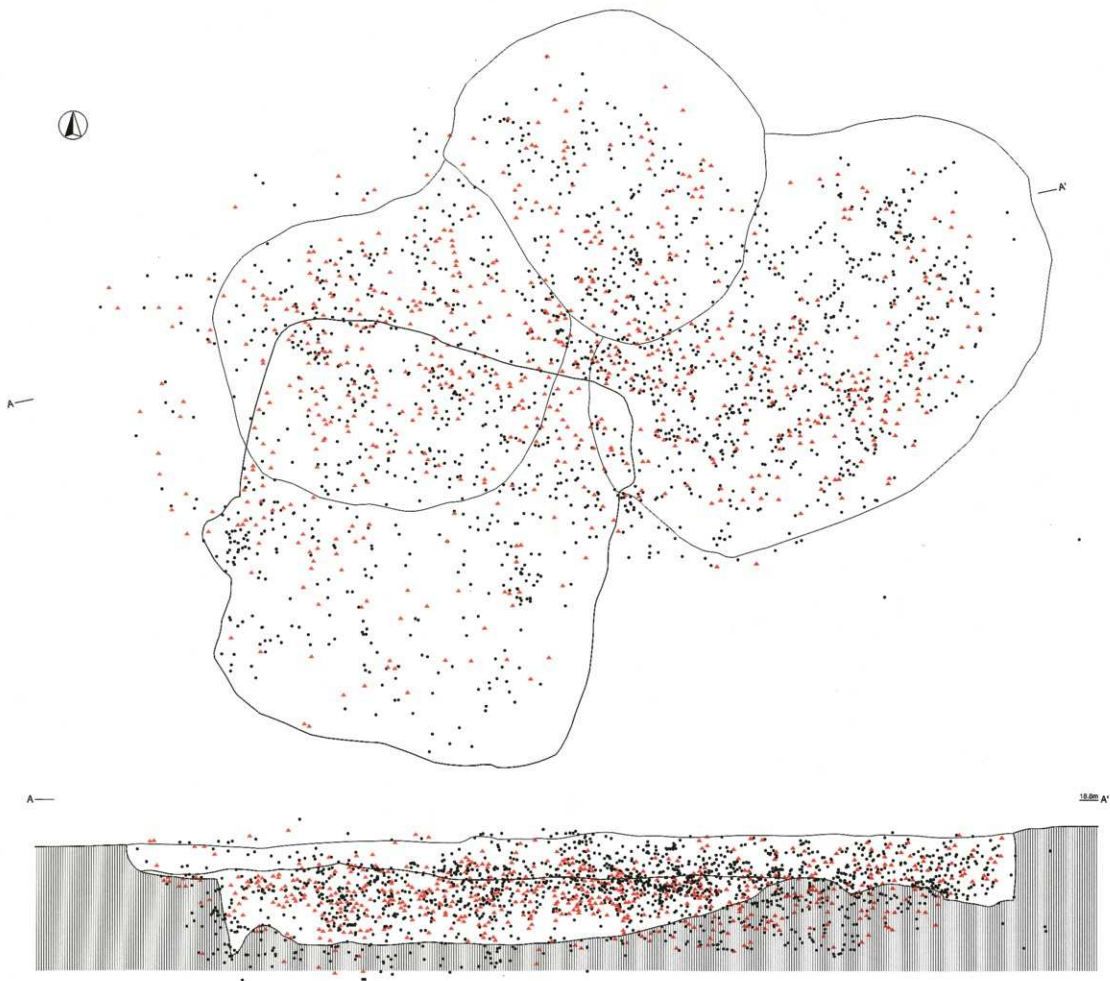


图 2-3-46 1-001

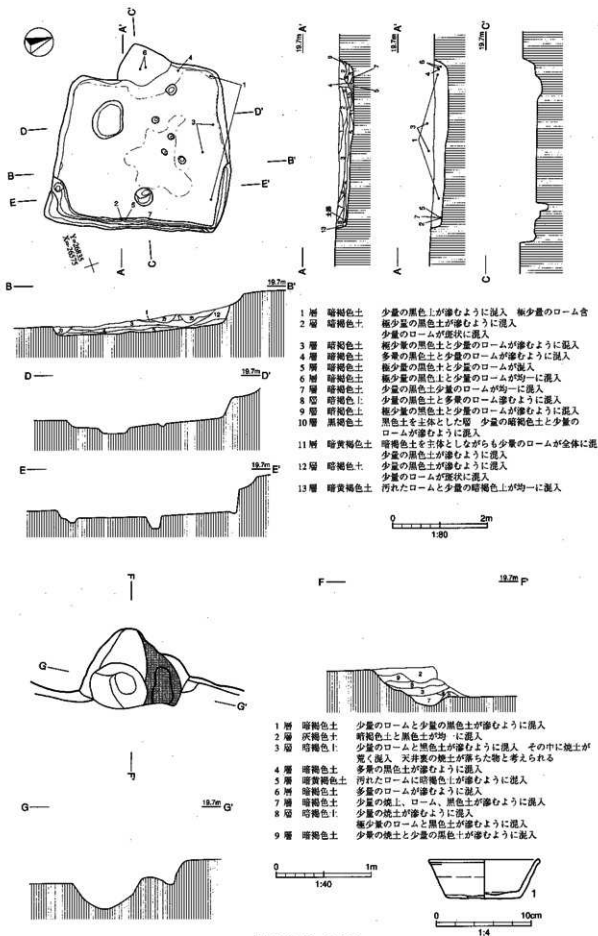


図 2-3-47 1-002

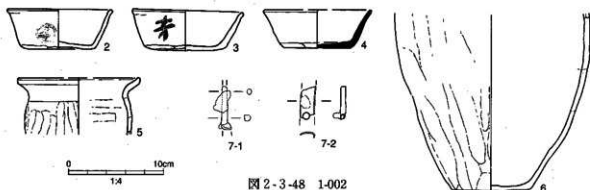


表 2-3-19 1-002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口徑×底徑×器高	色調 調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	113×77×41 ロクロ成形 口縁-内外面ナデ 外面 体部下端-手持ちヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り後はほ全体に 同一方向の手持ちヘラケズリ調整	口縁-内外面ナデ	橙褐色 良	長石雲母 赤色ス リヤ 小石片		略定形
2	土師器 坏	111×75×42 ロクロ成形 口縁-内外面ナデ 外面 体部下端-手持ちヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り後周縁手持ち ヘラケズリ 内面 底部中央へそ状盛り上がる	口縁-内外面ナデ	橙褐色 良	長石雲母 赤色ス リヤ 小石片	1/2	墨書「㊦」 体部外面正位
3	土師器 坏	116×84×44 ロクロ成形 口縁-内外面ナデ 底部外面-回転ヘラ切り 切り難し後周縁手持ちヘラケズリ	口縁-内外面ナデ	橙褐色 良	雲母 石英 長石	2/3	墨書「田四」 体部外面正位
4	須恵器 坏	(114)×(70)×40 ロクロ成形 口縁-内外面ナデ 外面 体部下端-手持ちヘラケズリ 底部-切り難し不明 手持ちヘラ ケズリ再調整	口縁-内外面ナデ	淡青灰 良	長石 雲母少	1/2	
5	土師器 小型罌	128×-×(60) 口縁端部一つまみ上げ 粘土組織み上げとロクロの 併用による成形 外面 口縁-横ナデ 胴中位-縦位ヘラケズリ 内面 口縁-横ナデ 頸部-胴中位 ナデ調整	口縁-内外面ナデ	暗褐色 淡橙褐色 良	白色粒 赤色ス リヤ 雲母		口縁- 胴部
6	土師器 罌	-×80×(187) やや長割化した在地罌 粘土組織み上げ 外面 縦位-斜位のヘラケズリ後ナデ調整 内面 ナデ調整	口縁-内外面ナデ	赤褐色 良	雲母 白色粒 石英	胴上半 部- 底部	底部-胴部外面 二次焼成による 新積 底部内面同様
7-1	鉄器	長軸46×短軸5.5×厚さ4.5 重量6.3g 6.0 6.5					
7-2	鉄器	長軸33×短軸15×厚さ6 重量4.2g					

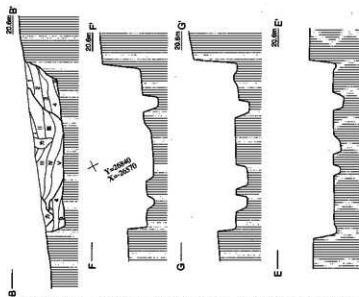
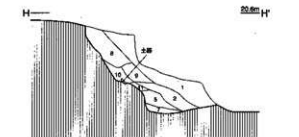
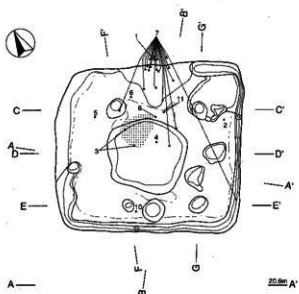
1-002

検出地区 O6-38G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-001、1-003等がある。

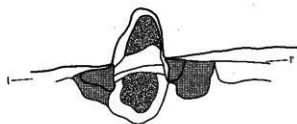
遺 構 方形の住居跡である。竈の両側で、壁の掘込み具合が違い、壁を結ぶラインが一致しない。床は、ロームをよく踏み固めた床で、住居跡中央部で硬化面を検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。小穴を7基検出した。P1は出入口施設に伴うピットと考えられる。P2～P7は用途不明である。周溝は一部で検出された。

竈は住居跡西壁ほぼ中央で検出した。片袖については覆土掘削中に掘りすぎてしまった。燃焼部は浅い掘込みが認められ、明瞭な火床は検出できなかったものの熱を受け劣化した状況が窺えた。煙道部は比較的よく掘り込まれ、斜めに立ち上がる。天井部が平面、断面ともに検出できなかったことから、住居廃絶時に竈は壊され、粘土は住居外に持ち去られたと考えられる。

覆土は色調を基本とし、12層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。



- 1層 暗褐色土 暗褐色土と黒色土が均一に混入 極少量のロームと焼土を含む
- 2層 暗褐色土 少量の黒色土が滲むように混入 極少量のロームと焼土を含む
- 3層 黒褐色土 黒色土を主体に多量の暗褐色土が滲むように混入
- 4層 暗褐色土 少量のロームが滲むに混入 少量のロームと少量の黒色土が滲むように混入
- 5層 暗褐色土 少量の黒色土が滲むように混入 少量のロームが斑状に混入
- 6層 暗褐色土 少量の黒色土が滲むように混入 少量のロームが斑状に混入
- 7層 暗褐色土 少量の黒色土が滲むように混入 少量のロームが斑状に混入
- 8層 暗黄褐色土 汚れたロームを主体として少量の暗褐色土が滲むように混入
- 9層 暗褐色土 少量の黒色土と少量のロームが滲むように混入
- I層 暗褐色土 極少量の黒色土と少量のロームが滲むように混入
- II層 暗褐色土 少量の黒色土と少量のロームが滲むように混入
- III層 暗褐色土 少量の黒色土が滲むように混入 少量のロームが斑状に混入
- IV層 黒褐色土 黒色土を主体に少量の暗褐色土が滲むように混入
- V層 暗黄褐色土 少量のロームが斑状に混入 焼土少許 汚れたロームを主体に少量の暗褐色土と少量の黒色土が滲むように混入



- 1層 暗褐色土 少量のロームが滲むように混入
- 2層 暗褐色土 少量のロームと黒色土が滲むように混入 焼土少許
- 3層 白色粘土 少量のロームと暗褐色土が滲むように混入 崩落セクション
- 4層 暗黄褐色土 暗褐色土を主体に多量のロームを全体に含 焼土少許
- 5層 黒赤褐色土 暗褐色土の中に多量の炭化物と多量の焼土が混入
- 6層 暗黄褐色土 汚れたロームを主に少量の暗褐色土が滲むように混入
- 7層 暗赤褐色土 暗褐色土で焼土アブロッグが混入 火灰部にあたる
- 8層 灰暗褐色土 暗褐色土と白色粘土が混入 少量の黒色土と少量の焼土が滲むように混入 大井の崩落セクション
- 9層 暗褐色土 少量の黒色土と少量の焼土少量の白色粘土が滲むように混入
- 10層 灰暗褐色土 暗褐色土を主体に多量の黒色土が滲むように混入
- 11層 暗褐色土 少量の白色粘土が滲むように混入 少量の黒色土が混入 少量の白色粘土が滲むように混入

図 2-3-49 1-003

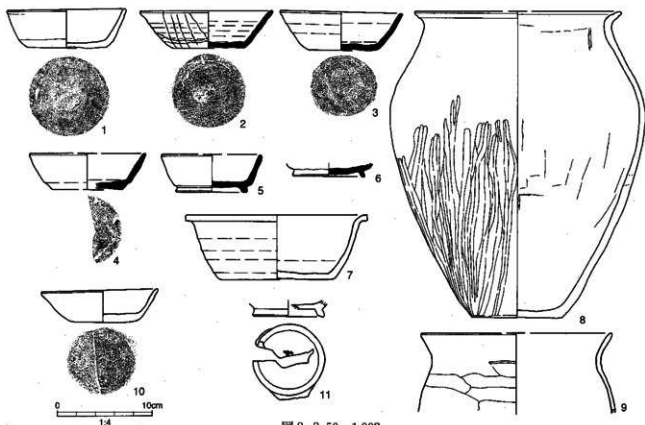


図 2-3-50 1-003

遺物 覆土下層～覆土上層にかけて比較的多量（140点程度）出土した。床面直上から鉄製品が出土した。また、墨書土器「寺」が出土している。

所見 出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡と判断した。

1-003

検出地区 D6-38G。台地先端の緩斜面地に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として1-001、1-002等がある。土坑と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

遺構 方形の住居跡である。床は、ロームをよく踏み固めた床で、住居跡中央部に硬化面を検出。重複する土坑に壊される。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。小穴を8基検出した。P1～P4柱穴で、P5は出入口施設に伴うピットか。その他のピットは用途不明である。周溝は一部で検出された。

竈は住居跡北壁ほぼ中央で検出した。両袖とも検出され、比較的遺存状況の良好な状態であった。燃焼部は浅い掘込みが認められ、明瞭な火床を検出することができた。煙道部は比較的良好に掘り込まれ、斜めに立ち上がる。赤化範囲も広範囲に明瞭に確認できた。天井部は断面において検出された。土層の観察から、天井部は自然崩落したと考えられる。

覆土は色調を基本とし、9層に分層された。床面直上～覆土上層にかけて焼土を検出していることから、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中から多量（320点程度）に出土した。線刻土器「丈」が出土し、1-002の坏と接合した。また、図示はしなかったが、覆土中から鉄滓が出土した。

所見 出土遺物から奈良～平安時代の竪穴住居跡と判断した。

表 2-3-20 1-003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成・調整等の特徴	色調 成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	125×80×40 ロクロ成形 口縁～内外面ナテ 底部～内面ナテ 外面 体部下端～回転ヘラケズリ 底部～右回転糸切り後回転ヘラケズリ	淡褐色 良	雲母砂粒 白色粒 小石粒	完形	
2	須恵器 坏	140×80×39 ロクロ成形 外面 口縁～ナテ 体部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転ヘラ切り手持ちヘラケズリ 内面 口縁～底部～ナテ	淡青灰 良	長石多 石英 雲母	略完形	線刻「□」 体部外面
3	須恵器 坏	127×68×41 ロクロ成形 外面 ナテ 底部～右回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 ナテ	灰白 良・硬質	黒色粒 白色粒 石英	略完形	
4	須恵器 坏	(121)×(72)×38 ロクロ成形 内外面 ナテ 底部外面～右回転糸切り	青灰 良・硬質	長石 小石粒	1/2	
5	須恵器 高台付坏	105×台部径75×40 ロクロ成形 内外面 ナテ 底部外面～坏部作成後高台部貼り付け	青灰 良・硬質	白色粒 長石 小石片	1/2	
6	須恵器 高台付坏	—×(台部径)76×(15) ロクロ成形 外面 ナテ 底部 外面～高台部貼り付け 内面 ナテ 底部～ナテ	淡青灰 淡褐色 良	白色粒 小石粒	底部片	底部内面に摺ったような摩耗部分が見られる
7	土師器 碗?	190×126×68 ロクロ成形 くの字状の口縁部を持つ鉢状の器 内外面 ナテ 底部外面～切り離し不明 全面に手持ちヘラケズリ	暗褐 ～赤褐 香	長石 雲母 小石粒	2/3	底部内面スズ状物付着 口縁部内面に二次焼成による剥離
8	土師器 壺	216×94×324 粘土経積み上げ 口縁部つまみ上げ 外面 口縁～横ナテ 胴上半～横位ナテ 胴中位～下端～ナテ後縦位ヘラミガキ 内面 口縁～横ナテ 胴上半～下端～横位ヘラナテ	暗褐～ 褐色 良	長石雲母 白色粒 小石粒	1/2	胴中央部外面にスズ状物付着 部分的に二次焼成による剥離
9	土師器 壺	(200)×—×(83) 器壁薄い 武蔵型壺 粘土経積み上げ 外面 口縁～横ナテ 胴部上半～横位ヘラケズリ 内面 口縁～横ナテ 胴上半～ナテ	砂淡褐色 淡褐色 良	赤色スロ リ了 雲母 黒色粒	口縁～ 胴上半	
10	土師器 坏	122×70×355 底部厚く口縁部に向けて緩やかに立ち上がる 内外面 ナテ 底部外面～回転ヘラ切り 切り離し未調整	淡黄褐 香	白色粒	2/3	寛書「民」 底部外面
11	土師器 高台付坏	—×台部径75×(38) ロクロ成形 本体切り離し後高台部貼り付け 底部外面～静止糸切り 切り離し後ナテ調整	褐色 良	雲母 黒色粒	底部片	黒書「□」 底部外面

(2) 掘立柱建物跡

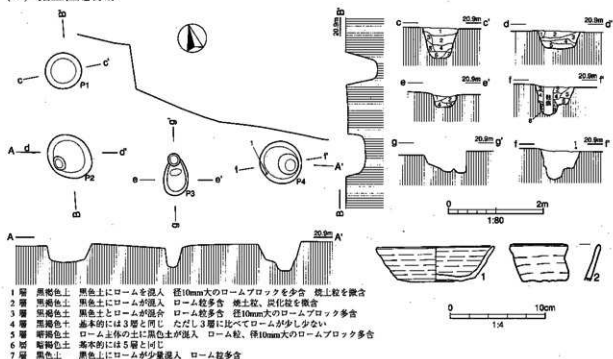


図2-3-51 B108

表2-3-21 B108遺物観察表

No	標別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	123×55×37 外面 底面一回転糸切り後回転ヘラケズリ	◎褐色 ◎黒色	緻密	砂粒	完形 P4 内面スス付着
2	土師器 坏	—×—×— 内面ミガキ	◎褐色 ◎黒色	緻密	口縁片	内黒

B108 (旧B-016)

検出地区 D5-73G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として8-003がある。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、2間×(4.70m)1間以上、長軸の主軸方向はN-75°-Wとなる隅柱の掘立柱建物跡と考えられる。各柱穴の形状は不整形形でしっかりと掘込まれていた。P4については柱痕が検出された。

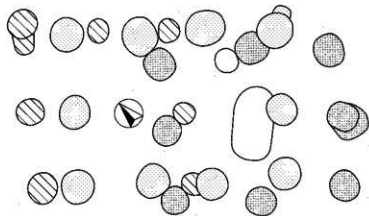
遺物 P4覆土上層から土師器が出土した。その他、柱穴覆土中から鉄滓が2点出土した。縄文土器(条痕文系土器、阿玉台式)が少量出土したが、本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

B109 (旧B-010)

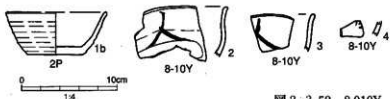
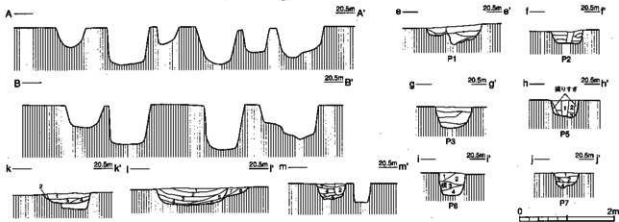
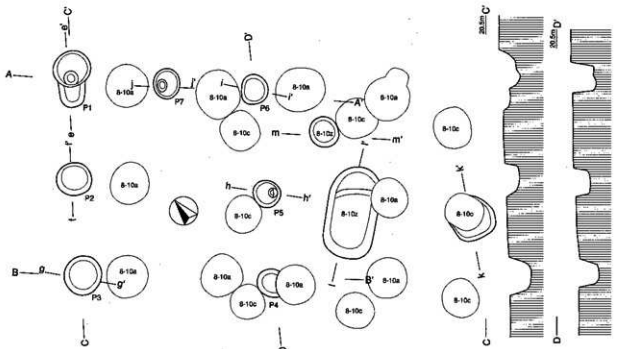
検出地区 D5-55G。台地先端、谷頭に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構として8-003がある。3基の掘立柱建物跡が重複関係にある。また、同一区域内の関連遺構として8-010X、8-010Y、8-010Zがある。それぞれの遺構の個別の報告を行い、その後、総合的な所見を述べることにする。また、遺物実測図に付してあるアルファベットは、それぞれに帰属する掘立柱建物跡及び土坑を示している。(各土坑の土層観察については、調査上の不手際で一部不備がある。)

Y-3000
X-3000



8-010全体図

Y-3000
X-3000



- 8-10z
- 1層 黒褐色土 黒色土にロームが少量混入 ローム粒微少
 - 2層 黒褐色土 黒色土とロームの混合土ローム粒少含
 - 3層 黒褐色土 黒色土にロームが少量混入ローム粒少含
 - 4層 暗褐色土 黒色土とロームの混合土ローム粒多含
 - 5層 暗褐色土 黒色土とロームの混合土ローム粒少含
 - 6層 暗褐色土 黒色土とロームの混合土ローム粒多含

図 2-3-52 8-010Y

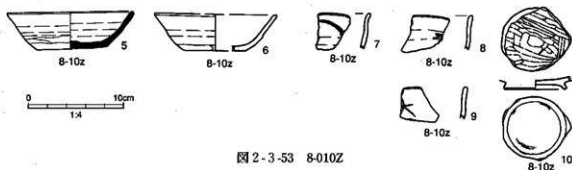


図 2-3-53 8-010Z

B109b (旧8-010b)

遺構 2間(4.16m)×2間(3.89m)、長軸の主軸方向はN-40°-Eとなる側柱の掘立柱建物跡と考えられる。各柱穴の形状は不整形形でしっかりと掘込まれていた。P2, P5については柱痕が検出された。

遺物 柱穴覆土中から土師器が出土した。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。柱穴覆土中から出土した土師器の坏形土器は、8-003出土の破片資料と接合し、両者の有機的関係を考える上で示唆に富む。

8-010X (旧8-010-20)

遺構 円形の平底の土坑でしっかりと掘込みを有す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に6層に分層された。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 土坑の形態、覆土の観察から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の一部と考えられるが、組み合う柱穴を検出できなかった。

8-010Y (旧8-010-27)

遺構 B109C-P4と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。楕円形の平底の土坑。坑底は熱を受け劣化していた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本4層に分層された。覆土中に多量の焼土、粘土を検出している。

遺物 覆土中から土師器片が出土し、内2点は、墨書土器「人」である。それらに加えて鉄滓が出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断する。鍛冶遺構(鍛冶炉)と考えられる。

8-010Z (旧8-010-22)

遺構 平面長楕円形の平底の土坑で、2基の土坑の重複である。重複の結果、坑底は北側にテラス状の段が認められ、1段高くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。8-010a-P5とも重複関係にあるが、新旧関係は明らかにし得なかった。

覆土は色調を基本8層に分層された。覆土中に多量の焼土、粘土を検出している。

遺物 覆土中から土師器、須恵器片が出土している。台付の皿形土器が出土している。内面は非常に良く研磨されており底部に隅が付着していた。或いは転用碗か。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断する。用途は、8-010Yが鍛冶遺構の可能性が高いことを考慮すれば、鍛冶遺構に関連する廃棄土坑が考えられる。

B109a (旧8-010a)

遺構 梁行2間(3.98m)×桁行3間(5.70m)、桁行の長軸の主軸方向はN-46°-Wとなる側柱の掘立柱建物跡と考えられる。各柱穴の形状は不整形形でしっかりと掘込まれていた。P1, P2, P5については柱痕が検出された。

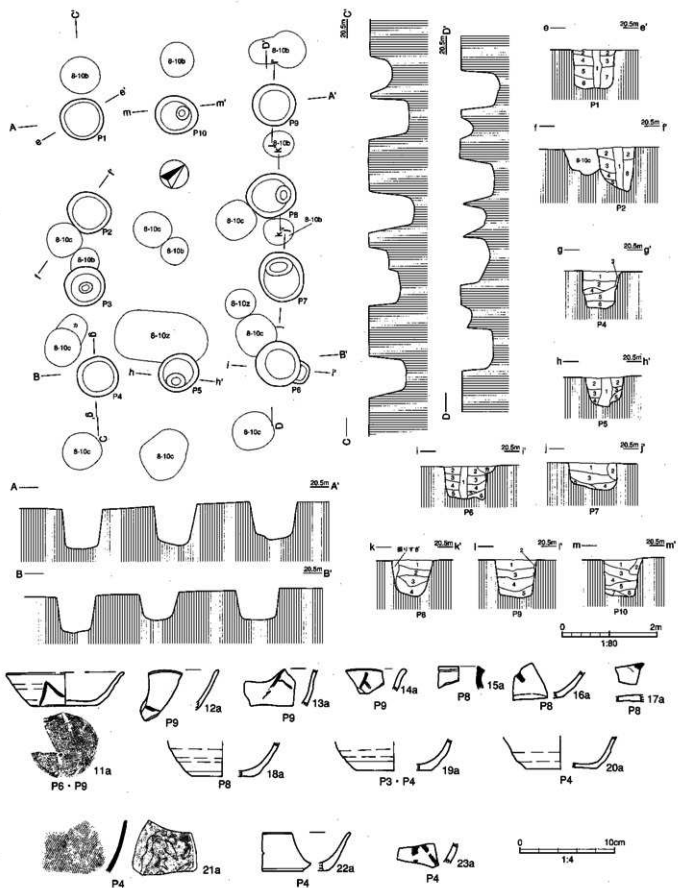


图 2-3-54 8-010a

P1	1層 黒褐色土	黒色土とロームが混合 焼土粒散在
	2層 黒褐色土	ローム粒・径10mm大のロームブロック少含
	3層 暗黄褐色土	黒色土とロームが混合
	4層 黒褐色土	ローム粒・径10mm大のロームブロック少含
	5層 黒褐色土	ローム主体に黒土が混入
	6層 黒褐色土	径10~20mm大のロームブロック少含
	7層 暗褐色土	黒色土とロームが混合
	8層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	9層 黒褐色土	ローム粒・径5~10mm大のロームブロック散在
	10層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	11層 暗褐色土	黒色土とロームが混合
	12層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	13層 黒褐色土	ロームと黒色土が混合
	14層 黒褐色土	ロームと黒色土が混合
	15層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	16層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	17層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	18層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	19層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	20層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	21層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	22層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	23層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	24層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	25層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	26層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	27層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	28層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	29層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	30層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	31層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	32層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	33層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	34層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	35層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	36層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	37層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	38層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	39層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	40層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	41層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	42層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	43層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	44層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	45層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	46層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	47層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	48層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	49層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	50層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	51層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	52層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	53層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	54層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	55層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	56層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	57層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	58層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	59層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	60層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	61層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	62層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	63層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	64層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	65層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	66層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	67層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	68層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	69層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	70層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	71層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	72層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	73層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	74層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	75層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	76層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	77層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	78層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	79層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	80層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	81層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	82層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	83層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	84層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	85層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	86層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	87層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	88層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	89層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	90層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	91層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	92層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	93層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	94層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	95層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	96層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	97層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	98層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	99層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合
	100層 暗褐色土	ロームと黒色土が混合

P2	1層 暗褐色土	黒色土とロームが混合 焼土粒散在
	2層 暗褐色土	ローム主体に黒色土が少量混入 焼土粒散在
	3層 黒褐色土	径10~20mm大のロームブロック・ローム粒少含
	4層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	5層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	6層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	7層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	8層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	9層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	10層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	11層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	12層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	13層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	14層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	15層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	16層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	17層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	18層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	19層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	20層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	21層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	22層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	23層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	24層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	25層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	26層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	27層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	28層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	29層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	30層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	31層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	32層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	33層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	34層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	35層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	36層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	37層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	38層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	39層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	40層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	41層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	42層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	43層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	44層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	45層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	46層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	47層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	48層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	49層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	50層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	51層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	52層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	53層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	54層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	55層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	56層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	57層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	58層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	59層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	60層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	61層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	62層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	63層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	64層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	65層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	66層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	67層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	68層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	69層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	70層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	71層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	72層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	73層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	74層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	75層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	76層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	77層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	78層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	79層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	80層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	81層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	82層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	83層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	84層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	85層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	86層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	87層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	88層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	89層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	90層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	91層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	92層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	93層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	94層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	95層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	96層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	97層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	98層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	99層 黒褐色土	黒色土とロームが混合
	100層 黒褐色土	黒色土とロームが混合

P4については2基の土坑の重複で、掘立柱の廃棄絶後上層に土坑(8-010Y)が掘られている。

遺物 柱穴覆土中から土師片等が出土し、墨書土器「人」の出土が目立つ。柱穴間にまたがる接合資料が散見する。灰釉陶器が出土している。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。覆土の観察から、重複するB109c(旧8-010c)より新しいと判断した。

B109c(旧8-010c)

遺構 2間(3.86m)×2間(4.86)、長軸の主軸方向はN-53°Wとなる側柱の掘立柱建物跡と考えられる。各柱穴の形状は不整形形でしっかりと掘込まれていた。P3については柱痕が検出された。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。覆土の観察から、重複するB109a(旧8-010a)より古いと判断した。

総合所見 3棟の新旧関係についてはC棟からA棟の順で建てられた。また、C棟廃絶後、鍛冶遺構である8-010Yが構築されたことが判る。B棟については明らかにし得なかったが、3棟の配置から、A棟、B棟、C棟の3棟の内、2棟が同時存在しないことから、3期の変遷として捉えることができる。また、B棟出土土器と接合資料を持つ8-003からは土師器の内黒土器或いは無台の皿形土器等が出土していることから、B棟の時期を平安時代と考えられる。また、8-003は、碗状鉄滓が出土していることから、8-003とB109bに代表される遺構群とは、鍛冶遺構として有機的に関連し、時期を相前後する遺構群と捉えることができよう。また、B109の調査結果から境塚遺跡、向境遺跡に立地する掘立柱建物跡群の展開が3期に区分できる見通しが立つ。

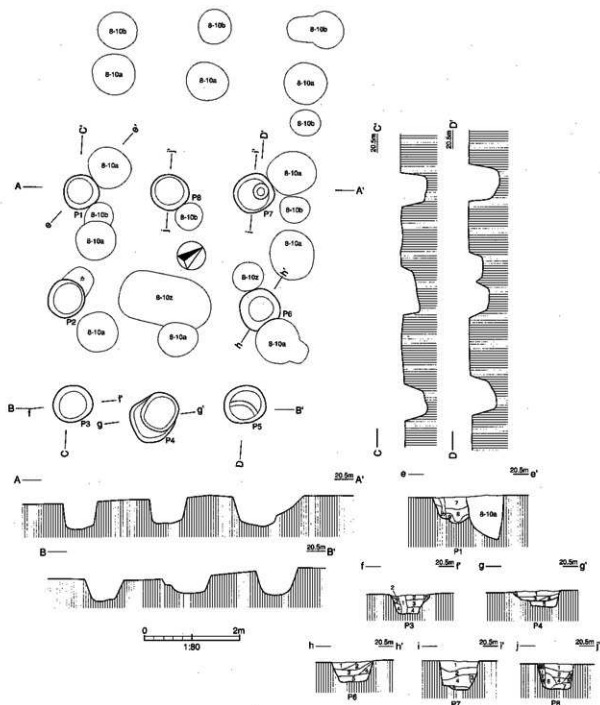


図 2-3-55 8-10c

表 2-3-22 8-10c遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(116)×(63)×45 ロクロ成形 外面 体部下端 ヘラケズリ 内面 体部 ヘラケズリ 底面 回転糸切り後回転	橙褐色 青	緻密	1/4	
2	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端 ヘラケズリ 内面 体部 ヘラミガキ	淡褐色 青	緻密	口縁片	墨書「四」 体部外面 内黒
3	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内面 ヘラミガキ	淡褐色 青	緻密	口縁片	墨書「四」 体部外面 内黒

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
4	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐色 青	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
5	須恵器 坏	121×73×40 ロクロ成形 体部 外製 口縁でやや内薄 外面 底部-体部下端ヘラケズリ	灰茶色 やや墨	砂粒 赤色粒 少含	2/3	
6	土師器 坏	(128)×(62)×39 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	暗赤褐 青	砂粒 少含	1/4	
7	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐色	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
8	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐色	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
9	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	⑤ 橙褐 ⑥ 淡褐 青	緻密	口縁片	墨書「人」 体部外面
10	土師器 高台付皿	-×(60)×(13) ロクロ成形 外面 底部中央 回転糸切り 内面 ミガキ	良	緻密	底部片	
11	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転糸切り	橙褐 青	緻密	1/4	No.22と同一 タイプか
12	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内面 ミガキ	褐色 青	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
13	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	橙褐色	緻密	体部片	墨書「人」 体部外面
14	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	橙褐色 青	緻密	口縁片	墨書「人」 体部外面
15	灰織 陶磁器 水取	-×-×- ロクロ成形	⑦ 赤灰 ⑧ 灰緑 良	緻密	口縁片	
16	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底縁ヘラケズリ	橙褐色	緻密	底部片	墨書「□」 体部外面
17	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐色 青	緻密	口縁片	墨書「□」 底部外面
18	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り 底縁ヘラケズリ	褐色 青	緻密	底部片	
19	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部底縁ヘラケズリ	橙褐色 青	緻密	底部片	
20	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転糸切り 底縁ヘラケズリ	淡褐色 青	緻密	底部片	
21	須恵器 壺	-×-×- ロクロ成形 外面 タタキ 内面 丁寧な研着痕。転用規として使用か	灰色 青	緻密	底部片	
22	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り 底縁ヘラケズリ	橙褐色 青	緻密	体部片	
23	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	橙褐色	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面

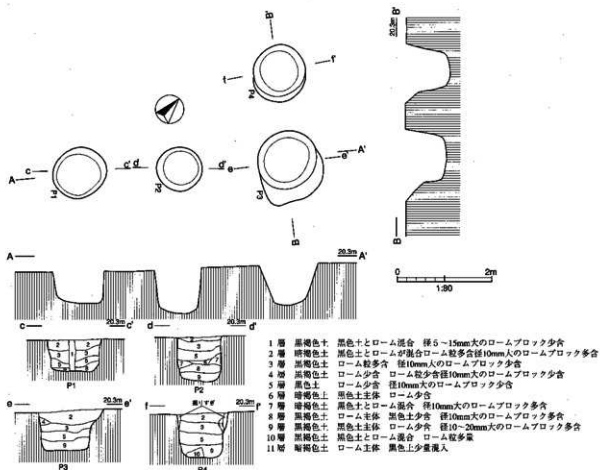


図2-3-56 8-009

B110 (旧8-009)

検出地区 D5-55G。台地平坦部に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB109、B111等がある。遺構の一部は、調査区外に延びている。

遺構 全体が検出されて無いため不明部分があるが、2間(4.70m)×1間以上、主軸方向はN-44°-Wとなる側柱の堀立柱建物跡と考えられる。各柱穴の形状は不整形でしっかりと掘込まれていた。P1については柱痕が検出された。

遺物 柱穴覆土から土師器片、須恵器片が少量出土した。また、石鏃1点が出土したが、本掘立柱建物跡に伴う遺物ではない。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の堀立柱建物跡と判断した。

B111 (旧8-008)

検出地区 D5-56G。台地先端、谷頭に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB110、B109、B112、8-004等がある。2基の掘立柱建物跡が重複関係にある。

B111a (旧8-008a)

遺構 2間(4.40m)×2間(4.20m)、長軸の主軸方向はN-45°-Eとなる側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の形状は不整形でしっかりと掘込まれていた。P1、P4、P5、P7については柱痕が検出された。

遺物 各柱穴覆土中から土師器片を中心に少量出土。P5からは転用硯と思われる須恵器の寛胴部片と墨が付着した土師器の坏が出土した。また、P7からは多文字の墨書土器が出土している。

所見 出土遺物から、平安時代の掘立柱建物跡と判断した。覆土の観察から、重複するB111b(旧8-008b)より古いと判断した。

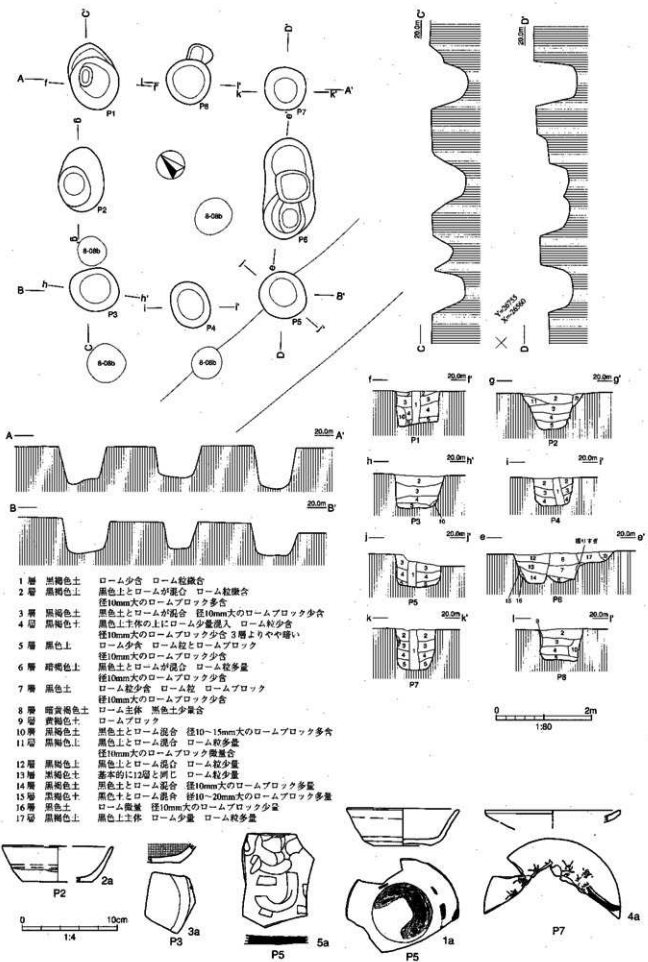


図 2-3-57 8-008a

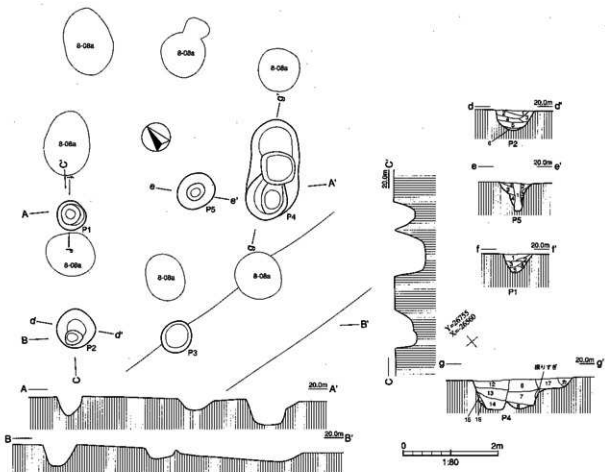


表 2-3-23 8-010遺物観察表

図 2-3-58 8-008b

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	118×62×39 ロクロ成形 外面 体部下端へラケズリ 底面 回転未切り 回転ヘラケズリ	橙褐色	緻密	1/2	墨付着 体部、底面外面
2	土師器 坏	(118)×(74)×38 ロクロ成形 外面 体部下端へラケズリ 底面 回転未切り 回転ヘラケズリ	淡褐色	緻密	1/4	
3	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端へラケズリ 内面 体部底面ミガキ	①淡褐色 ②黒褐色		体部 底面片	墨書「□」 体部外面 内黒
4	土師器 差	142×-×(30) ロクロ成形 内面 丁寧なミガキ	褐色	緻密	1/4	墨書「」 体部外面
5	須恵器 差	-×-×- 内面が非常によく研磨されている。転用痕か？ 外面 タタキ	①黒褐色 ②灰		胴部片	

B111b (旧8-008b)

遺 構 2間(4.45m)×1間以上の、側柱の掘立柱建物跡と考えられる。長軸の主軸方向はN-40°-Eとなる。各柱穴の形状は不整形形でしっかりと掘込まれていた。P5については柱痕が検出された。中近世以降の溝と重複し、全体を検出することはできなかった。

遺 物 各柱穴覆土中から土師器片を中心に少量出土。

所 見 出土遺物から平安時代の掘立柱建物跡と判断した。覆土の観察から、重複するB111a(旧8-008a)より新しいと判断した。

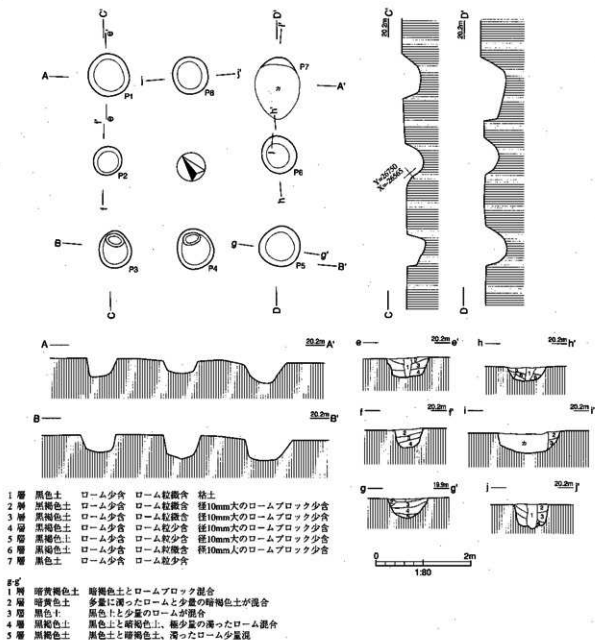


図 2-3-59 8-007

B112 (旧8-007)

検出地区 D5-47G。台地先端、谷頭に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB111、8-004等がある。

遺構 2間(3.60m)×2間(3.54m)、長軸の主軸方向はN-39°-Eとなる側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の形状は不整形でしっかりと掘込まれていた。P8については柱痕が検出された。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土しなかったが、遺構の形態、覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

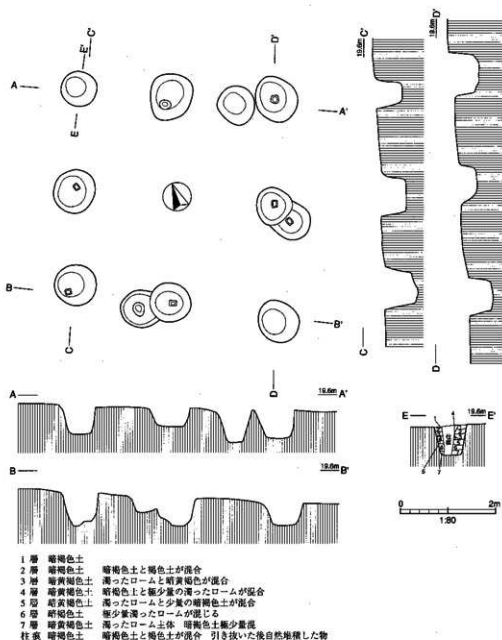


図 2-3-60 4-003

B113 (旧4-003)

検出地区 D5-78G。台地先端、谷頭に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB114、3-005等がある。

遺構 2間 (4.44m) × 2間 (4.42)、長軸の主軸方向はN-21° -Wとなる御柱の堀立柱建物跡である。各柱穴の形状は不整形でしっかりと掘込まれていた。PIについては柱痕が検出された。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土しなかったが、遺構の形態、覆土の観察等から奈良・平安時代の堀立柱建物跡と判断した。柱穴の配置等から一部、柱(P4、P4、P4)の建て替え、或いは補強が行われたと考えられる。

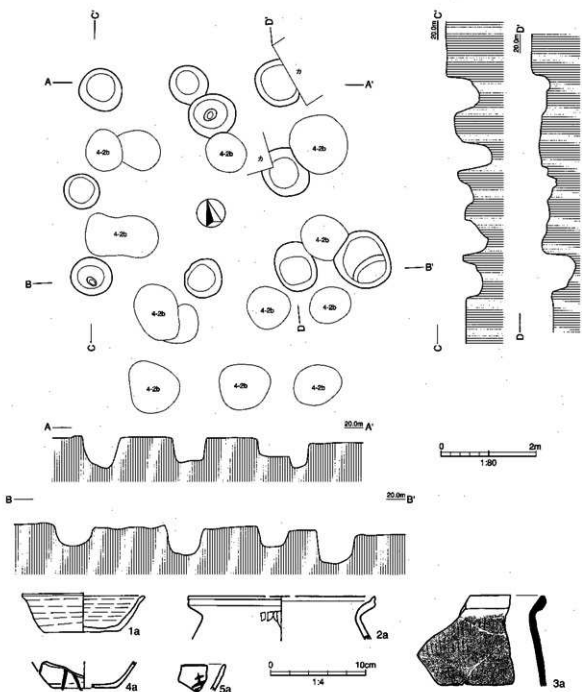


図 2-3-61 4-002a

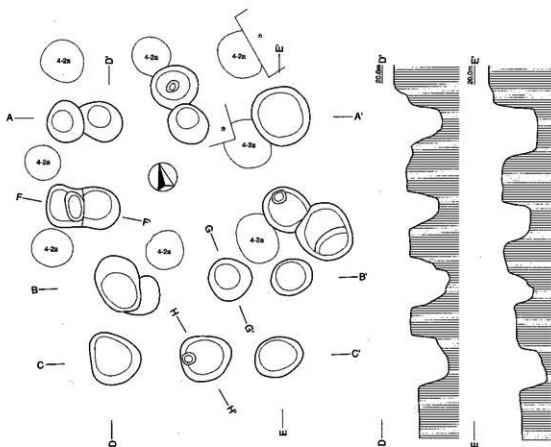
B114 (旧4-002)

検出地区 D5-77G。台地先端、谷頭に位置する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてB113、3-005、3-001等がある。2棟の掘立柱建物跡の重複である。それぞれの遺構の個別の報告を行い、その後、所見を述べることにする。また、遺物実測図に付してあるアルファベットは、それぞれに帰属する掘立柱建物跡を示している。

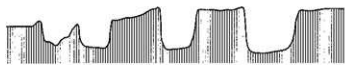
B114a (旧4-002b)

遺 構 梁行 2間 (3.62m) × 桁行 2間 (5.20m)、桁行きの長軸の主軸方向はN-14° -Eとなる庇付の側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の形状は不整形でしっかりと掘込まれていた。

遺 物 柱穴覆土中から土師器片を中心に少量出土した。



A— 20.0m A'



B— 20.0m B'



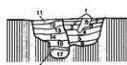
C— 20.0m C'



- F-F'
- 1層 暗褐色土 褐色土が混入
 - 2層 暗褐色土 少量の褐色土が混合
 - 3層 暗褐色土 焼土とローム散粒
 - 4層 暗褐色土 少量の褐色土混入
 - 5層 暗褐色土 少量の滑ったロームが混入
 - 6層 暗褐色土 暗褐色土と滑ったロームが混入
 - 11層 暗褐色土 褐色土が混入 ローム多量
 - 12層 暗褐色土 極少量の褐色土が見入
 - 13層 暗褐色土 ローム散粒含
 - 14層 暗褐色土 滑ったローム混入
 - 15層 暗褐色土 少量の滑ったロームが混入
 - 16層 暗褐色土 滑ったローム少量の暗褐色土が混入
 - 17層 暗褐色土 滑ったローム主体

- G-G'
- 1層 暗褐色土 暗褐色土主体
 - 2層 暗褐色土 極少量の褐色土
 - 3層 暗褐色土 極少量の褐色土が混入
 - 4層 暗褐色土 極少量の暗褐色土が混入
 - 5層 暗褐色土 褐色土が混入
 - 6層 暗褐色土 少量の褐色土
 - 7層 暗褐色土 暗褐色土と滑ったローム混合
- H-H'
- 1層 暗褐色土 褐色土が混入
 - 2層 褐色土 褐色土主体
 - 3層 暗褐色土 少量の褐色土が混入
 - 4層 暗褐色土 極少量の滑ったロームが混入
 - 5層 暗褐色土 極少量の褐色土が混入
 - 6層 暗褐色土 少量の滑ったローム混入
 - 7層 暗褐色土 滑ったロームと極少量の褐色土が混入

F— 20.0m F'



G— 20.0m G'



H— 20.0m H'



0 2m
1:80

図 2-3-62 4-002b

表 2-3-24 4-002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法 量 口径×底径×器高 成 形・測 量 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 坏	126×78×41 ロクロ成形 口縁外反 口唇厚みを持つ 外面 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色	砂粒 赤色粒 雲母	2/3	
2	土師器 甕	-X-X- 口唇つまみ上げ 外面 頸部-胴上半-縦位のヘラケズリ	橙褐色	粗砂粒	口縁- 胴上半	甕総型
3	須恵器 甕	-X-X- 外面 タタキ	緑灰青	石英 長石少	口縁片	
4	土師器 坏	-X-X- 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り後回転ヘラケズリ	砂褐色 砂褐色		体部- 底部	墨書「□」 体部外面
5	土師器 坏	-X-X-	褐色		口縁片	墨書「器」 体部外面

B114b (旧4-002a)

遺 構 2間(4.14m)×2間(4.14m)長軸の主軸方向はN-13°-Eとなる側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の形状は不整形でしっかりと掘込まれていた。

遺 物 柱穴覆土中から土師器片を中心に少量出土した。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。A棟、B棟ともに柱穴の配置等から一部、柱の建て替え或いは補強が行われたと考えられる。両棟の新旧関係は明らかにし得なかった。

(3) 土坑

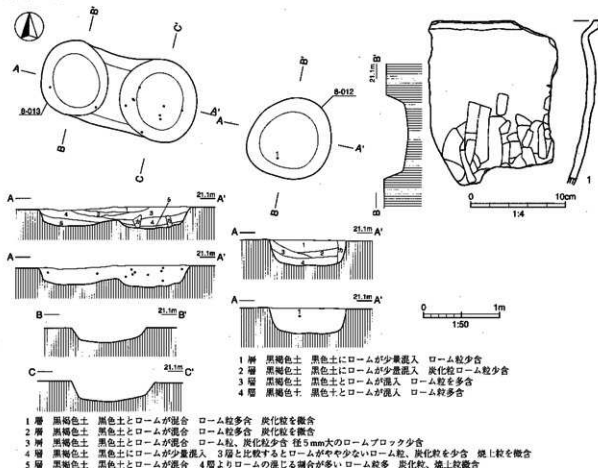


図 2-3-63 8-012.8-013

表 2-3-25 8-012遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	一×一×一 外面 胴中位-縦位のヘラケズリ	口唇を面取りし平坦面を作る	褐色	白色粒 砂粒少	口縁片	

8-012

検出地区 D5-84G。台地平坦面に立地。周囲の奈良・平安時代の遺構として8-003、8-013等がある。

遺構 不整形円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に4層に分層された。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土上層で土師器、甕形土器が1点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。形状が掘建柱建物跡の柱穴と類似する。

8-013

検出地区 D5-84G。台地平坦面に立地。周囲の奈良・平安時代の遺構として8-003、8-012等がある。

遺構 2基の円形の土坑が溝で連結されたような形状を呈す土坑である。両土坑ともしっかりと掘り込みを持ち、坑底は平坦でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に5層に分層された。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中層から上層にかけて土師器片を中心に小破片が少量(10点程度)出土した。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。形状が掘建柱建物跡の柱穴と類似する。

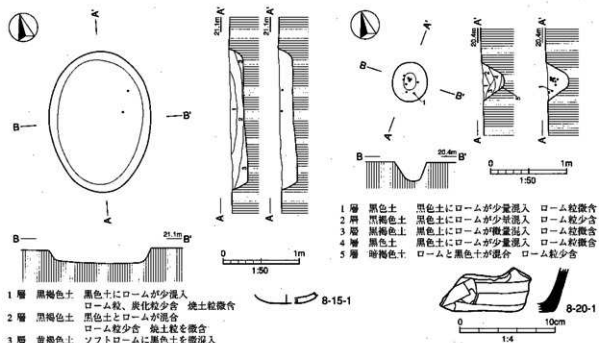


図 2-3-64 8-015, 8-020

表 2-3-26 8-015遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小皿	-×-×- 外面 底面一回転糸切り	淡褐色 青	緻密	底部片	

表 2-3-27 8-020遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 壺	-×-×- 外面 体部下端一横位のヘラケズリ	暗灰 青	石英 長石少	底部片	

8-015

検出地区 D5-84G。台地平坦面に立地。周囲の奈良・平安時代の遺構として8-003、8-012等がある。

遺 構 楕円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に3層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土上層から土師器片2点出土。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

8-020

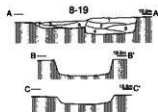
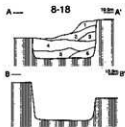
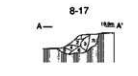
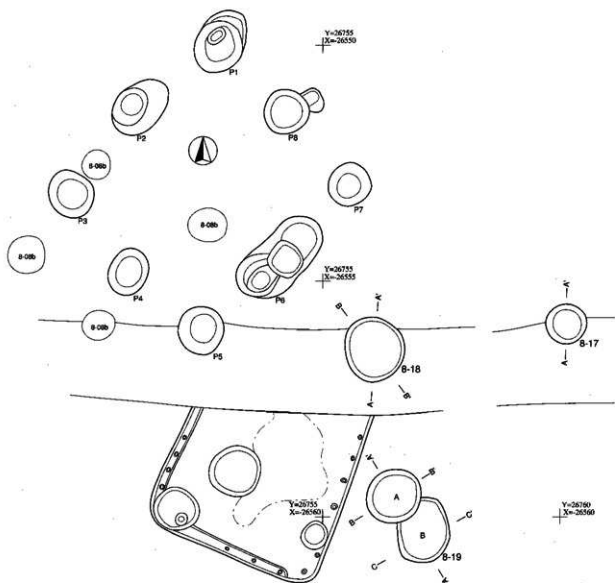
検出地区 D5-55G。台地平坦面に立地。周囲の奈良・平安時代の遺構としてB109、B110等がある。

遺 構 小型の円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は丸底で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に5層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土中層から上層にかけて小破片を中心に少量(20点)出土。

所 見 出土遺物等から奈良・平安時代の土坑と判断した。



- 1層 黒褐色土 黒色土にロームが少量混入 ローム粒少量
- 2層 黒褐色土 黒色土にロームが少量混入 ローム粒少量
- 3層 黒色土 黒色土にロームが少量混入 ローム粒、径5mm大のロームブロック少量
- 4層 黒褐色土 黒色土にロームが少量混入 ローム粒少量
- 5層 黒褐色土 ロームと黒色土が混入 径5mm大のロームブロック少量ローム粒多量
- 6層 黒褐色土 ロームと黒色土が混入 ローム粒多量 焼土粒微量

- 1層 黒褐色土 黒色土にローム少量混入 ローム粒少量
- 2層 黒褐色土 黒色土にローム少量混入 ローム粒径5mm大のロームブロック少量 焼土粒微量
- 3層 黒褐色土 黒色土にローム少量混入 ローム粒少量
- 4層 黒褐色土 黒色土にローム少量混入 ローム径5~10mm大のロームブロック多量
- 5層 黒褐色土 黒色土にローム少量混入 径5~15mm大のロームブロック少量 ローム粒多量 焼土粒微量
- 6層 黒褐色土 黒色土にローム少量混入 ローム粒少量

- 1層 黒褐色土 ロームと黒色土が混入 ローム粒少量
- 2層 黒褐色土 ロームと黒色土が混入 ローム粒多量 径5mm大のロームブロック少量 焼土粒微量
- 3層 黒色土 ロームと黒色土が混入 ローム粒多量 径5~10mm大のロームブロック少量 焼土粒少量
- 4層 黒褐色土 ロームと黒色土が混入 ローム粒 径5~10mm大のロームブロック多量
- 5層 黒褐色土 黒色土にロームが少量混入 ローム粒多量 焼土粒微量
- 6層 黒褐色土 ロームと黒色土が混入 ローム粒多量
- 7層 黒色土 ロームと黒色土が混入 ローム粒少量 焼土粒微量

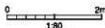


図 2-3-65 8-017.8-018.8-019

8-017

検出地区 D5-66G。台地平坦面に立地。周囲の奈良・平安時代の遺構としてB109、B111、8-018、8-004等がある。中近世以降の溝と重複関係にあり、本土坑の方が古い。

遺構 円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦で急傾斜で立ち上がる。

覆土は色調を基本に6層に分層された。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の土坑と判断した。掘建柱建物跡の柱穴に類似する。

8-018

検出地区 D5-56G。台地平坦面に立地。周囲の奈良・平安時代の遺構としてB109、B111、8-017、8-004等がある。中近世以降の溝と重複関係にあり、本土坑の方が古い。

遺構 円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に6層に分層された。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中に土師器、須恵器の小破片が少量出土。

所見 出土遺物、遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の土坑と判断した。掘建柱建物跡の柱穴に類似する。

8-019a

検出地区 D5-56G。台地平坦面に立地。周囲の奈良・平安時代の遺構として8-017、8-018、8-004等がある。2基の土坑の重複である。

遺構 円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に4層に分層された。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中層～上層にかけて小破片を中心に少量出土。

所見 出土遺物、遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の土坑と判断した。重複する8-019bより古い。

8-019b

検出地区 D5-56G。台地平坦面に立地。周囲の奈良・平安時代の遺構として8-017、8-018、8-004等がある。2基の土坑の重複である。

遺構 楕円形の土坑でしっかりとした掘込みをもつ。坑底は平坦で、斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に3層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中層～上層にかけて小破片を中心に少量出土。

所見 出土遺物、遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の土坑と判断した。重複する8-019aより新しい。

第4項 グリッド出土遺物

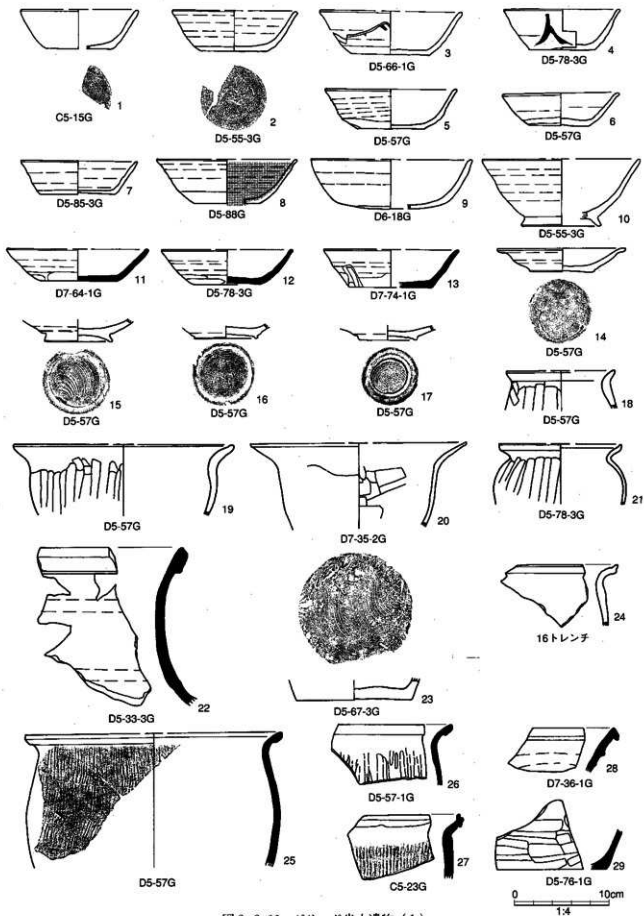


図 2-3-66 グリッド出土遺物 (1)

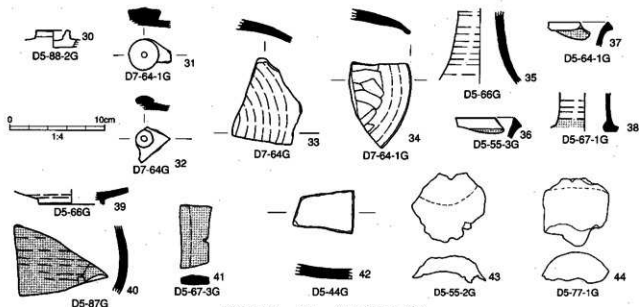


図2-3-67 グリッド出土遺物(2)

表2-3-28 グリッド出土遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(123)×(70)×42 胴部 下端へラケズリ 底部 中央回転糸切り 底縁へラケズリ	褐色 青	緻密	1/4	
2	土師器 坏	(132)×70×43 ロクロ成形 胴部下端へ回転ヘラケズリ 底部へ回転ヘラケズリ	灰褐色 良	緻密	1/4	墨書「口」 底部外面
3	土師器 坏	胴部下端へ回転ヘラケズリ 底部へ回転ヘラケズリ	灰褐色 青	緻密	1/4	墨書「1」 体部外面 赤彩有り
4	土師器 坏	122×70×42 胴部下端へラケズリ 底部へ回転ヘラケズリ	褐色 青	緻密	4/5	墨書「人」 体部外面
5	土師器 坏	(138)×70×42 胴部下端へラケズリ 底部へ回転ヘラ切り	褐色 褐色 良	緻密	2/3	
6	土師器 坏	120×60×35 胴部下端へラケズリ 底部中央へ回転ヘラ切り 底縁へ回転ヘラケズリ	褐色 青	緻密	4/5	
7	土師器 坏	120×72×37 胴部下端へラケズリ 底部中央へ回転糸切り 底縁へ回転糸切り	褐色 青	緻密	1/2	
8	土師器 坏	胴部下端へ回転糸切り 底部底縁へ回転ヘラケズリ 内黒	暗赤褐色 青	緻密	1/4	
9	土師器 坏	(170)×(100)×71 外面 胴部上半へミガキ 中位へラケズリ 下半へミガキ	暗赤褐色 良	緻密	1/2	赤彩 内面
10	土師器 高台付坏	(166)×(84)×34 胴部下端へナゲ 高台部貼り付け	褐色 青	緻密	1/4	
11	須恵器 坏	(138)×70×37 ロクロ成形 胴部下端へラケズリ 底部へ静止ヘラケズリ	暗灰 暗青灰		1/2	赤色スコリア 少量含む

12	須恵器 坏	(148)×94×34 ロクロ成形 胴部下端-ヘラケズリ 底部-静止ヘラ切り	灰白 良	緻密	底部片	
13	須恵器 坏	(143)×(88)×40 ロクロ成形 胴部下端-ヘラケズリ 底部静止-ヘラ切り	⑤青灰 ⑥灰褐		1/4	雲母少量 含む
14	土師器 皿	(136)×67×25 ロクロ成形 底部-回転糸切り	褐色 骨	緻密	2/3	
15	土師器 高台付皿	—×71×(22) ロクロ成形 内面-丁寧なミガキを施す 底部中央-回転糸切り 底縁-ナデ	暗褐 骨	緻密	底部片	
16	土師器 高台付坏	—×67×(12) ロクロ成形 内面-丁寧なミガキを施す 底部-回転糸切り	暗褐 骨	緻密	底部片	
17	土師器 高台付坏	—×60×12 内面-ミガキ 底部中央-回転糸切り	暗褐 骨	緻密	底部片	
18	土師器 壺	ロクロ成形 胴部上半-縦位のヘラケズリ	褐 骨	砂粒少量 含む	口縁片	
19	土師器 壺	(232)×—×(76) ロクロ成形 胴部上半-縦位のヘラケズリ	褐 骨	緻密	口縁片	
20	土師器 壺	(128)×—×(90) ロクロ成形 口縁-頸部-ナデ 口唇をつまみ上げる 胴部上半-縦位のヘラケズリ	暗赤褐 骨	砂粒少量 含む	口縁片	
21	土師器 壺	(130)×—×65 ロクロ成形 口縁-頸部-ナデ 口唇をつまみ上げる 胴部上半-縦位のヘラケズリ	暗赤褐 骨	緻密	口縁片	砂粒少量 含む
22	土師器 壺	折り返し口縁・ロクロ成形	褐色 骨	緻密	口縁- 胴部片	
23	土師器 壺	—×122×(22) 胴部下端-横位のヘラケズリ 底部-回転糸切り	褐 骨		底部片	
24	土師器 壺	口唇をつまみ上げ ロクロ成形 口縁頸部ナデ	褐 骨	雲母・ 石英 灰石砂粒 各少含	口縁片	
25	須恵器 壺	(270)×—×(143) ロクロ成形 口縁-ナデ 胴部上半-タタキ目	褐 骨	砂粒少含	口縁片	
26	須恵器 壺	ロクロ成形 胴上半-縦位のヘラケズリ	⑤灰褐 ⑥灰	緻密	口縁片	
27	須恵器 壺	口唇をつまみ上げ・ロクロ成形 口縁-タタキ後ナデ 胴部上半-タタキ目	灰 良	雲母・ 石英少含 緻密	口縁片	
28	須恵器 壺	ロクロ成形	灰 骨	緻密	口縁片	
29	須恵器 壺	胴下端-横位のヘラケズリ	暗褐 骨	緻密	口縁片	
30	土師器 壺	つまみ口径 35 ロクロ成形 内面-ミガキ	⑤淡褐 ⑥黒	緻密	上部片 つまみ	内黒

31	須恵器 壺	つまみ径 34 ロクロ成形	灰青	緻密	上部片 つまみ	
32	須恵器 壺	つまみ径 18 ロクロ成形	灰青	緻密	上部片 つまみ	
33	須恵器 壺	-X-X- ロクロ成形 底部中央ヘラケズリ	灰良	緻密	1/4	
34	須恵器 壺	(180)X-X- ロクロ成形 底部中央ヘラケズリ	灰良	緻密	1/4	
35	須恵器 壺	-X-X- ロクロ成形	赤青灰 砂灰	緻密	胴部片	
36	灰釉陶器 壺	-X-X- ロクロ成形	青灰良	緻密	口縁片	
37	灰釉陶器 壺	-X-X- ロクロ成形	赤緑灰 砂灰	緻密	口縁片	
38	灰釉陶器 長頸壺	-X-X- ロクロ成形	赤褐 緑釉良	緻密	頸部片	平版の頸部か？
39	灰釉陶器 皿	-X70X- ロクロ成形	灰良	緻密	底部片	
40	灰釉陶器 短径壺	-X-X- ロクロ成形 胴部上半ヘラケズリ	赤暗灰 砂灰良	緻密	胴部片	
41	灰釉陶器 平瓶	-X-X- ロクロ成形	赤緑灰 砂灰良	緻密	把手	
42	須恵器 壺	-X-X- ロクロ成形 外面 胴部上半ータクキ 内面 胴部上半ーミガキ	灰良	緻密	胴部片	内面が非常に良く研磨されている 転用瓶か？

18	土師器 坏	ロクロ成形 胴部下端 - ヘラケズリ 底部底縁 - ヘラケズリ	褐 書	緻密	体部片 ~ 底部片	墨書「L」 体部外面
19	土師器 坏	ロクロ成形 胴部下端 - ヘラケズリ 底部底縁 - ヘラケズリ	褐 書	緻密	体部片 ~ 底部片	墨書「ロ」 体部外面
20	土師器 皿	ロクロ成形	褐 書	緻密	体部片 ~ 底部片	墨書「ロ」 体部外面
21	土師器 坏	ロクロ成形	褐 書	緻密	体部片	墨書「ロ」 体部外面
22	土師器 坏	ロクロ成形	褐 書	緻密	体部片 ~ 底部片	墨書「L」 体部外面
23	土師器 坏	ロクロ成形	褐 書	緻密	口縁片	墨書「ロ」 体部外面
24	土師器 坏	ロクロ成形 内面 ミガキ	淡褐	緻密	口縁片	墨書「ロ」 体部外面
25	土師器 坏	ロクロ成形 胴部下端・底縁 ヘラケズリ	褐 書	緻密	体部片	墨書「ロ」 体部外面
26	土師器 坏	ロクロ成形 胴部下端 ヘラケズリ 内面 ミガキ	赤褐 書	緻密	口縁片	墨書「人」 体部外面
27	土師器 坏	ロクロ成形 胴部下端・底縁 ヘラケズリ	褐 書	緻密	底部片	墨書「ロ」 体部外面
28	土師器 坏	ロクロ成形	橙褐 書	緻密	体部片	墨書「ロ」 体部外面
29	土師器 坏	ロクロ成形	褐 書	緻密	口縁片	墨書「ロ」 体部外面
30	土師器 坏	ロクロ成形	褐 書	緻密	体部片	墨書「ロ」 体部外面
31	土師器 皿	ロクロ成形	橙褐 書	緻密	口縁片	墨書「ロ」 体部外面
32	土師器 坏	ロクロ成形 胴部下端・底縁 ヘラケズリ	褐 書	緻密	底部片	墨書「ロ」 体部外面
33	土師器 坏	ロクロ成形	褐 書	緻密	体部片	墨書「ロ」 体部外面
34	土師器 坏	ロクロ成形	褐 書	緻密	体部片	墨書「ロ」 体部外面
35	土師器 坏	ロクロ成形	褐 書	緻密	体部片	墨書「ロ」 体部外面

36	土師器 坏	ロクロ成形	褐 青	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面
37	土師器 坏	ロクロ成形	褐 青	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
38	土師器 坏	ロクロ成形	褐 青	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
39	土師器 坏		褐 青	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面
40	土師器 坏		褐 青	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面
41	土師器 高台付皿	ロクロ成形	褐 青	緻密	底部片	墨書「□」 底部外面
42	土師器 坏	ロクロ成形	橙褐 青	緻密	底部片	墨書「人」 底部外面
43	土師器 坏	ロクロ成形 内外両赤彩 体部下端 ヘラケズリ 底部-静止糸切り 底縁-ヘラケズリ 内面 ミガキ	赤褐 良	緻密	底部- 体部	墨書「寺」 底部外面
44	土師器 坏				体部片	朱書「口」 体部外面
45	土師器 坏				体部片	朱書「口」 体部外面
46	土師器 高台付坏	底部 回転糸切り後ヘラケズリ	橙褐 青	緻密	底部片	墨書「ノ」 底部外面
47	土師器 坏	ロクロ成形 胴部下端 ヘラケズリ 底部 回転糸切り後ヘラケズリ	褐 青	緻密	底部片	墨書「×」 底部外面
48	須恵器 高台付坏	一×92×一 ロクロ成形	灰 良	緻密	底部片	墨書「×」 底部外面
49	須恵器 瓶	ロクロ成形	灰褐 良	緻密	底部片	墨書「力」 底部外面
50	土師器 高台付坏		褐 青	普通	底部片	墨書 「×」底部外面 「×」底部内面

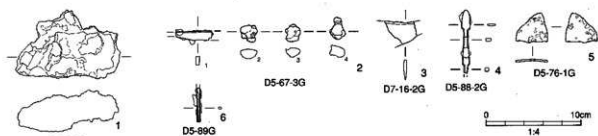


図 2-3-69 グリッド出土遺物

表 2-3-30 グリッド出土遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の 特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鉄滓	長軸73 幅106 厚さ40 重量316.8g					木炭及び木炭灰を多く残す 砂鉄付着 表面に土砂付着
2	鉄器 刀子?	長軸40 短軸9 厚さ4 重量5.0g 長軸18 短軸17.5 厚さ10 重量4.3g 長軸18 短軸15 厚さ10 重量3.0g 長軸20.5 短軸15.5 厚さ11 重量2.9g					
3	鉄器 小鏝	長軸34 短軸21 厚さ3 重量3.8g					
4	鉄器 鉄線	長軸67 短軸8.5 厚さ2 重量5.8g 短軸5 厚さ3 短軸4 厚さ4					
5	鉄器	長軸33 短軸31 厚さ1.5 重量7.8g					
6	鉄器 釘	長軸36 短軸3 厚さ2 重量2.6g					

表 2-3-31 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模:長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
1-004	D7-06	閉丸方形 4.06×3.78×0.47 主軸 N-71°-W 床面直上から覆土層にかけて多量に 出土 黒褐色土器出土	床 ロームによる貼り床広範囲に硬化面を 検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に29層に分層 人為的な埋め戻 しが想定される	竈 西壁中央に位置 する 住居跡 周溝 中央に鍛冶炉 全周する 周溝幅 16cm 主柱穴 検出されず
1-006	D7-16	方形 4.60×-×0.44 主軸 N-28°-E 覆土中から多量に出土した	床 ロームによる貼り床で全体的にしっかり している 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に23層に分層 人為的な埋め戻 しが想定される	竈 検出されず 周溝 全周する 周溝幅 15cm 主柱穴 2本検出
1-007	D7-25	方形 3.32×3.75×0.51 床面直上～覆土層にかけて多量に出 土 条痕文出十数多い	床 ロームによる貼り床で住居跡中央部で 硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に12層に分層 人為的な埋め戻 しが想定される	竈 検出されず 周溝 全周する 周溝幅 14cm 主柱穴 検出されず
1-005b	D7-16	-×-×0.43 覆土中に多量に出土	床 黒色土とロームブロックの混合土による 貼り床で全体にやや軟弱 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に22層に分層 人為的な埋め戻 しが想定される	竈 住居跡北壁側で部 分的に検出 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず

1-012A	D7-74	方形 3.36×3.20×0.60 主軸 N-60°-W	床 ロームの良好な床住居跡中央で硬化面を 広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡西壁はほぼ中央に位置する 全周する 周溝 14cm 周溝幅 検出されず 主柱穴
		覆土中から多量に出土	色調を基本に3層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
9-002	C4-64	方形 3.03×1.96×0.65 主軸 N-5°-E	床 ロームと褐色土の混合土による貼り床 住居跡中央部で硬化面が広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 検出されず 周溝 全周する 周溝幅 24cm 周溝幅 検出されず 主柱穴
		覆土中から比較的多量に出土	色調を基本に5層に分層 概ね自然体積による埋没が考えられる	
9-017	D6-41	-×-×0.16	床 ソフトロームの床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 一部検出 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
			色調を基本に16層に分層	
9-004	C5-85	-×-×0.14	床 ロームを主体とした床で少量の暗褐色土、 褐色土が混ざる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 検出されず 周溝 一部検出 周溝幅 44cm 周溝幅 検出されず 主柱穴
8-003	D5-64G	方形 3.88×3.62×0.50 主軸 N-56°-W	床 ロームを主体にした貼り床で住居跡中央に 硬化面を広範囲に検出	竈 2基検出 周溝 全周する 周溝幅 24cm 周溝幅 検出されず 主柱穴
		床直から覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に11層に分層 人為的な埋め戻しの後自然体積による埋没が想定される	
8-004	D5-56G	隅丸長方形 3.78×-×0.10 主軸 N-22°-E	床 ロームと黒色土の混合土による貼り床で 住居跡中央に硬化面が広がる 壁 ロームの壁で浅く斜めに立ち上がる	検出されず 周溝 一部で検出 周溝幅 24cm 周溝幅 検出されず 主柱穴
		床直を中心に少量出土	色調を基本に2層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
3-002	D5-66G	方形 5.62×5.2×0.6 主軸 N-24°-E	床 ロームと暗褐色土の混合土による貼り床で、 中央で硬化面が広範囲に広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡北壁はほぼ中央に位置する 全周する 周溝幅 22cm 周溝幅 4本柱 主柱穴
		床直～覆土層にかけて多量に出土 墨書土器・金属器が出土	色調を基本に3層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
4-004	D7-67G	方形 -×3.95×0.55 主軸 N-37°-E	床 ローム主体とした貼り床で、住居跡中央部で 硬化面が広範囲に広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡北壁はほぼ垂直に立ち上がる 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 不明 主柱穴
		覆土中から多量に出土 墨書土器・金属器が多く出土	色調を基本に6層に分層 自然体積による埋没が想定される	
3-005	D5-77G	方形 3.10×3.0×0.48 主軸 N-120°-E	床 ロームを踏み固めた床で竈の反対側に 硬化面が広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡東壁はほぼ中央に位置する 周溝 全周する 周溝幅 16cm 周溝幅 検出されず 主柱穴
		覆土中に多量に出土	色調を基本に7層に分層 人為的な埋め戻しの後、自然体積による埋没が想定される	
3-001	D5-58G	方形 3.7×3.64×0.54 主軸 N-81°-W	床 ロームをよく踏み固められた床で、住居跡中央で 硬化面が広範囲に広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡西壁はほぼ中央に位置する 周溝 全周する 周溝幅 22cm 周溝幅 検出されず 主柱穴
		覆土中に多量に出土	色調を基本に12層に分層 人為的な埋め戻しの後、自然体積による埋没が想定される	
5-007	D5-98G	方形 3.08×2.88×0.33 主軸 N-93°-E	床 ロームをよく踏み固めた床で、住居跡中央で 硬化面が広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡東壁はほぼ中央に位置する 周溝 全周する 周溝幅 14cm 周溝幅 検出されず 主柱穴
		床面直上～覆土層にかけて少量出土	色調を基本に13層に分層 自然体積による埋没が想定される	

4-001	D5-87G	<p>方形 3.57×3.48×0.38 主軸 N-14°-E</p> <p>床面直上～覆土上層にかけて少量出土 埴甲鉄滓出土</p>	<p>床 ロームをよく踏み固められた床で硬化面が広範囲に広がる</p> <p>壁 ロームは壁ではほぼ垂直に立ち上がる</p> <p>色調を基本に14層に分層 自然堆積による埋没が想定される</p>	<p>竈 住居跡北壁ほぼ中央で検出される 周溝 全周する 周溝幅 16cm 主柱穴 検出されず</p>
5-007	D5-98G	<p>方形 3.08×2.88×0.33 主軸 N-93°-E</p> <p>床面直上～覆土上層にかけて多量に出土</p>	<p>床 ロームをよく踏み固められた床で、住居中央で硬化面が広がる</p> <p>壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる</p> <p>色調を基本に13層に分層 自然堆積による埋没が想定される</p>	<p>竈 住居跡東壁ほぼ中央で検出される 周溝 全周する 周溝幅 14cm 主柱穴 検出されず</p>
5-008	D6-8G	<p>方形 3.22×3.16×0.44 主軸 N-69°-W</p> <p>床面直上～覆土上層にかけて多量に出土</p>	<p>床 ロームを踏み固めた床。住居跡中央に硬化面を検出</p> <p>壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる</p> <p>色調を基本に12層に分層 人為的な歪みが生じている</p>	<p>竈 住居跡西壁ほぼ中央に位置する 周溝 全周する 周溝幅 10cm 主柱穴 検出されず</p>
5-002	D6-17G	<p>方形 2.12×2.15×0.3 主軸 N-4°-E</p> <p>覆土下層～上層にかけて少量出土 床直遺物は少ない</p>	<p>床 ロームを踏み固めた床</p> <p>壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる</p> <p>色調を基本に概ね8層に分層 自然堆積による埋没が想定される</p>	<p>竈 住居跡北壁ほぼ中央に位置する 周溝 全周する 周溝幅 20cm 主柱穴 検出されず</p>
1-001	D6-28G	<p>方形</p> <p>覆土中から多量に出土 阿玉台式の混入が多く認められる</p>	<p>床 ロームを踏み固めた床</p> <p>壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる</p>	<p>竈 周溝一部で検出 周溝幅 不明 主柱穴 不明</p>
1-002	D6-38G	<p>方形 3.60×3.11×0.31 主軸 N-71°-W</p> <p>覆土中から多量に出土</p>	<p>床 ロームをよく踏み固めた床。住居跡中央部に硬化面を検出</p> <p>壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる</p> <p>色調を基本に13層に分層 自然堆積による埋没が想定される</p>	<p>竈 住居跡西壁ほぼ中央に位置する 周溝一部検出 周溝幅 16cm 主柱穴 不明</p>
1-003	D6-38G	<p>方形 3.36×3.52×0.52 主軸 N-28°-E</p> <p>覆土中から多量出土</p>	<p>床 ロームをよく踏み固めた床で、住居跡中央に硬化面を検出。土境に壊される</p> <p>壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる</p> <p>色調を基本に概ね9層に分層 自然堆積による埋没が想定される</p>	<p>竈 住居跡東壁ほぼ中央に位置する 周溝一部検出 周溝幅 20cm 主柱穴 不明</p>

表 2-3-32 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

(単位m)

遺構番号	間 数		主軸方位	柱穴規模 (長軸×短軸×深さ)				備 考
	桁 行	梁 行		P1	P2	P3	P4	
B101 (1-200)	-×2	N-55°-W	P1 (1.2×0.96×0.98) P3 (0.8×0.7×0.42) P5 (0.76×0.74×0.28) P7 (0.6×0.55×0.5) P9 (0.54×-×0.86)	P2 (0.94×0.94×0.6) P4 (1×1×0.5) P6 (1×0.9×0.74) P8 (1.22×1.14×0.74)			比付きか? 第1群	
	-	4.27						
B102 (1-201)	-×2	N-56°-W	P1 (0.96×0.96×0.8) P3 (0.94×0.8×0.6) P5 (0.94×0.9×0.64)	P2 (1.14×1.04×0.6) P4 (0.98×0.92×1) P6 (0.76×0.76×1)			第1群	
	-	3.7						
B103 (1-204a)	-×2	N-40°-E	P1 (0.74×0.72×0.28) P3 (1.1×0.78×0.76) P5 (0.42×-×0.54)	P2 (0.66×0.64×0.26) P4 (0.88×0.8×0.78) P6 (0.56×-×0.94)			第1群	
	-	4.48						
B104 (1-204b)	-×2	N-55°-E	P1 (1.16×1.02×1.08) P3 (1.22×1.1×0.9) P5 (1×0.78×0.9)	P2 (0.6×0.54×1.28) P4 (0.87×0.75×0.3)			第1群	
	-	4.24						
B105 (1-77-80)	-×-	-	P1 (0.78×0.76×1.06) P3 (0.96×0.76×0.76) P5 (1.12×0.86×1.04) P7 (0.84×0.58×-)	P2 (0.86×0.86×0.64) P4 (1.16×0.86×0.7) P6 (0.78×0.76×1)			第1群	
	-	-						

B106 (1-202a)	2× -	N-59°-E	P1 (0.84×0.78×0.56) P3 (0.86×0.74×0.52) P5 (1.06×0.88×0.6)	P2 (0.96×0.8×0.68) P4 (0.86×0.8×-)	第1群
	-	3.38			
I101 (1-202b)	-	N-37°-W	P1 (1.18×0.88×0.66) P3 (1.26×0.6×0.76) P5 (1.2×1×0.72)	P2 (0.94×0.8×0.54) P4 (1.2×1.18×0.76)	第1群
	6.36	2.74			
I102 (1-53-56)	-	-	P1 (0.9×0.7×0.44) P3 (1.08×0.9×0.44)	P2 (0.88×0.8×0.38) P4 (0.72×0.7×0.6)	第1群
	-	-			
I103 (1-31, 39b,29c)	-	N-15°-E	P1 (0.7×0.18×0.34) P3 (1.2×0.8×0.28)	P2 (0.8×0.66×0.4)	第1群
	2.1	1.76			
I104 (1-39,33, -32)	-	N-47°-E	P1 (1.28×1.16×0.32) P3 (0.78×0.7×0.58)	P2 (0.74×0.7×0.5)	第1群
	3.7	2.66			
I105 (1-48-50)	-	N-11°-W	P1 (1.4×0.96×0.42) P3 (1.5×1.2×0.4)	P2 (1.5×1.36×0.5)	第1群
	4.0	2.92			
B107 (9-18-22)	-	N-49.5°-W	P1 (0.86×0.34×0.54) P3 (1.1×0.89×0.56) P5 (0.68×0.28×0.2)	P2 (0.96×0.92×1) P4 (1.2×0.66×0.6)	第2群
	5.26	3.86			
I106 (9-25-29)	-	N-9°-W	P1 (0.4×0.38×0.2) P3 (1.08×0.3×0.3) P5 (0.52×0.49×0.12)	P2 (0.28×0.22×0.04) P4 (0.84×0.24×0.24)	第2群
	2.46	1.68			
B108 (8-016)	-	N-19°-W	P1 (0.4×0.38×0.2) P3 (1.08×0.3×0.3) P5 (0.52×0.49×0.12)	P2 (0.28×0.22×0.04) P4 (0.84×0.24×0.24)	第3群
	2.46	1.68			
B109a (8-10a)	-	N-46°-W	P1 (0.9×0.86×0.82) P3 (0.8×0.78×0.68) P5 (0.82×0.8×0.6) P7 (1.02×0.94×0.56) P9 (1×1×0.8)	P2 (0.9×0.8×0.96) P4 (0.82×0.82×0.8) P6 (0.92×0.9×0.72) P8 (1.04×0.74×0.76) P10 (0.86×0.8×0.76)	第3群
	5.7	3.98			
B109b (8-10b)	-	N-40°-E	P1 (0.82×0.64×0.42) P3 (0.82×0.82×0.48) P5 (0.6×0.5×0.34) P7 (0.54×0.46×0.36)	P2 (0.74×0.7×0.28) P4 (0.6×0.5×0.4) P6 (0.66×0.56×0.5)	第3群
	4.16	3.89			
B109c (8-10c)	-	N-53°-W	P1 (0.74×0.72×0.56) P3 (0.82×0.8×0.48) P5 (0.9×0.86×0.5) P7 (0.9×0.9×0.66)	P2 (1.04×0.74×0.36) P4 (1.02×1×0.32) P6 (0.88×0.76×0.42) P8 (0.82×0.64×0.52)	第3群
	4.63	3.86			
B110 (8-009)	-	N-44°-W	P1 (1.1×1.08×0.7) P3 (1.52×1.36×0.86)	P2 (1×1×0.94) P4 (1.28×0.92×0.94)	第3群
	-	4.7			
B111a (8-008a)	2×2	N-45°-E	P1 (1.12×1.14×0.7) P3 (1.05×0.94×0.68) P5 (1×0.97×0.63) P7 (0.92×0.88×0.87)	P2 (1.36×0.96×0.75) P4 (1×0.84×0.59) P6 (2.14×1.04×0.62) P8 (0.94×0.94×0.65)	第3群
	4.4	4.2			
B111b (8-008b)	-	N-40°-E	P1 (0.61×0.6×0.39) P3 (0.72×0.64×-) P5 (0.84×0.72×0.6)	P2 (0.8×0.8×0.32) P4 (2.15×1.18×0.6)	第3群
	4.45	2.7			
B112 (8-007)	2×2	N-39°-E	P1 (0.9×0.86×0.4) P3 (0.8×0.68×0.32) P5 (0.88×0.85×0.32) P7 (1.94×1.3×0.4)	P2 (0.6×0.6×0.38) P4 (0.85×0.76×0.38) P6 (0.8×0.72×0.3) P8 (0.78×0.74×0.52)	第3群
	3.6	3.45			
B114a (4-002a)	2×2	N-13°-E	P1 (0.9×0.8×0.6) P3 (0.86×0.8×0.4) P5 (1.02×0.82×0.6) P7 (1.03×0.75×0.42)	P2 (0.74×0.71×0.22) P4 (0.84×0.78×0.55) P6 (1.06×0.8×0.24) P8 (1.18×1.12×0.64)	第3群
	4.14	4.14			
B114b (4-002b)	2×2	N-14°-E	P1 (1.56×0.82×0.72) P3 (1.48×0.9×0.8) P5 (0.88×0.74×0.47) P7 (1.15×1.26×0.83) P9 (1.15×1.03×0.67) P11 (1.04×0.86×0.6)	P2 (1.51×0.9×0.81) P4 (0.9×0.85×0.6) P6 (2.04×1.12×0.58) P8 (1.7×1×0.8) P10 (1.07×1×0.38)	此付き 第3群
	5.20	3.62			

B113 (4-005)	2×2	N-21-E	P1 (0.78×0.74×0.6) P3 (0.88×0.88×0.55) P5 (0.94×0.84×0.48) P7 (1.02×0.84×0.62)	P2 (0.94×0.86×0.5) P4 (1.45×0.82×0.6) P6 (1.3×0.74×0.38) P8 (1.04×0.95×0.39)	第3群
	4.44	4.42			

表 2-3-33 奈良・平安時代土坑一覽表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考 備
1-25	D7-86G	不整楕円形 しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。小穴1基を検出	色調を基本に12層に分層。人為的な埋め戻し。 覆土から条痕文系土器、古式土師器等3点出土。	2層の土坑の重複掘立の柱穴か？第1群
1-60		不整形 しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	— 覆土中から縄文土器少量出土。	掘立の一部か第1群
1-69	D7-16	不整楕円形 しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	— 覆土中から、条痕文系時、阿玉台式土器少量出土。	掘立の一部か第1群
1-92	D7-85G	不整形 しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	— 出土遺物無し。	掘立柱建物跡の一部か第1群
8-13	D5-84	不整形 P1 1.01×0.89×0.21 N-11°-W P2 1.12×1×0.25 N-6°-W 2基のP1が溝で連結されている。両P2とも坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。 覆土中層～下層にかけて、土師器片を中心に、小破片が少量(10点)出土。	
8-12	D5-84	円形 1.08×1.08×0.29 N-16°-E しっかりとした掘り込みを持ち、基底はほぼ平坦。ほぼ垂直に立ち上がる。	色調を基本に、4層に分層。おおむね自然堆積による埋没が想定される。 覆土上層で、土師器1点出土。	
8-15	D5-84	楕円形 1.88×1.34×0.2 N-16°-E しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される。 覆土上層から土師器片2点出土。	
8-20	D5-55	円形 0.52×0.46×0.26 N-16°-E しっかりと彫り込まれ、坑底は丸底である。斜めに立ち上がる。	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。 覆土中層～上層にかけて、小破片を中心に少量出土。	
8-17	D5-66	円形 0.87×0.84×0.4 N-35°-W しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。急傾斜で立ち上がる。	色調を基本に6層に分層。人為的な埋め戻しを想定。 遺物は出土していない。	
8-18	D5-56	円形 1.37×1.25×0.8 N-16°-W しっかりとした掘り込みを持ち、坑底は平坦。ほぼ垂直に立ち上がる。	色調を基本に6層に分層される。人為的な埋め戻しを想定させる。 覆土に土師器、須恵器小破片が少量出土。	
8-19a	D5-56	円形A 1.21×1.12×0.36 N-46°-E B 1.38×1.1×0.18 N-12°-W しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。ほぼ垂直に立ち上がる。	色調を基本に4層に分層。人為的な埋め戻しが想定される。 覆土中から小破片が少量出土。	
8-19b	D5-56	楕円形 1.38×1×0.18 N-12°-W しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される。 覆土中から小破片が少量出土。	

第4節 中世以降及び時期不明

中世以降の遺構については、塚5基、土塁4条、土坑4基、その他の遺構1基、溝が調査されている。
(中近世以降の遺構については向境遺跡検出の遺構と合わせて報告するものとする。)

(1) 神野群集塚(図2-4-3~13)

1号塚

検出地区 C5-33G他。台地平坦部に立地する。周辺の遺構に6-012等がある。

遺構 4.8m×4.5m、高さ0.9mの隅丸長方形の塚である。現況で、墳頂部に馬頭観音が祀られている。周溝及び主体部に類する付属施設等は検出されなかった。塚の突き固め方としては、下層が強く突き固められ、上層については突き固め方が弱かった。

遺物 塚盛土中に弥生土器片を中心に少量出土したが、本塚に伴う遺物は出土しなかった。

所見 中世以降の塚と判断した。盛土中から出土した弥生土器は、塚構築時に塚盛土中に混入したものと考えられる。近隣に弥生時代の土器棺墓6-011、6-012等が位置していることから、出土した弥生土器は、土器棺に使用した壺の一部の可能性が高い。

2号塚

検出地区 D3-93G他。台地平坦部に立地する。近世以降の土塁と接している。

遺構 10.5m×10.4m、高さ2.4mの隅丸方形の塚である。土層の断面から塚構築後周囲に溝が掘られ、更にその溝が埋没した状況が観察された。検出された周溝が本塚に伴う可能性は低い。その他、主体部に類する付属施設等は検出されなかった。

遺物 塚盛土中及び周溝覆土中に縄文土器片を中心に少量出土したが本塚に伴う遺物は出土しなかった。

所見 中世以降の塚と判断した。

3号塚

検出地区 D4-68G他。台地平坦部に立地する。4号塚と隣接し、近世以降の溝と重複関係にあり、本塚の方が古い。

遺構 10.6m×10.5m、高さ1.5mの隅丸方形の塚である。土層の断面から周囲に周溝が巡っていたことが観察された。塚の盛土は周囲の土を寄せて突き固めたと考えられ、周溝部分の土が利用されたと考えられる。塚の突き固め方としては、下層が強く突き固められ、上層については突き固め方が弱かった。塚基台部に隅丸長方形の土坑を検出した。浅いがしっかりとした掘込みをもち、坑底は平坦で斜めに立ち上がる。覆土の観察から人為的な埋戻しと判断した。以上の事柄から墓坑と考えられる。

遺物 塚盛土中及び周溝覆土中に縄文土器片を中心に少量出土した。土坑の検出面で、金属製品が出土した。周溝覆土から北宋銭が出土している。

所見 中世以降の塚で、墓と考えられる。

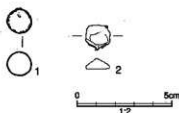


図2-4-1 3号塚出土遺物

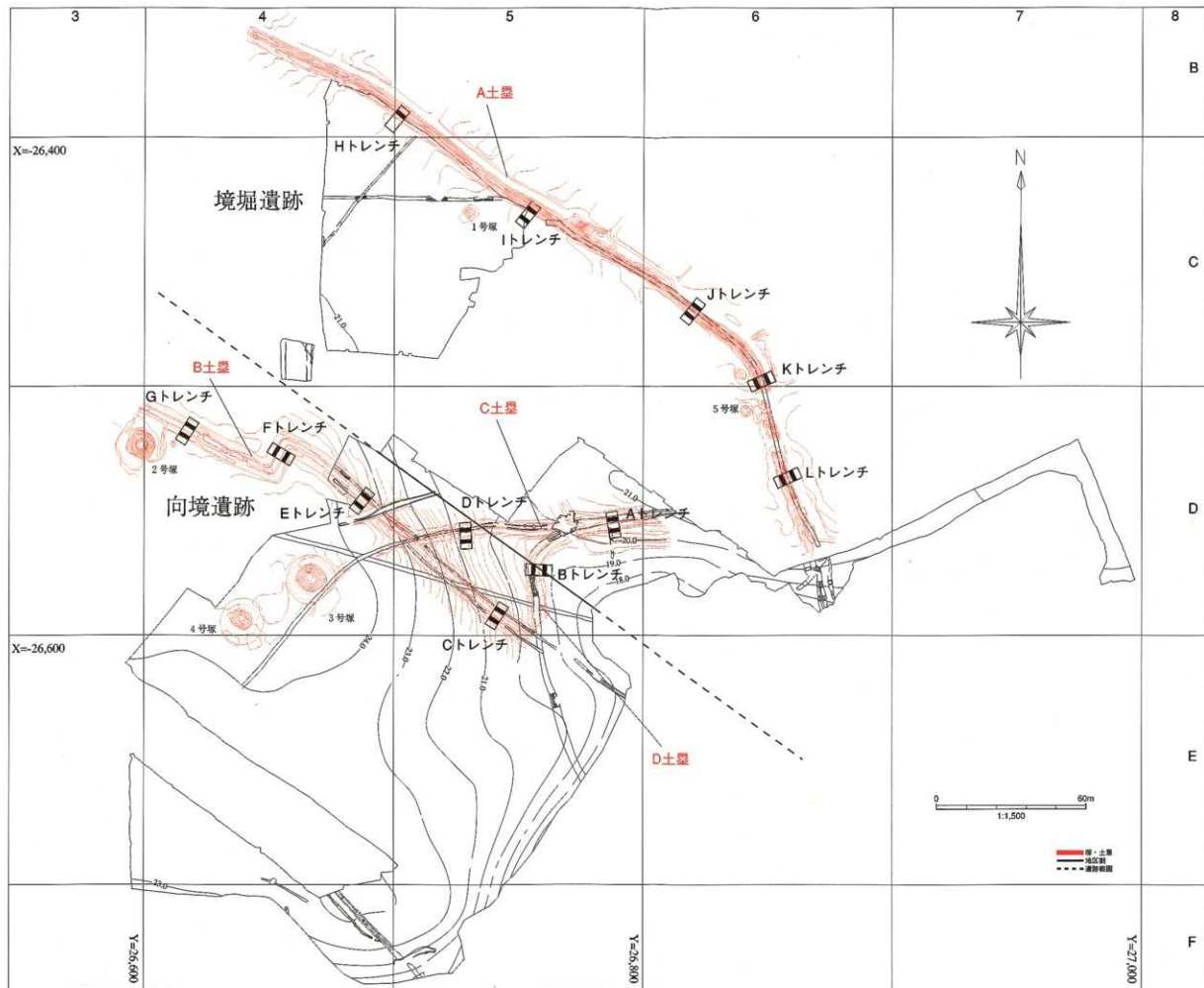


図 2-4-2 神野群集塚 1号塚

表 2-4-1 神野群集塚 3号塚遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	金属製品 鉄砲土?	径14 重量12.3 一端に鑄造時の「バリ」が残存する。				いわゆる「鉛青銅玉」か
2	鉄器 不明	長軸27 短軸25 厚さ11 重量9.0g				
3	古銭 北宋銭	径25 孔径7 厚さ1.3 重量2.7g 順読で「景祐元寶」とある。字体は「行書」か→「真書」かも?			略完形	初鑄年は宋1034年「北宋銭」であるが戦国時代か

4号塚

検出地区 D4-40G他。台地平坦部に立地する。3号塚と隣接する。

遺構 7.8m×6.4m、高さ1.2mの隅丸長方形の塚である。3号塚同様、土層の断面から周囲に周溝が巡っていたことが観察された。塚の盛土は周囲の土を寄せて突き固めたと考えられ、周溝部分の土が利用されたと考えられる。塚の突き固め方としては、下層が強く突き固められ、上層については突き固め方が弱かった。その他、主体部に類する付属施設等は検出されなかった。

遺物 塚周溝部を中心に縄文土器片を主体として少量出土したが、本塚に伴う遺物は出土しなかった。

所見 中世以降の塚と判断した。

5号塚

検出地区 D6-42G他。台地平坦部に立地する。近世以降の土塁、溝と重複関係にあり、本塚の方が古い。

遺構 5.3m×4.8m、高さ0.7mの小型の隅丸長方形の塚である。周溝及び主体部に類する付属施設等は検出されなかった。盛土下層から土坑3基を検出したが、土坑の土層観察、完掘状況の観察から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

遺物 塚盛土中に縄文土器片を中心に少量出土したが、本塚に伴う遺物は出土しなかった。

所見 中世以降の塚と判断した。

出土遺物

1 縄文式土器(図2-4-14)

神野群集塚では、封土下層の包含層より少なからず遺物が出土した。以下に時代を追って記してゆくことにする。縄文式土器は、比較的時期毎のまとまりがあり、かつ塚毎に時期を違えているという特徴があった。それは、前期末葉では3号塚・4号塚に、中期前半では5号塚、後期初頭は3号塚、後期末葉では2号塚という状況である。なお、土器片鏝は5号塚にまとまりが見られた。

1～6は縄文前期末葉で、6を除いて縄文系粗製土器。1・2は単口縁で、2は1段しの結節縄文を施文し、口唇上にも施す。3～5は複合口縁で、いずれも頸部及び口唇上に原体側面圧痕を施す。6は口唇部形態が尖頭状を呈し、外面の最終調整がエビナアの、無文系粗製土器である。

7は中期初頭。口縁片で、隆線を付して押捺を施す。八辺でない3期に比定される。8～14は中期前半。8・9は阿玉台1a式で、口縁片。8は波状縁、9は平縁で、ともに胎土は非雲母混入型。10以降は阿玉台1b式。10は波頂部を欠く。有節線あるいは角押文を施す。11は扇状把手を欠き、突起に沿って有節線文を施文。12は内稜を有し、突起を付すもの。これらの胎土は雲母混入型。13は双頭状の波状縁となる浅鉢で、胎土は非雲母混入型。14は平縁の浅鉢で、胎土は雲母混入型。

15～17は中期後半。15は2段RLを地文に、磨消懸垂文を施す。加曾利E2式。16は条線を地文に蛇行隆線を付す。曾利系土器。17は瓢形深鉢の口縁片で、浮文系意匠充填系土器。加曾利E3式。

18～25は後期初頭。18～20は縄文を充填するもの。23～25は格子文系の粗製土器で、これらは称名寺式(新)段階。21・22は網刺系土器。21は注口付土器で、注口部・把手及び胴下半を欠損。口縁内面は蓋受け状の段をなす。口縁下より微隆起線を貼付して曲線的な意匠を描く。22はおそらく4単位の把手が付けられた、樽形に近い深鉢。胴部に左下がり→右下がりの順で格子文を描き、頸部との境に横走沈線を引いて画する。21とは色調・胎土・焼成が近似しており、「兄弟土器」の印象すらある。

26・27は後期中葉。26精製鉢形土器、27は縄文系粗製土器。ともに加曾利B2式に比定される。

28・29は後期末葉。粗縄文系粗製土器で、施文工程は条線→紐帯貼付→連続押捺。安行2式。

2 土製品

30～35は土器片鏝。いずれも阿玉台式土器の胴部片を素材とし、長軸に索溝を刻み込む。中には35のように、使用中に欠損したため、再び索溝が刻まれた例(再生品の再生品)がある。

3 石器

唯一図化したのが打製石斧の36で、完存品。短冊形で、片面の一部に自然面を残す。この自然面を中心に摩滅が比較的顕著である。

4 弥生土器(図2-4-15 1～9)

神野群集塚出土の弥生土器は、1号塚を中心に出土している。これは、1号塚が境廻遺跡の弥生集落が展開した地区に立地しているためと考えられる。出土している土器が全て弥生後期にあたることも集落の展開と一致している。1～5は同一個体と考えられ、1号塚の部分でも若干触れたが、6-011、6-012で出土した土器と器形、胎土、焼成等が近似しており、土期棺として使用したものと考えられる。また、弥生時代の土期棺墓として検出された遺構は、前述の2基であるが、1号塚出土の土器を考慮すると、実際は、更に多い土器棺墓の存在を想定できる。また、6～9は土器棺に使用した土器ではないが、周囲に展開した後期集落の影響を受けたものと考えられる。出土遺物個々の詳細は観察表を参照されたい。

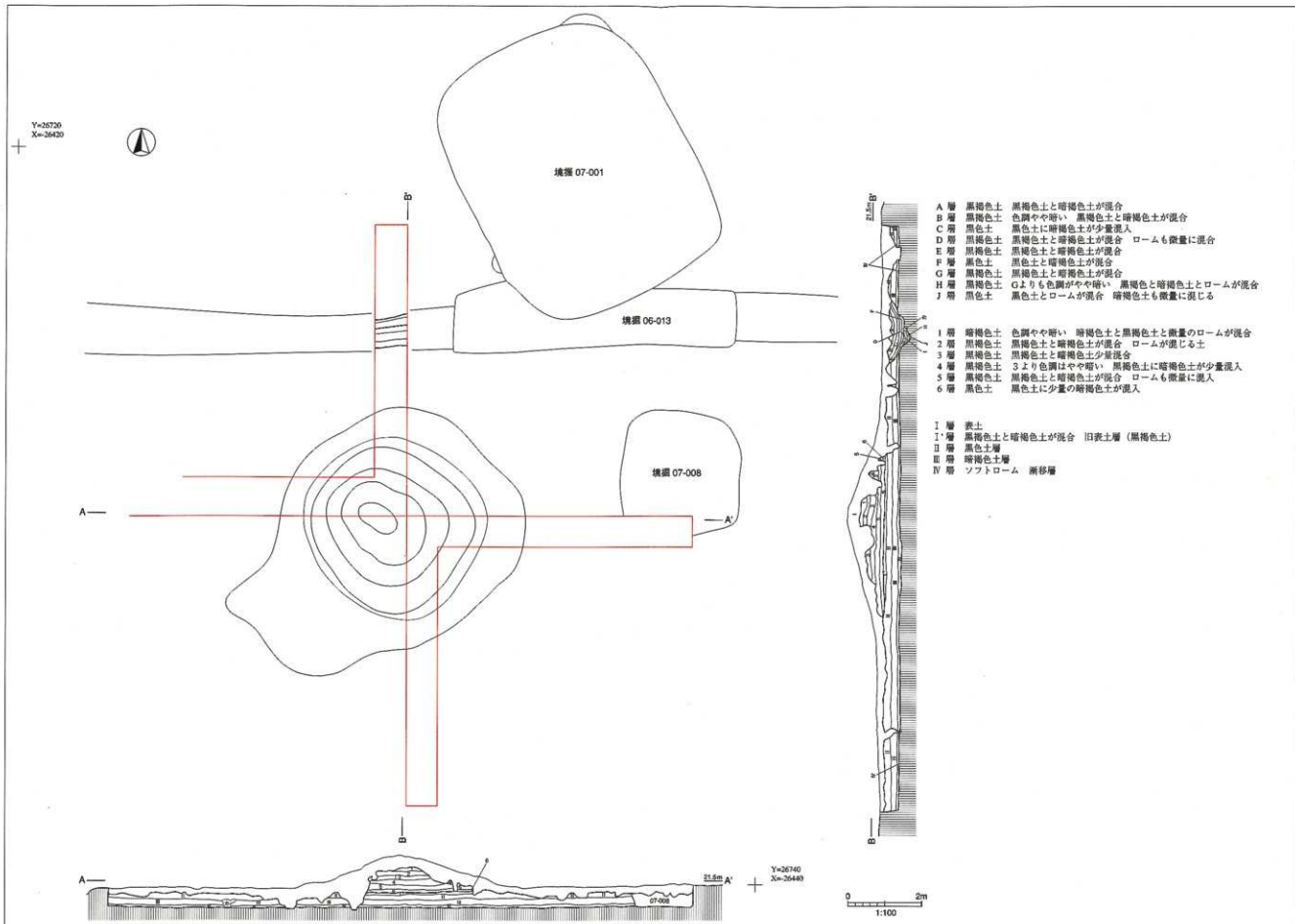


図2-4-3 神野群集塚1号塚

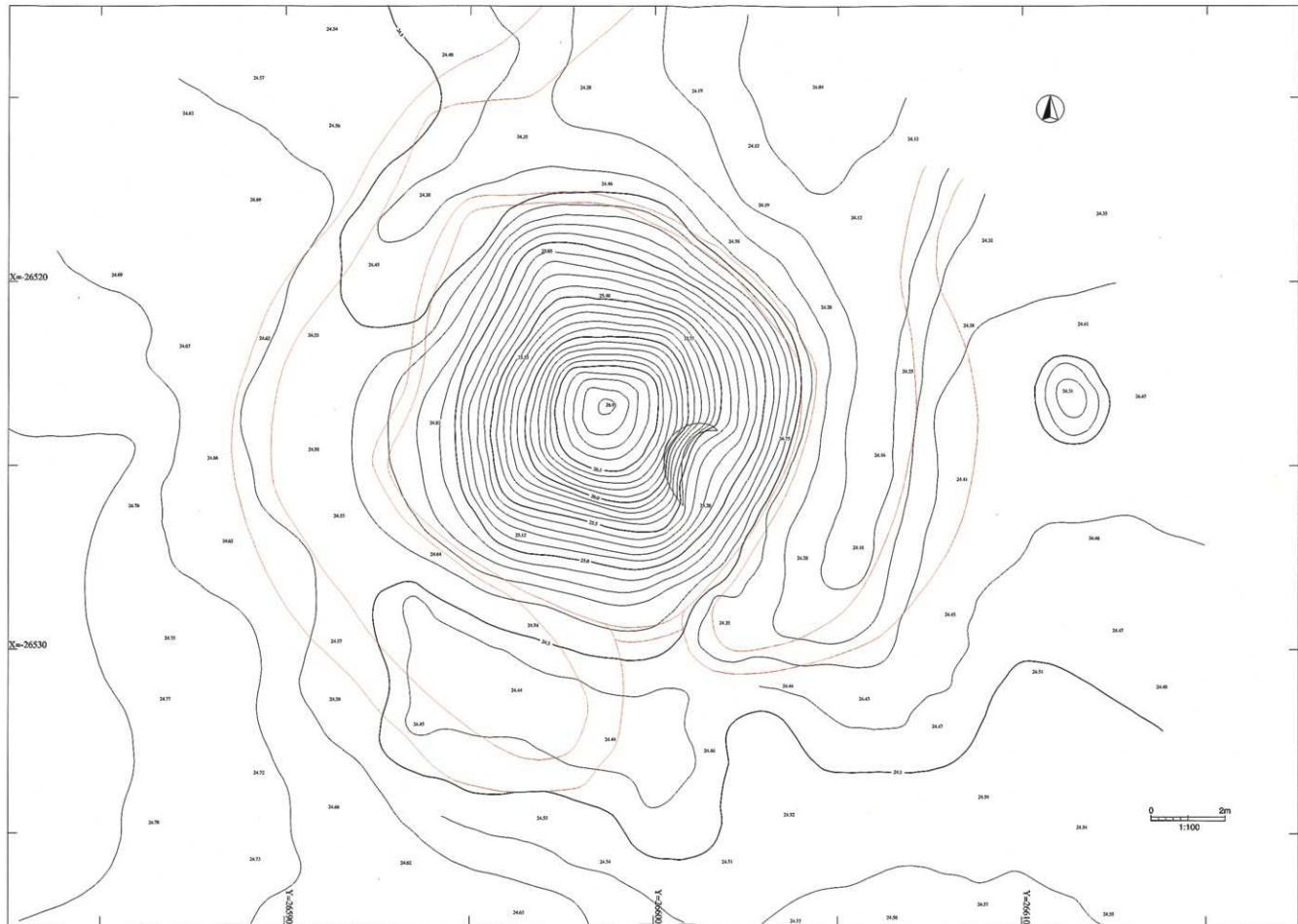


图 2-4-4 神野群集塚 2 号塚

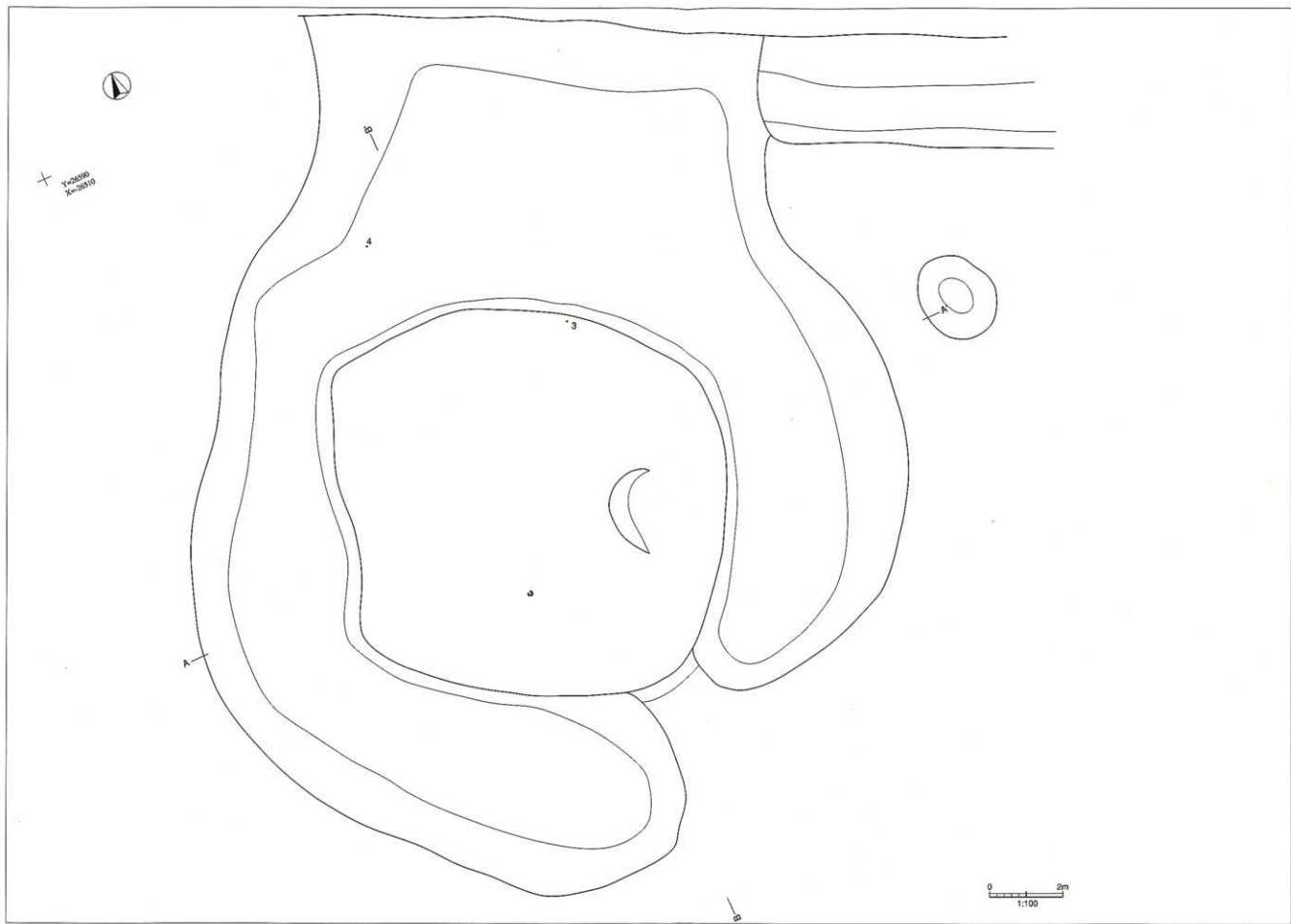
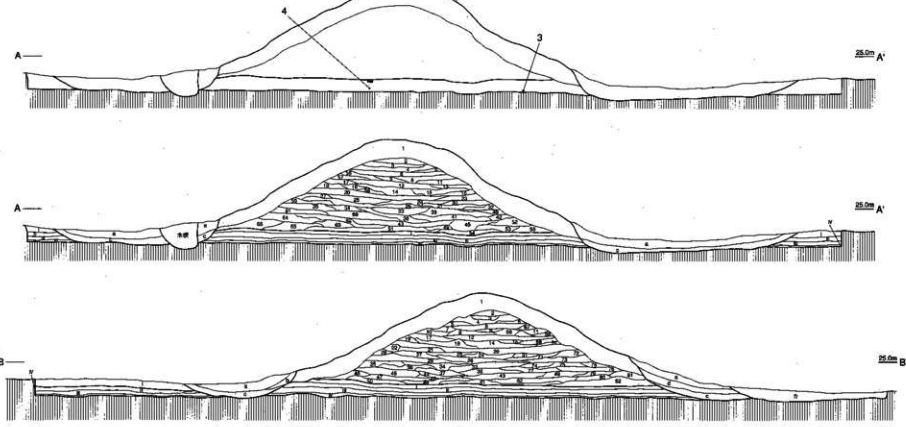


图 2-4-5 神野群集塚 2 号塚



- | | | | | |
|----------|------------------------|----------|---------------------|--------------------|
| 1層 黒褐色土 | 少量のロームと黒色土混入 | 42層 黒褐色土 | 少量のローム混入 | Ⅰ層 黄土 |
| 2層 暗褐色土 | やや多量のローム混入 | 43層 暗褐色土 | やや多量のロームと少量の黒色土混入 | Ⅱ層 黒色土層 |
| 3層 暗褐色土 | 少量のロームと少量の黒色土混入 | 44層 暗褐色土 | やや多量のローム混入 | Ⅲ層 暗褐色土層 |
| 4層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 45層 黒褐色土 | 多量のローム混入 | Ⅳ層 ソフトローム 断移層 |
| 5層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | 46層 暗褐色土 | 暗褐色土とロームが明確混入 | |
| 6層 黒褐色土 | 少量のロームと少量の黒色土混入 | 47層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | a層 暗褐色土 少量のローム混入 |
| 7層 暗褐色土 | 暗褐色土とロームが明確混入 | 48層 黒褐色土 | 少量のローム混入 | b層 暗褐色土 やや多量のローム混入 |
| 8層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 49層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | c層 黒褐色土 少量のローム混入 |
| 9層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 50層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | d層 暗褐色土 多量のローム混入 |
| 10層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | 51層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 11層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 52層 黒褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 12層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | 53層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 13層 暗褐色土 | 暗褐色土とロームが明確混入 | 54層 暗褐色土 | 暗褐色土とロームブロックが明確混入 | |
| 14層 暗褐色土 | やや多量のローム混入 | 55層 黒褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 15層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | 56層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 16層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | 57層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 17層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 58層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 18層 暗褐色土 | ローム主体 少量の暗褐色土混入 | 59層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 19層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | 60層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | |
| 20層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | 61層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 21層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | 62層 暗褐色土 | 暗褐色土とロームブロックが明確混入 | |
| 22層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | 63層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 23層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | 64層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 24層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | 65層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 25層 暗褐色土 | ローム主体 多量の暗褐色土と少量の黒色土混入 | 66層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 26層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | 67層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 27層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 68層 暗褐色土 | ロームブロック主体 少量の暗褐色土混入 | |
| 28層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 69層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 29層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 70層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 30層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | 71層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 31層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | 72層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 32層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | 73層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 33層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 74層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 34層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 75層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 35層 暗褐色土 | やや多量のローム混入 | 76層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 36層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 77層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |
| 37層 暗褐色土 | 暗褐色土とロームが明確混入 | 78層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 38層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | 79層 暗褐色土 | 暗褐色土とローム明確混入 | |
| 39層 暗褐色土 | 多量のロームと少量の黒色土混入 | 80層 暗褐色土 | ローム主体 多量の暗褐色土混入 | |
| 40層 暗褐色土 | やや多量のロームと少量の黒色土混入 | 81層 暗褐色土 | 少量のローム混入 | |
| 41層 暗褐色土 | ローム主体 多量の暗褐色土と少量の黒色土混入 | 82層 暗褐色土 | 多量のローム混入 | |



図2-4-6 神野群集塚2号塚

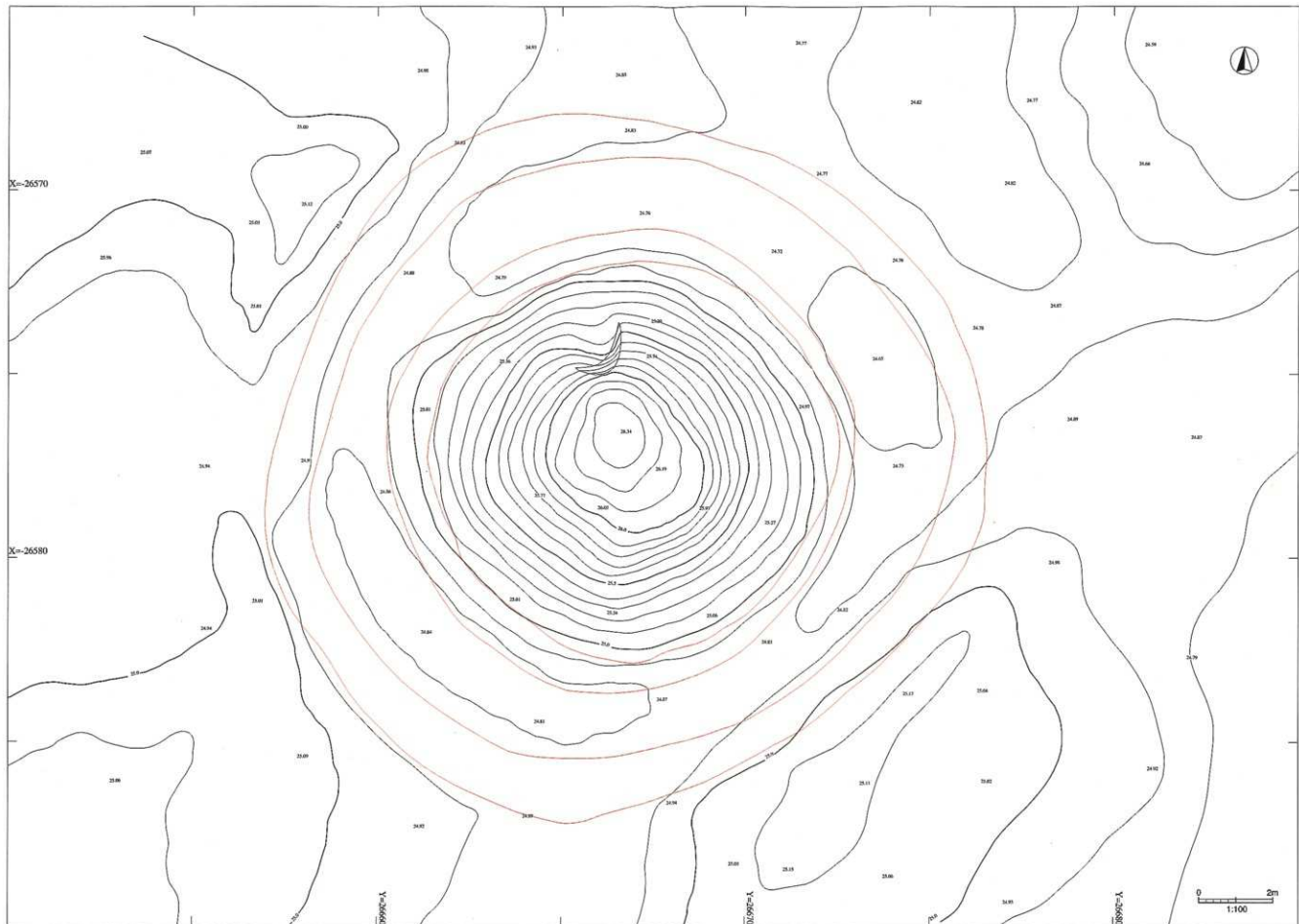


图 2-4-7 神野群集塚 3 号塚

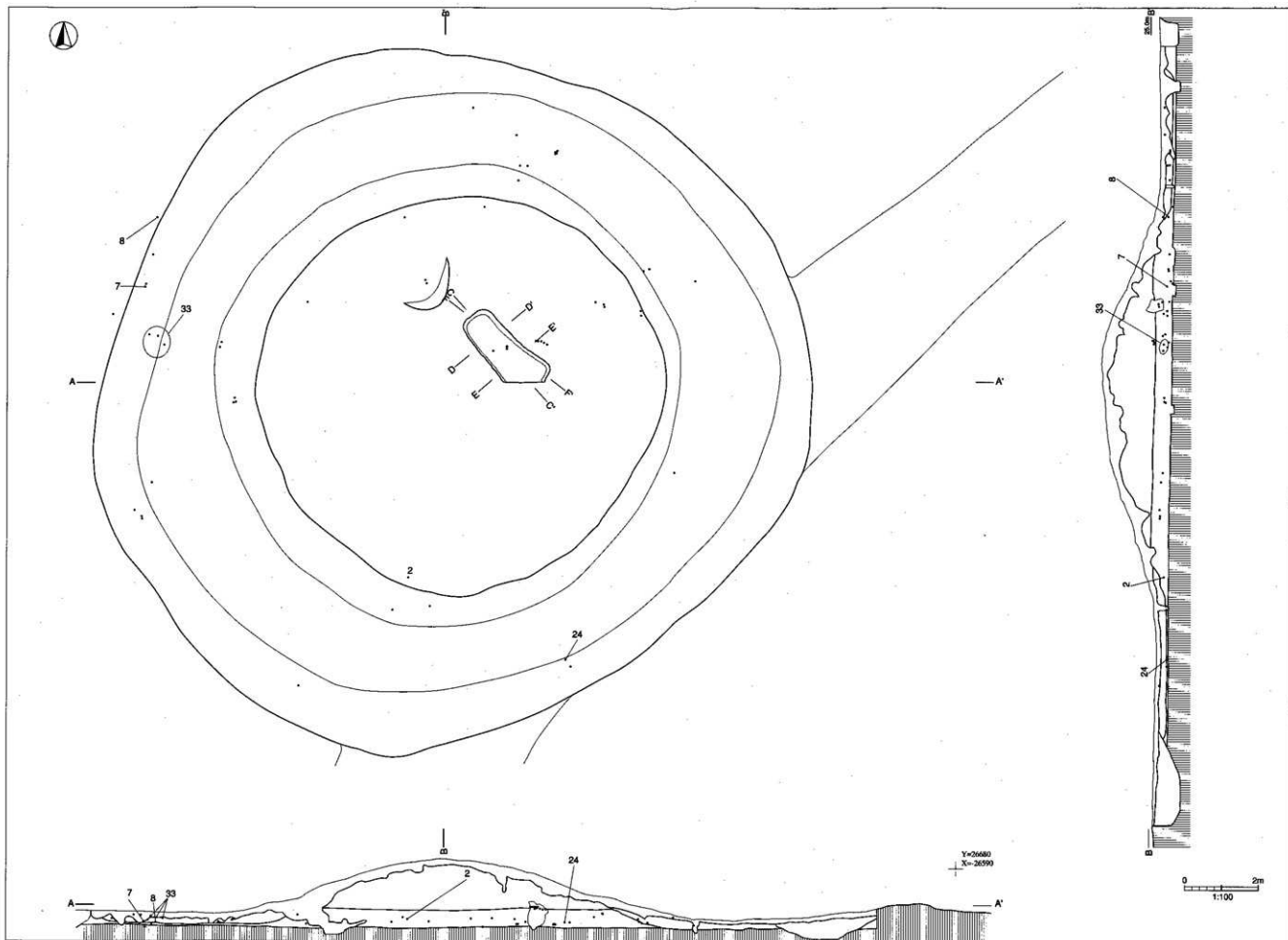
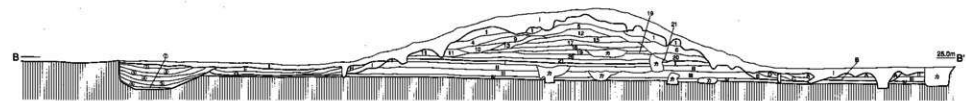
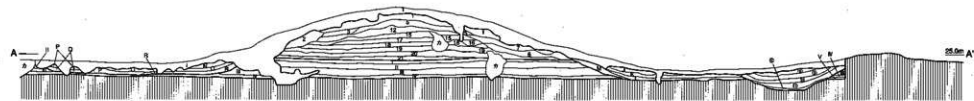


图 2-4-8 神野群集塚 3号塚



- A層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム微量含
- B層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- C層 暗褐色土 黒褐色土混合
- D層 暗褐色土 黒褐色土混合
- E層 黒褐色土 黒褐色土混合
- F層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム微量含
- G層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- H層 暗褐色土 黒褐色土混合
- I層 暗褐色土 黒褐色土混合
- N層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量含
- O層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- P層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- Q層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- R層 黒褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- J層 暗褐色土 黒褐色土散状
- K層 暗褐色土 黒褐色土混合
- L層 黒褐色土 □-ム黒褐色土混合
- M層 黒色土 暗褐色土少量

- 1層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- 2層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量含
- 3層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量散状に混入
- 4層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- 5層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- 6層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム少量含
- 7層 暗褐色土 暗褐色土混合 粘性強
- 8層 黒褐色土 暗褐色土混合
- 9層 暗褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量含
- 10層 暗褐色土 暗褐色土混合
- 11層 暗褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量含
- 12層 暗褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量含
- 13層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量含
- 15層 黒褐色土 暗褐色土混合
- 16層 黒褐色土 暗褐色土混合
- 17層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量含
- 18層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量散状に混入
- 19層 暗褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量散状に混入
- 20層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム少量散状に混入
- 21層 暗褐色土 暗褐色土混合 □-ム散状に混入

- ①層 暗褐色土 □-ム少量含
- ②層 暗褐色土 □-ム微量含
- ③層 暗褐色土 黒褐色土混合 □-ム微量
- ④層 黒褐色土 暗褐色土混合 □-ム微量
- ⑤層 黒褐色土 暗褐色土 □-ム混合 □-ム微量
- ⑥層 黒褐色土 暗褐色土 □-ム微量
- ⑦層 黒褐色土 □-ム 暗褐色土少量含
- ⑧層 暗褐色土 □-ム微量含
- ⑨層 暗褐色土 黒褐色土混合
- ⑩層 暗褐色土 暗褐色土少量 □-ム微量
- ⑪層 黒色土 暗褐色土少量 □-ム微量
- ⑫層 黒褐色土 □-ム 暗褐色土混合



I層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土と薄ったロームが軽く混合



図2-4-9 神野群集塚3号塚

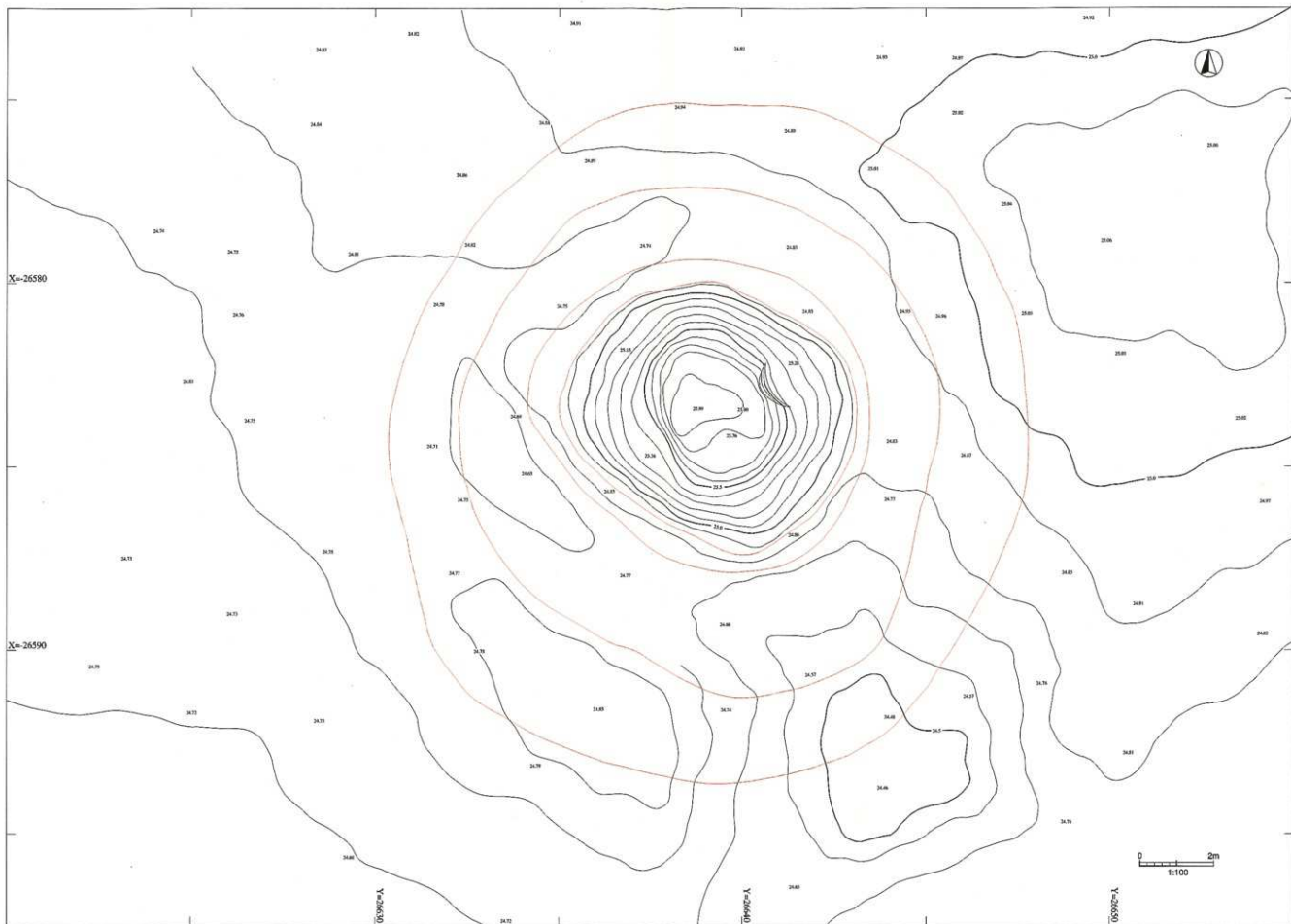


图 2-4-10 神野群集塚 4 号塚

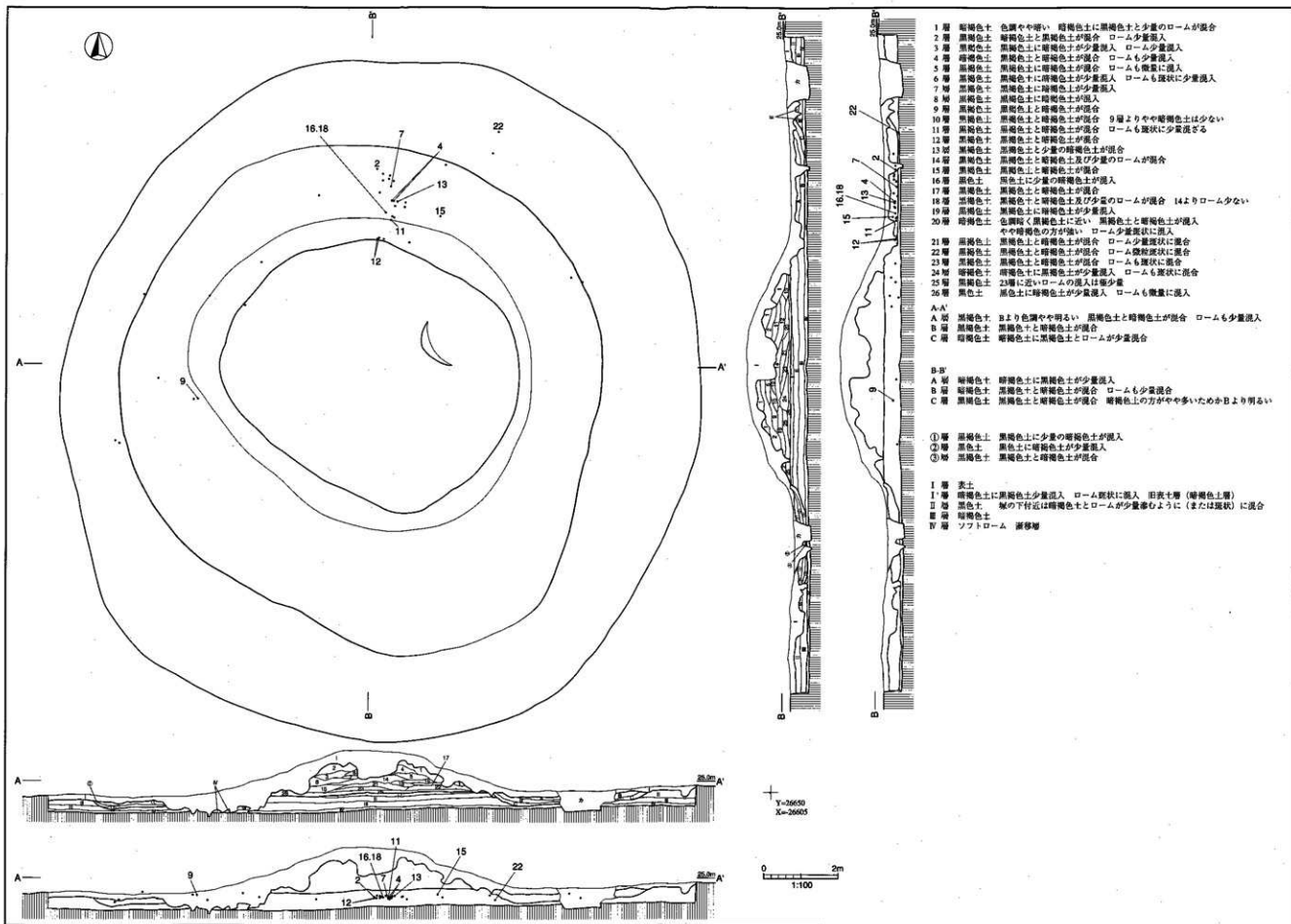


図2-4-11 神野群集塚4号塚

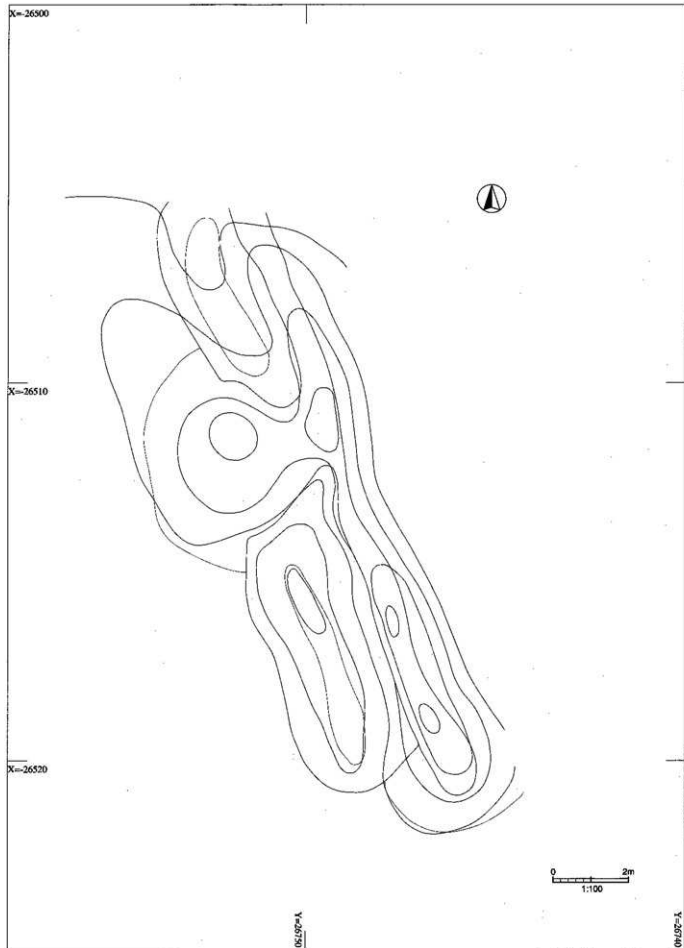
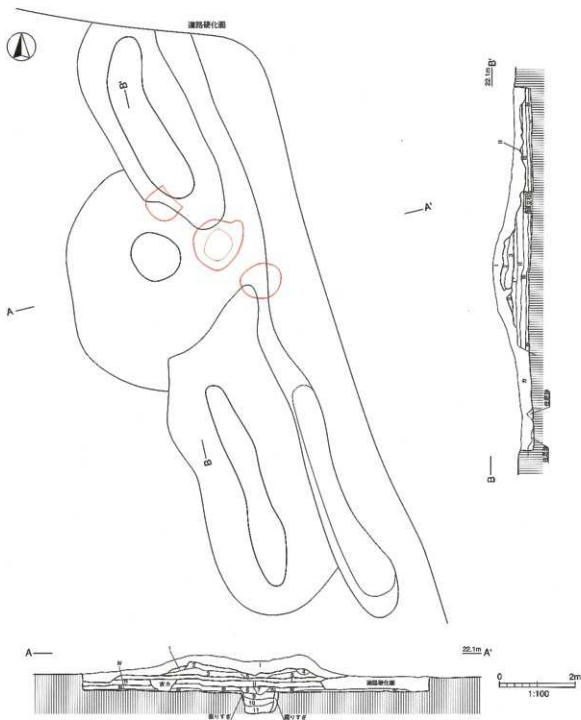


图 2-4-12 神野群集塚 5 号塚



- | | | | | |
|-----|------|------------------------------------|------|-------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | ロームが多量に混入。表土の影響を受け、表土に近い軟弱な土 | I層 | 表土 |
| 2層 | 黒褐色土 | 暗褐色土とロームを少量混入 | I'層 | 暗褐色土、黒色土を少量混入、旧表土 |
| 3層 | 黒色土 | ローム粒少含 | II層 | 黒色土 |
| 4層 | 暗褐色土 | ロームを多量に混入、表土に近い土質、埋蔵土 | III層 | 暗褐色土 |
| 5層 | 黒褐色土 | ロームを微量に混入、埋蔵土 | IV層 | ソフトローム漸移層 |
| 6層 | 黒褐色土 | ローム粒少含、5層よりやや色調暗い、埋蔵土 | | |
| 7層 | 黒色土 | ローム粒少含 | | |
| 8層 | 黒褐色土 | ロームと暗褐色土が少量混入、ローム粒少含 | | |
| 9層 | 黒褐色土 | ロームが多量に混入、直径10mm次のロームブロックも混含 | | |
| 10層 | 黒色土 | 黒褐色土を主体にロームとローム粒が少量混入 | | |
| 11層 | 黄褐色土 | ハードロームとソフトロームが混合し、突き固められた土、黒色土少量混入 | | |

図 2-4-13 神野群集塚 5号塚

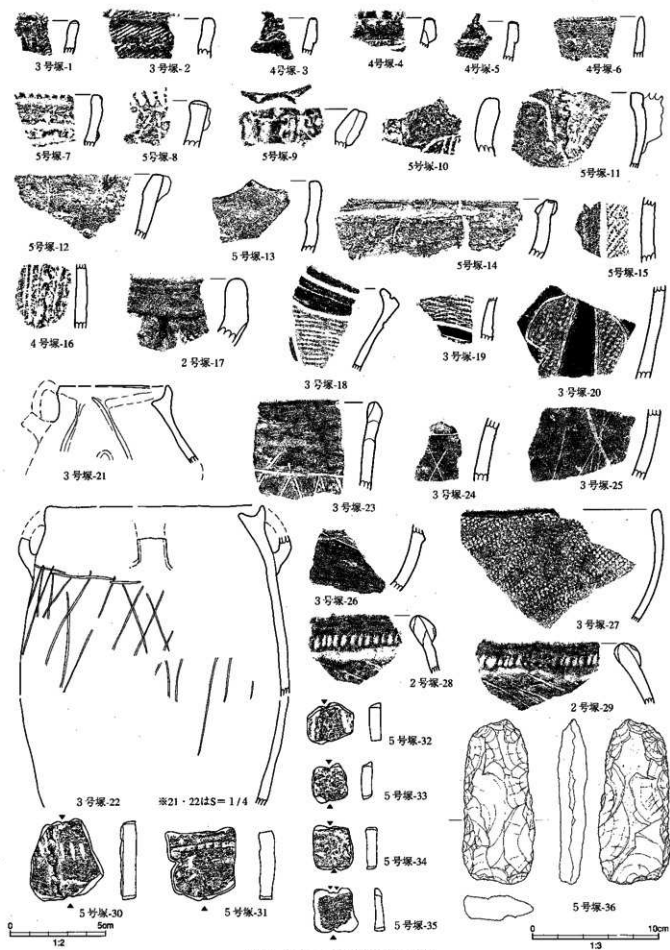


图2·4-14 神野群集塚出土遺物

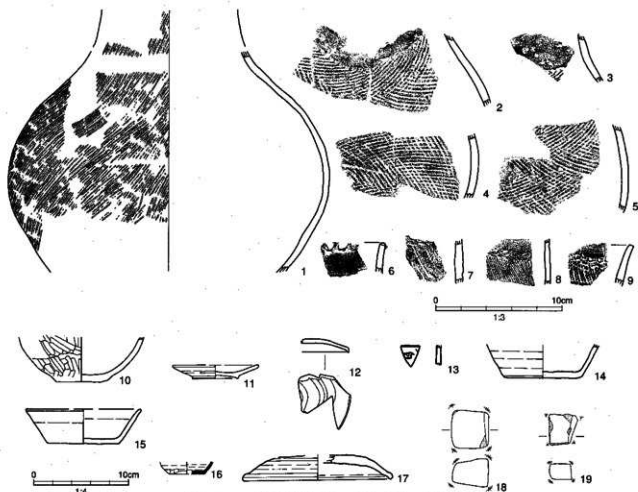


図 2-4-15 神野群集塚出土 弥生土器・土師器

5 古墳時代土師器 (図 2-4-15 10)

古墳時代土師器は3号塚から出土している。壺形土器の胴部でヘラミガキが施されている。古墳時代前期の所産と考えられる。詳細は観察表を参照されたい。

6 奈良・平安時代 (図 2-4-15 11~19)

2~4号塚を中心に出土している。18~19は砥石で2号塚出土。砥石自体での時期判定は困難であるが、同じ2号塚で奈良・平安期の遺物が出土していることから、当該期の所産と判断した。

表 2-4-2 神野群集塚3号塚遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	-×-×(278) 胴中位が膨らむ 胴部断面楕円形 外面 頸部-ナデ 頸部-胴部-附加条縄文	暗褐色 悉	粗砂粒多	頸部- 胴部	
2	弥生 壺	-×-×- 外面 頸部-無紋 胴上半-附加条縄文による羽状構成	砂粒褐色 砂波褐色 良	砂粒少	頸部片	
3	弥生 壺	-×-×- 外面 頸部-附加条縄文	淡褐色 良	砂粒少	頸部片	
4	弥生 壺	-×-×- 外面 胴上半-附加条縄文で羽状構成 内面 ヘラナズリ	褐色 良	砂粒少	胴部片	

5	弥生 壺	一×一×一 外面 胴上半-附加糸縄文で羽状構成	①褐色 ②淡褐色 良	砂粒少	胴部片	
6	弥生 甕	一×一×一 外面 口唇-棒状工具による押圧を行う 口縁-ハケ目調整	褐色 良	緻密	口縁片	
7	弥生 甕	一×一×一 外面 胴上半-S字状結節で区画 附加糸縄文	外黒褐色 内暗褐色 良	緻密	胴部片	
8	弥生 甕	一×一×一 外面 胴上半-S字状結節で区画し、以下胴部附加糸縄文 内面 ヘラミガキ	橙褐色 良	緻密	胴部片	
9	弥生 甕	一×一×一 外面 口唇~口縁-附加糸縄文 口縁下端-S字状結節2区画 内面 ヘラミガキ	橙褐色 良	緻密	口縁片	
10	古式土師 器 甕	一×(80)×一 外面 胴部-段位のヘラケズリ 底部-ヘラケズリ	褐色 良	緻密	体部~ 底部片	
11	土師器 皿	ロクロ成形 外面 胴部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り 内面 丁寧なミガキを施す	淡褐色 香	緻密	口縁~ 底部片	
12	土師器 蓋	一×一×一 ロクロ成形 外面 胴部-ヘラケズリ	褐色 香	緻密	1/4	
13	土師器 坏	一×一×一 ロクロ成形	褐色 香	緻密	体部片	墨書「自」 体部 外面 横位
14	土師器 坏	(118)×6×(35) ロクロ成形 外面 胴部下端-ヘラケズリ 底部-ヘラ切り	褐色 香	緻密	口縁~ 底部片	
15	須恵器 坏	(122)×(76)×36 ロクロ成形 外面 底部-回転ヘラ切り	褐色 香	緻密	口縁~ 底部片	
16	須恵器 坏	一×(76)×(26) ロクロ成形 外面 胴部下端-ヘラケズリ 底部-ヘラ切り	灰色 良	緻密	底部片	
17	土師器 蓋	蓋径(159) 蓋口縁部屈曲し内屈 外面 上部-回転ヘラケズリ 蓋口縁部-ナデ 内面 天井部-ナデ	橙褐色 香	砂粒	2/3	
18	石製品 砥石	上部径(27) 下部径(35) 器厚30 重量68.2g 外面 6面全てが使用面 キュービックな形状-柱状の砥石が欠損し、再生・再利用したもの		材質 疑炭岩?	完形 (再生後 完存品)	
19	石製品 砥石	上部径(24) 下部径(19) 器厚30 重量27.1g 外面 表裏及び両側面に使用面 両端を欠損しているが、もともとは柱状であったもの		材質 流紋岩	断片	

(2) 土塁・溝

土塁

遺 構 土塁は4条検出されている。調査区北側から便宜的にA～D土塁とする。A、B土塁はほぼ並行して伸び、調査範囲外にまで広がっている。C、D土塁は調査区内を巡り、台地先端部とその奥に広がる平坦部を区画するように延びている。特にD土塁は浅い谷津を取り囲むように展開している。調査された土塁は何れも両脇に溝を伴い、溝と溝の間が7m前後の幅を持つ。土塁の高さは、現況で0.5m前後の規模となり、溝の底部からの計測で1m前後である。土塁は両脇の溝を掘って出た土を使用し、水平に積み上げているものと思われる。多少崩れたことはあるものの、本来的には、さほど高い土塁では無かったと考えられる。また、両脇の溝であるが、何れも断面が船底形の溝で、片方が深く、片方が浅い溝とがセットとなっている。恐らくは、深い溝が土塁の外側に位置するのではないかとと思われる。

溝覆土については何れも自然堆積による埋没が考えられる。

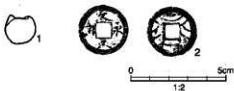
遺 物 トレンチ調査で、土塁の盛り土、及び溝覆土中に縄文土器、土師器等が少量出土している。土塁、溝に伴うであろう遺物としては、Lトレンチ溝覆土出土の鉄砲玉と文久銭である。

所 見 時期、用途については、規模等から野馬土手とは考えられず、近世に作られた猪垣(シシガキ)と考えられる。また、猪垣とともに、害獣駆除の際に鉄砲を使用し、使用された鉄弾がLトレンチから出土したと考えられる。そのように考えることでLトレンチ出土の鉄砲玉出土の意味合いが鮮明となる。さらには、同トレンチで、文久銭が出土していることから、江戸後期～幕末期に機能していた猪垣(シシガキ)と考えられる。向境遺跡、境堀遺跡で検出された溝の多くも本来は土塁を伴っていたものと考えられる。



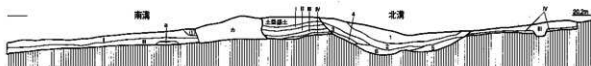
- I 表土層
 I' 旧表土層 暗褐色土を主体とし、黒色土が少量混じった土。しまり強い、粘性強い。
 II 黒色土層
 III 暗褐色土層
 IV ローム層等

- 1層 黒褐色土 黒褐色土主体、ロームが多量に混じる。
 2層 黒褐色土 黒褐色土主体、ロームが少量混じる。
 3層 黒色土 黒色土主体、ロームが少量混じる。
 4層 黒褐色土 黒褐色土主体、ロームと暗褐色土が少量混じる。
 5層 黒褐色土 黒褐色土主体、ローム粒を少量含む、鉄砲など。
 6層 黒褐色土 黒褐色土主体、ローム・ロームを少量含む。
 7層 暗褐色土 暗褐色土主体、ロームと黒色土が少量混じる。



土塁Lトレンチ出土遺物

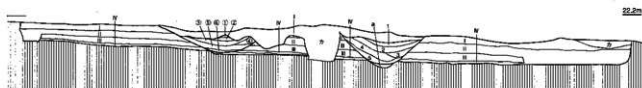
図2-4-16 土塁Lトレンチ



- 北溝**
- 1層 褐色土 褐色土主体の土で土層側からの流れである。しまりは強い。
- 2層 褐色土 褐色土と暗褐色土少量が混ざり合っている土。主に土層側からの流れ込みである。しまりは強い。
- 3層 暗褐色土 暗褐色土が主体となる土。土層側からの流れ込みである。しまりは強い。
- 4層 暗褐色土 暗褐色土とロームが混ざり合った土。土層側からの流れ込みである。しまりは強い。
- 5層 暗褐色土 褐色土と暗褐色土が混ざり合った土。土層反対側からの流れ込みである。緻密な層である。しまりは特に強い。
- 6層 暗褐色土 暗褐色土が主体となる土。土層側からの流れ込みである。緻密な層。しまりは特に強い。
- 南溝**
- ①層 褐色土 褐色土が主体となる土。しまりなし。
- a層 暗褐色土 住居柱覆土と見られる。ロームブロックである。
- 土研盛り上 褐色土主体である。

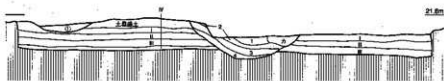


- D土型**
- 1層 褐色土 褐色土主体の土。しまりは弱い。
- 2層 褐色土 褐色土と少量の暗褐色土が混ざり合った土。主に土層側から流れ込む。しまりは強い。
- 3層 暗褐色土 暗褐色土主体の土。土層側から流れ込む。緻密な層である。しまりは強い。
- 3層上面にて火が焚かれたよう所で焼土が混じっている。焼土は小粒程度でブロック等は見られない。
- 4層 暗褐色土 暗褐色土主体の土。土層側から流れ込む。緻密な層である。しまりは強い。
- 5層 暗褐色土 暗褐色土主体の土。しまりは強い。
- ①層 褐色土 褐色土主体の土。しまりはやや強い。
- ②層 褐色土 褐色土主体の土。しまりは強い。
- ③層 暗褐色土 暗褐色土主体の上。しまりは強い。
- 土研盛り上 褐色土主体の土。しまりは弱い。



- D土型**
- 1層 暗褐色土 暗褐色土主体の上。しまりは強い。
- 2層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土が混ざり合った土。主に土層側から埋まっている。しまりは強い。
- 3層 暗褐色土 暗褐色土層と褐色土が混ざり合った土。土層反対側から埋まっている。しまりは強い。
- 4層 暗褐色土 暗褐色土とロームが混ざり合った土。土層側から埋まっている。しまりはやや強い。ややボンボン土。
- 5層 暗褐色土 暗褐色土と少量のロームが混ざり合った土。土層側から埋まっている。しまりは強く、緻密な層である。
- ①層 褐色土 褐色土が主体となる土。しまりは強い。
- ②層 暗褐色土 暗褐色土が主体となる土。しまりは強い。主に土層側から埋まっている。
- ③層 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土が混ざり合った土。しまりは強い。主に土層側から埋まっている。
- ④層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土が混ざり合った土。土層側から埋まっている。しまりは弱く、ややボンボン土。
- ⑤層 暗褐色土 色調がかなり暗い。暗褐色土が主体となる土。土層反対側から埋まっている。しまりは強く、緻密な層である。
- ⑥層 暗褐色土 暗褐色土とローム層が混ざり合った土。しまりは強い。
- a層 暗褐色土 暗褐色土主体の土。裸覆土ではなく、小ピット覆土である。土研盛り上は脱瓦の為確認できなかった。

図2-4-17 十屋A・B・Cトレンチ

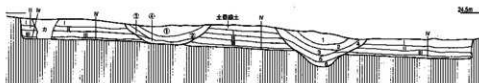


C土塁

Dトレンチ

- 1層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混じり合った土。しまり強い。
 2層 暗褐色土 暗褐色土と少量の黒色土がほぼ均一に混じり合った土。土塁側から埋まっている。しまり強く、緻密な層である。
 3層 暗褐色土 黒色土と少量の暗褐色土がほぼ均一に混じり合った土。土塁側から埋まっている。しまり強く、緻密な層である。
 4層 黒色土 黒色土主体の土。土塁側から埋まっている。しまり強く、緻密な層である。

①層 褐色土 褐色土主体の土である。ややボソボソな感じである。土塁盛り土 黒色土主体でややボソボソとしている。



B土塁

Eトレンチ

- 1層 褐色土 褐色土主体の上。しまりやや弱い。
 2層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土の混合土。主に土塁側から埋まっている。しまり強い。
 3層 暗褐色土 暗褐色土中に褐色土が斑状に混ざっている。土塁側から埋まっている。しまり強い。
 4層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土の混合土。土塁反対側から埋まっている。しまりやや強い。
 5層 暗褐色土 暗褐色土と薄ったロームの混合土。土塁側から埋まっている。しまり強く、粒子粗い。
 6層 褐色土 褐色土とローム少量が均一に混合土。しまり強い。

- ①層 褐色土 褐色土主体。しまりなし。
 ②層 褐色土 褐色土主体で少量暗褐色土が混入。しまりやや弱い。主に土塁側から埋まっている。
 ③層 褐色土 褐色土主体。しまりやや弱い。
 ④層 暗褐色土 暗褐色土主体の土である。しまりは強い。

土塁盛り土 暗褐色土主体の土である。しまりはやや強く。



B土塁

Fトレンチ

- 1層 褐色土 褐色土主体。しまりやや弱い。土塁側から埋まっている。
 2層 褐色土 褐色土と薄ったロームの混合土。土塁側から埋まっている。しまり強く、粒子粗い。
 3層 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土の混合土。土塁側から埋まっている。しまりは強い。
 4層 暗褐色土 暗褐色土主体。土塁反対側から埋まっている。しまり強く、緻密な層である。
 5層 褐色土 褐色土と薄ったロームの混合土。土塁側から埋まっている。しまり強く、緻密な層である。
 6層 暗褐色土 暗褐色土中にローム小粒が多く混ざっている土。土塁反対側から埋まっている。しまり強く、緻密な層である。

- ①層 褐色土 褐色土主体。しまりなし。
 ②層 褐色土 褐色土主体。しまり強い。
 ③層 暗褐色土 暗褐色土主体。しまり強い。

土塁盛り土 暗褐色土主体であるが、部分的にロームも多く混じっている。しまり強い。



図2-4-18 七塁D・E・Fトレンチ



- 1層 暗褐色土 暗褐色土主体。主に土器側から埋まっている。しまり強い。
- 2層 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土の混合土。主に土器側から埋まっている。しまり強く絞れ強い。
- 3層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土の混合土。土器反対側から埋まっている。しまり強い。
- 4層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土の混合土。しまり強い。土器側から埋まっている。
- 5層 暗褐色土 暗褐色土主体。土器反対側から埋まっている。しまり強い。
- 6層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土がほぼ均等に混ざり合った土。土器側から埋まっている。しまり強い。
- 7層 暗褐色土 暗褐色土と少量の混ったロームがほぼ均等に混ざり合った土。土器側から埋まっている。しまり強く、緻密な土である。

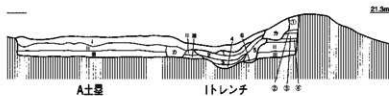
- ①層 暗褐色土 暗褐色土と褐色土が混ざり合った土。主に土器側から埋まっている。しまりは強い。
- ②層 褐色土 褐色土が主体となる土。土器反対側から埋まっている。しまりは強い。
- ③層 褐色土 褐色土と暗褐色土が均等に混ざり合った土。土器側から埋まっている。しまり強い。
- ④層 暗褐色土 暗褐色土と少量の褐色土が混ざり合った土。土器側から埋まっている。しまり強い。

土器盛り土 暗褐色土主体の土。しまりは強く。



- 1層 暗褐色土 暗褐色土に少量の暗褐色土の混合土。表土の影響のためか、崩れやすい。
- 2層 黒褐色土 黒褐色土にロームと暗褐色土が少量混ざった土。しまり強い。粘性少し強い。
- 3層 黒褐色土 黒褐色土と暗褐色土が混ざり合った土。しまり少し強い。粘性強い。
- 4層 暗褐色土 暗褐色土にロームと黒褐色土が少量混ざった土。しまり少し強い。粘性少し強い。
- 5層 暗褐色土 黒褐色土と暗褐色土が混ざり合った土。しまり普通。粘性普通。
- 6層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、極少量のロームが混ざる。しまり少し強い。粘性少し強い。
- 7層 黒褐色土 黒褐色土にロームと暗褐色土が少量混ざった土。約10mm大のロームブロックが見られる。しまり強い。粘性強い。緻密。

- ①層 暗褐色土 黒褐色土と暗褐色土、ロームが混ざり合った土。盛り土が表土化したもの。しまりなし。
- ②層 黒褐色土 黒褐色土と暗褐色土が混ざり合った土。ロームも少量混ざる。しまり少し強い。粘性少し強い。
- ③層 黒褐色土 黒褐色土と暗褐色土が混ざり合った土。ロームも少混ざる。しまり少し強い。粘性少し強い。旧表土と思われる。



- 1層 黒褐色土 黒褐色土に暗褐色土が少量混ざった土。しまり普通。粘性少し強い。上部は表土の影響で少し崩れやすい所がある。
- 2層 黒褐色土 黒褐色土に暗褐色土が少量混ざった土。しまり少し強い。粘性少し強い。
- 3層 暗褐色土 暗褐色土に黒褐色土が少量混ざった土。しまり普通。粘性少し強い。
- 4層 暗褐色土 黒褐色土に暗褐色土とロームが少量混ざった土。しまり強い。粘性強い。
- 5層 黒褐色土 黒褐色土にロームと暗褐色土が少量混ざった土。しまり普通。粘性普通。盛り土が急に崩れたという感じ。
- 6層 暗褐色土 暗褐色土にロームが少量混ざった土。しまり普通。粘性少し強い。

- ①層 暗褐色土 黒褐色土と暗褐色土、ロームが混ざり合った土。盛り土が表土化した物である。しまりなし。
- ②層 黒褐色土 黒褐色土と暗褐色土が混ざり合った土。下部と比べてやや色黒が明るい。しまり普通。粘性少し強い。
- ③層 黒褐色土 黒褐色土と暗褐色土が混ざり合った土。上部と比べて暗褐色土がやや少ない。ローム少量含有。しまり強い。粘性少し強い。
- ④層 暗褐色土 暗褐色土に黒褐色土が少量混ざった土。旧表土である。ローム粒数含有。しまり強い。粘性強い。

図2-4-19 土型G・H・Iトレンチ



- 1層 表土層
 I層 旧表土層 暗褐色土を主体とした黒色土が少量混じった砂。しまり少し強い。粘性少し強い。
 II層 黒色土層
 III層 暗褐色土層
 IV層 ローム漸移層

- 1層 暗褐色土 暗褐色土主体。ロームが少量混じる。しまり少し強い。粘性少し強い。
 2層 黒褐色土 黒褐色土主体。ロームが微量に混じる。しまり少し強い。粘性少し強い。
 3層 黒褐色土 黒褐色土主体。ロームが微量に含む。しまり普通。粘性強い。
 4層 暗褐色土 暗褐色土主体。I層よりやや明るい。ロームが少量混じる。しまり少し強い。粘性強い。
 5層 暗褐色土 暗褐色土主体。ロームが少量混じる。ローム粒を微量に含む。しまり少し強い。粘性強い。
 6層 黒褐色土 黒褐色土主体。ロームが少量混じる。しまり少し強い。粘性強い。



- 1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とした土。ロームが多量に混ざっている。表土に近い軟弱な土。しまり弱い。粘性弱い。
 2層 黒褐色土 黒褐色土を主体とした土。ロームが少量混ざっている。しまり少し強い。粘性少し強い。
 3層 黒褐色土 黒褐色土を主体とした土。ロームが少量混ざっている。ローム粒も少量含む。しまり普通。粘性普通。
 4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とした土。暗褐色土が少し混ざっている。ローム粒を少量含む。しまり少し強い。粘性普通。
 5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とした土。ロームが微量混ざる。しまり少し強い。粘性強い。

- I層 表土層
 I層 旧表土層 黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、黒色土が少量混ざった土。しまり少し強い。粘性少し強い。
 II層 黒色土層
 III層 暗褐色土層
 IV層 ローム漸移層

図2-4-20 土壘J・Kトレンチ

出土遺物

1 縄文式土器

1・2は早期後半。1は頸部片で、表裏に貝殻条痕を施し、くびれの段に押捺を施す。2は表裏に貝殻条痕を施した胴部片。1が鶴ヶ島台式、2は野島～鶴ヶ島台式に比定されよう。

3・4は前期前半。3は口縁片、4は胴部片で、2段LRを地文に爪形文を施す。ともに黒浜式。

5・6は中期前半。5は口辺の資料。隆線を貼付して楕円形区画を描き、隆線に沿って単列の角押文を施文する。原体は竹管1種を用い、胎土は非雲母混入型。阿玉台1a式に比定される。6は勝坂系土器で、遺構外出土遺物の図2A M4とは同一個体。編集の都合上、本例は拓本ヴァージョンである。

7～11は中期末葉。7は微隆起線に近い断面が三角状の隆線を貼付するもので、隆線の両脇にごく浅いナヅリを加える。地文は2段RL。8～11は地文のみの胴部片。8は2段LR、9は2段LRの細縄文、10・11は1段L。これらはいずれも加曾利E3ないしはE4式に比定される。

12は後期初頭。鉤状文を描き、列点を充填する。称名寺式(新)段階に相当する。

13～17は後期前半。13は2段LRを地文に沈線で意匠を描く。14は2段LRを地文に沈線で意匠を描き、磨り消す。これらは堀之内1式の精製土器。15は小波状の口縁で、地文は2段LR。16・17は地文に1段Lを施文した胴部片。これらは堀之内1式の粗製土器。

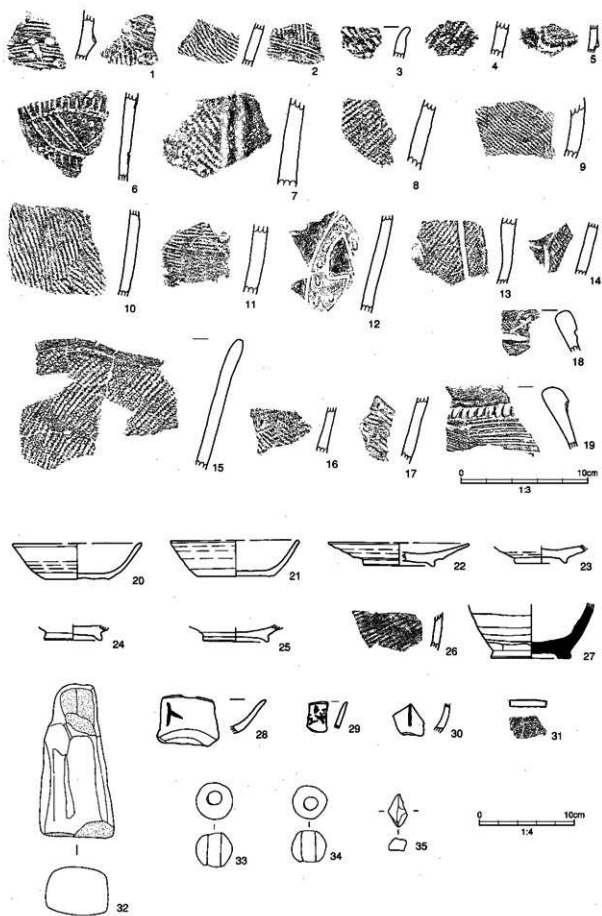


图 2-4-21 向城遗址上出土文物

表 2-4-3 向境遺跡土器遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	粘土	遺存	備考
20	土師器 坏	(136) × 69 × 38 ロクロ成形 胴部下端へラケズリ 底部全体一回転糸切り	褐色 青	緻密	1/4	
21	土師器 坏	(136) × 80 × 38 ロクロ成形 胴部下端へラケズリ 底部中央一回転糸切り 底縁へラケズリ	褐色 青	雲母少量 含む	1/4	
22	土師器 高台付皿	(148) × (76) × (24) ロクロ成形 内面 ミガキ	外暗褐色 内黒色 青	緻密	底部片	
23	土師器 高台付皿	— × 55 × — ロクロ成形 底部中央一回転糸切り 内面 ミガキ	褐色 青	緻密	底部片	
24	土師器 高台付皿	— × (60) × — ロクロ成形 外面 胴部下端へラケズリ 底部中央一回転糸切り 底縁へラケズリ 内面 ミガキ	外褐色 内黒褐色 青	緻密	底部片	内黒か?
25	土師器 高台付皿	— × (69) × — ロクロ成形 胴部下端へラケズリ 底部中央一回転糸切り 底縁へラケズリ	褐色 青	緻密	底部片	
26	須恵器 壺	— × — × — ロクロ成形 外面 タタキ	暗黒褐色 良	緻密	胴部片	
27	須恵器 壺	— × (84) × — ロクロ成形 胴部下端へラケズリ 底部へラケズリ	灰色 良	緻密		
28	土師器 坏	— × — × — ロクロ成形 外面 胴部下端へラケズリ 底部底縁へラケズリ	褐色 青	緻密	口縁片	墨書「人」 体部外面
29	土師器 坏	— × — × — ロクロ成形	褐色 青	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
30	土師器 坏	— × — × — ロクロ成形	淡褐色 青	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面
31	須恵器 瓶	— × — × — ロクロ成形	暗褐色 良	緻密	底部片	墨書「□」 底部外面
32	石製品 砥石	— × (45) × 123 重量430g 長辺方向に滑って細かな溝状あり。 本来縄文時代スタンプ形石器の転用か?				
33	土製品 土玉	上部径24 下部径25 器高26 最大径28 重量18.2g 孔径10				
34	土製品 土玉	上部径20 下部径18 器高25 最大径27 重量14g 孔径10				
35	石製品 火打ち 石?	— × — × 27 最大径14 重量3.8g				

溝

境堀1-055、056、057、058

検出地区 D6-78G他。台地先端の斜面部に位置する。

遺構 各溝とも幅1～1.5m程度の断面船底形の溝である。2本の溝が平行して伸び、2本の溝の外側から外側の距離が6.5m程度である。溝覆土は自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 縄文土器～歴史時代土師器・須恵器までそれぞれ少量出土しているが、溝に伴うであろう遺物は出土しなかった。

所見 近世の猪垣に伴う溝で、本来、A土壘を伴っていたものと考えられる。

向境2-042、043

検出地区 F4-71G他。台地先端の斜面部に位置する。

遺構 各溝とも幅1～2m程度の断面船底形の溝である。2本の溝が平行して伸び、2本の溝の外側から外側の距離が5m程度である。溝覆土は自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 縄文土器、石器、弥生土器～歴史時代土師器・須恵器までそれぞれ少量出土しているが、溝に伴うであろう遺物は出土しなかった。

所見 近世の猪垣に伴う溝で本来土壘を伴っていたものと考えられる。

向境2-045

検出地区 F4-52G他。台地先端の斜面部に位置する。周辺の遺構として向境2-042、2-043がある。

遺構 幅1～2m程度の断面船底形の溝である。溝の大部分は調査区外に伸びているため詳細は不明。溝覆土は自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 近世以降の溝と思われるが、土壘を伴っていたかは不明である。

境堀6-014

検出地区 C4-83G他。台地平坦部に位置する。6-013と重複関係にあり、本溝の方が古い。

遺構 幅1m前後、深さ0.1m前後の溝で底部は平坦である。溝覆土は自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 縄文土器～歴史時代土師器・須恵器小片をそれぞれ少量出土しているが、溝に伴うであろう遺物は出土しなかった。

所見 近世以降の溝と思われるが、土壘を伴っていたかは不明である。

境堀6-013

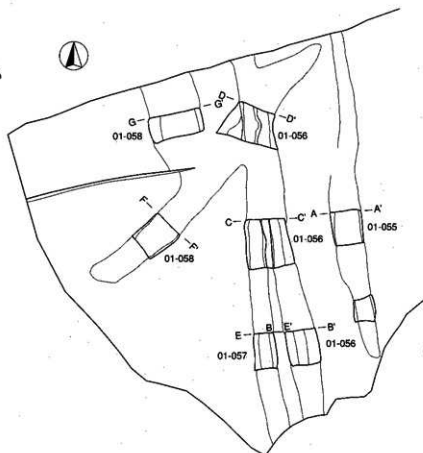
検出地区 C5-83G他。台地平坦部に位置する。6-014と重複関係にあり、本溝の方が新しい。

遺構 幅1.5m前後、深さ0.5m前後のV字溝である。溝覆土は自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 弥生時代後期の土器片を中心に少量出土しているが、溝に伴うであろう遺物は出土しなかった。

所見 近世以降の溝と思われるが、土壘を伴っていたかは不明である。他に検出された溝とは、形態に差があり、シシガキ等の溝とは性格を異にしているようである。

Y=26855
X=26570



0 1m
1:200

Y=26885
X=26590

A — 19.2m A'



- 1層 褐色土 ローム少含
- 2層 褐色土 ほぼ均一の層
- 3層 褐色土 ロームブロック多含
- 4層 褐色土 ローム少含

B — 19.2m B'



- 1層 褐色土 ロームブロック多量含
- 2層 暗褐色土 黒褐色土多含 褐色土少含
- 3層 暗褐色土 黒褐色土多含 褐色土少含
- 4層 暗褐色土 黒褐色土多含
- 5層 褐色土 ロームブロック少含
- 6層 褐色土 ローム 黒褐色土少含
- 7層 褐色土 ローム多含
- 8層 暗褐色土 褐色土少含

C — 19.2m C'



- 1層 褐色土
- 2層 褐色土 ロームブロック少量含
- 3層 暗褐色土 黒褐色土少含
- 4層 暗褐色土 黒褐色土多含
- 5層 暗褐色土
- 6層 暗褐色土 ローム少量含
- 7層 褐色土 ロームブロック
- 8層 明褐色土

D — 19.2m D'



- 1層 褐色土
- 2層 褐色土 暗褐色土多含
ロームブロック少含
- 3層 褐色土 暗褐色土多含
- 4層 暗褐色土 黒褐色土少含

E — 19.2m E'



- 1層 褐色土 ローム多含

F — 19.2m F'



- 1層 黒褐色土
- 2層 暗褐色土 褐色土をしみ状に含む
- 3層 暗褐色土 褐色土多含 黒褐色土少含
- 4層 暗褐色土 褐色土多含
- 5層 暗褐色土 ローム主体
- 6層 明褐色土

G — 19.2m G'



- 1層 黒褐色土
- 2層 暗褐色土 褐色土少含

0 2m
1:100

図 2-4-22 1-055.056.057.058

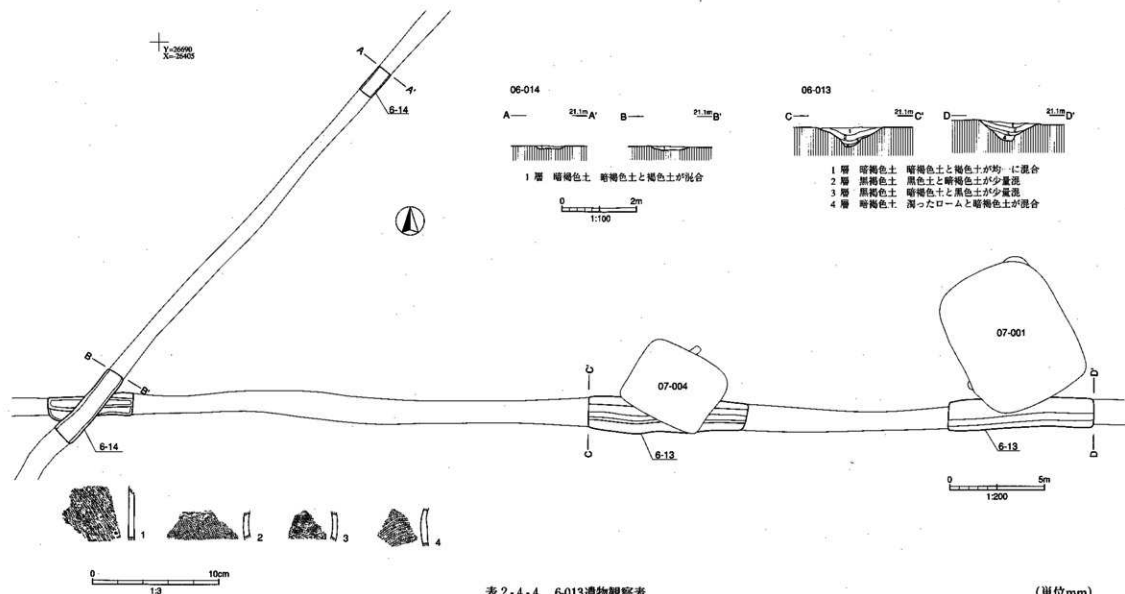


表 2-4-4 6-013遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺 外面 附加条縄文 内面 器面剥離の為詳細は不明	-X-X-	暗褐色	石灰・長石・砂粒比較的多	断片	
2	弥生 壺 外面 S字状結節文で区画し、以下胴部RL縄文 内面 縦位のヘラケズリ	-X-X-	◎黒褐色 ◎暗褐色	緻密	断片	
3	弥生 壺 外面 ミガキ後下端にS字状結節文 内面 ミガキ	-X-X-	◎黒褐色 ◎暗褐色	緻密	断片	
4	弥生 壺 外面 附加条縄文 内面 ミガキ	-X-X-	◎黒褐色 ◎暗褐色	緻密	断片	

図 2-4-23 境塚遺跡6-013.014

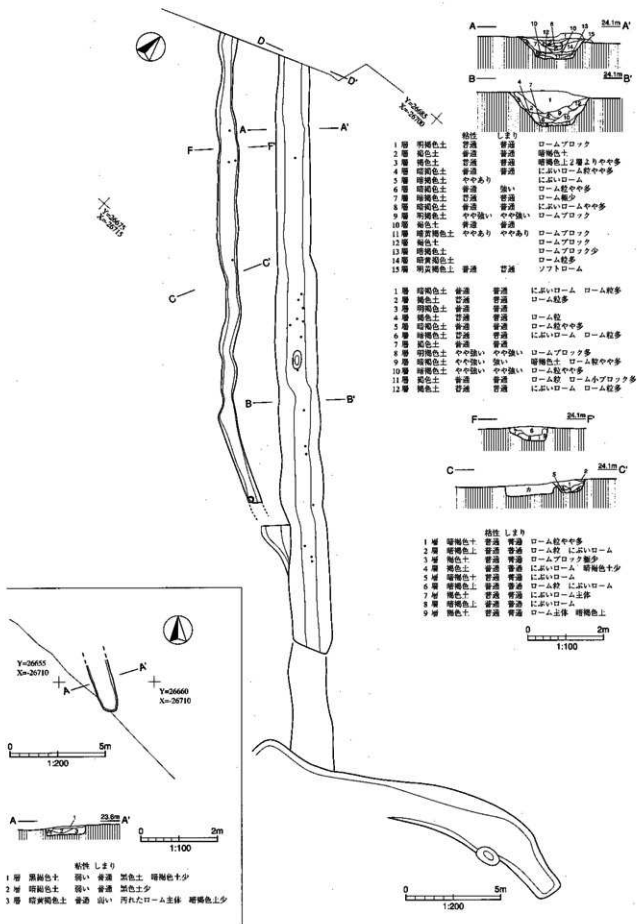


図 2-4-24 向境遺跡2-043.044.045

(3) 土坑・その他の遺構

調査区出土の中世遺物 (図2-4-27)

今回の調査で、古銭8枚が出土した。出土状況から見て、土坑状の遺構に埋置された可能性が高いが、墓とは判断しかねるものがある。松戸市立て出し遺跡で、土坑中より8枚の古銭が出土して(註1)おり、今後は8枚出土という事例も考慮する必要がある。本遺跡の古銭は全て北宋銭であった。

註

- 1) 峰村 篤 2001 「2、立て出し遺跡第2地点」 【平成11年度松戸市内遺跡発掘調査報告書】
松戸市教育委員会

調査区出土の近世遺物

今回の調査で、ごく少量ではあるが、近世の遺物が出土している。諸般の事情もあって、以下に簡単に記すことにしたい。陶器は瀬戸・美濃系を中心に常滑系などで、機種としては灯明皿・碗・壺・甕・小甕(柿釉を施釉)などがある。この他、江戸在地系土器・土師質土器(被熱痕跡あり)が出土している。石製品としては砥石があり、銭貨として寛永通宝がある。

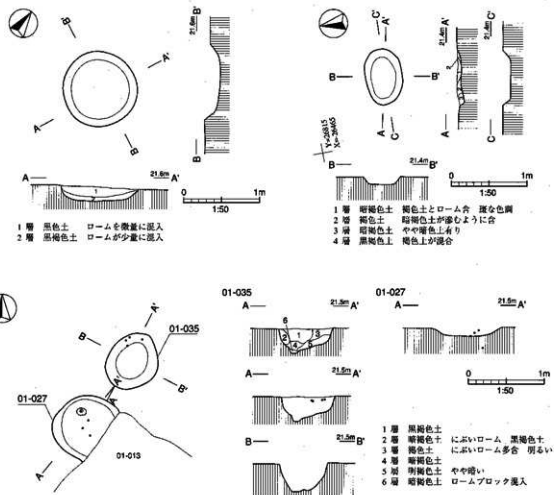


図 2-4-25 8-001・9-008・01-027.035

表 2-4-5 時期不明土坑一覽表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
8-011	D5-03	円形 1×0.98×0.16 N-35°-W しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	色調を基本に2層に分層。自然堆積による層設が想定される。 出土遺物無し。	
9-008	C6-27	楕円形 0.74×0.54×0.08 N-93°-E 浅いくぼみ状の土坑。坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	色調を基本に4層に分層。人為的な埋め戻しが想定される。 覆土中に小破片が1点出土。	
1-035	D7-16	楕円形 0.8×0.65×0.32 N-36°-E しっかりとした掘り込みを持ち、坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	色調を基本に6層に分層。人為的な埋め戻しが想定される。 覆土上層に小破片が少量出土。	
1-027	D7-75	不整形 -×-0.09 浅いくぼみ状の土坑。坑底はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。	覆土中から小破片が少量出土。	1-013と重複

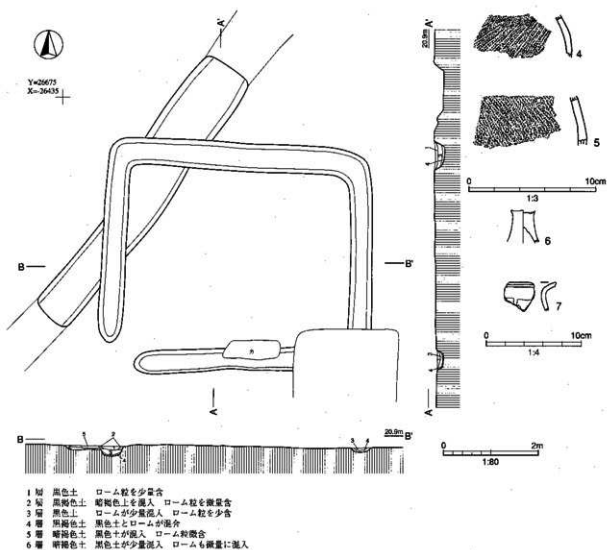


図 2-4-26 6-007

表 2-4-6 6-007遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
4	弥生 甕	-X-X-X- 外面 胴上半-附加条縄文	◎橙褐色 ◎淡褐色	石英少 長石少	胴部片	
5	弥生 甕	-X-X-X- 外面 胴上半-附加条縄文	◎黒褐色 ◎淡褐色		胴部片	
6	土師器 高坏	-X-X-X- 瓶位のヘラミガキ	◎橙褐色 ◎淡褐色		胴部片	
7	土師器 甕	-X-X-X- 外面 胴上半-瓶位のヘラケズリ			口縁~ 胴上半	

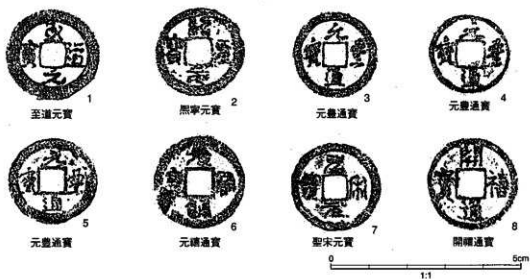


圖 2-4-27 出土錢貨

表 2-4-7 出土錢貨遺物觀察表

(單位:mm)

種別 器形	法量 口徑×底徑×器高 成形・調整等の特徴	色調 成	胎土	遺存	備考
1 古錢 北宋錢	25.0×—×1.2 重量3.7g 至道元寶 草書 北宋995年初鑄				
2 古錢 北宋錢	24.0×—×1.0 重量2.8g 熙寧元寶 篆書 北宋1068年初鑄				
3 古錢 北宋錢	24.0×—×1.3 重量3.9g 元豐通寶 行書 北宋1078年初鑄				
4 古錢 北宋錢	23.5×—×1.5 重量4.0g 元豐通寶 行書 北宋1078年初鑄				
5 古錢 北宋錢	21.5×—×1.2 重量2.9g 元豐通寶 行書 北宋1078年初鑄				
6 古錢 北宋錢	25.0×—×1.2 重量4.2g 元禧通寶 行書 北宋1078年初鑄				
7 古錢 北宋錢	24.0×—×0.9 重量2.8g 聖宋元寶 篆書 北宋1101年初鑄				
8 古錢 北宋錢	25.0×—×1.5 重量4.3g 開禧通寶 草書 北宋 年初鑄				

第3章 考察

境堀遺跡の整理を終え、以下、時代を追って成果と課題を中心に、全体のまとめとして若干の考察を行いたい。尚、一部は、周辺の向境遺跡・栗谷遺跡等の成果を含めての考察となる。

第1節 縄文時代

第1項 早期

1) 燃糸文後半期の土器について—C字刺突文と稲荷台式、花輪台式—

境堀遺跡燃糸文期の土器様相は、稲荷台式土器を中心に花輪台式土器が出土している。稲荷台式は新段階の、花輪台式は縄文施文（所謂Jタイプ）のものが中心と考えられる。同時に出土している無文土器も同様の時期と思われる。時期的に稲荷台新段階～花輪台式の比較的古い様相を示す段階として捉えることが出来よう。そうした様相下で、境堀遺跡ではC字刺突文の土器が出土している。以下、境堀遺跡出土のC字刺突文の土器について若干の検討をしたい。

まず、燃糸文系土器について隣接する向境遺跡（註1）との様相差を比較したい。向境遺跡出土の花輪台式土器は、花輪台式土器のビュアな状態（所謂、石神タイプ、金堀タイプ、木の根タイプ等を含まない状態）で出土し、Jタイプ、Yタイプの比率はほぼ均衡であった。また、向境遺跡では、花輪台式土器に伴い、無文・摩痕土器が出土していた。向境遺跡の無文・摩痕土器については、花輪台式土器と分布域が緩やかに異っていたため、花輪台式と無文・摩痕土器の特に摩痕土器の時期差の可能性を指摘した。一方、境堀遺跡では、稲荷台式土器と花輪台式土器が出土し、摩痕土器については出土していなかった。境堀遺跡は稲荷台～花輪台式期が中心時期となり、向境遺跡は花輪台～摩痕土器がその中心時期と考えられる。向境遺跡と境堀遺跡との燃糸文期の様相はそうした時期差として現れると考えられる。

このように考えたとき、時期的な位置づけに苦慮するのが、C字刺突文を有する燃糸文土器である。従来、石神タイプと呼ばれ、金堀タイプ、木の根タイプとともに花輪台式から沈線文土器へ移行する中で、花輪台式のバリエーションの一つと考えられてきた。C字刺突文を有する燃糸文土器を花輪台式の一時期を表す「タイプ」と考えると、境堀遺跡出土のC字刺突文を有する燃糸文土器やそれに伴う花輪台式土器は、境堀遺跡出土の稲荷台式土器との間に空白期間を設けなければならない。しかしながら、境堀遺跡でのC字刺突文を有する燃糸文土器は、稲荷台式と思われる燃糸文土器と同一の土坑から出土している（図3-1-1）。他の時期の土坑からの出土で、両者が共存する土器であるという気は勿論無いが、同一の土坑覆土内から問題となる土器が両方そろって出土する事も、また、偶然では無いと考えられる。

そこで、限られた時間の中ではあるが、C字刺突文を有する燃糸文土器の集成を行ってみた。図3-1-2に示してみた。ここで注目したいのは、C字刺突文の施文状況等ではなく、口唇の形態である。確かに花輪台式の口唇断面形態を呈している例も見受けられるが、中には稲荷台式の外側に肥厚し、口縁部下端に凹線或いは沈線を巡らしている例もあることである。このことを踏まえて考えられることは、C字刺突文を有する燃糸文土器が、石神式と呼ぶ1時期を表す型式として存在する事が困難ではないかということである。少なくとも、C字刺突文が1時期を表す文様上のメルクマールになることは困難では無いだろうか。石神式のタイプサイトとなった東寺山石神遺跡においても稲荷原式土器、花輪台式土器の両者が出土している。C字刺突文を有する燃糸文土器を花輪台式の後半、沈線文土器への連絡型式と考えるよりも、花輪台式の初頭、或いは稲荷台式の最後の段階と考えた方が、向境遺跡、境堀遺跡両遺跡の出土状況に対し、整合性のある説明を与えることが出来ると考える（註2）。

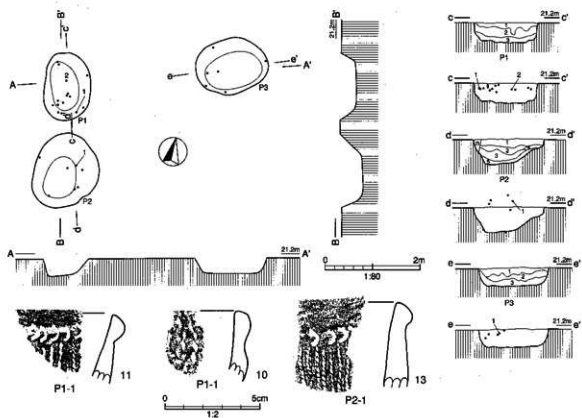
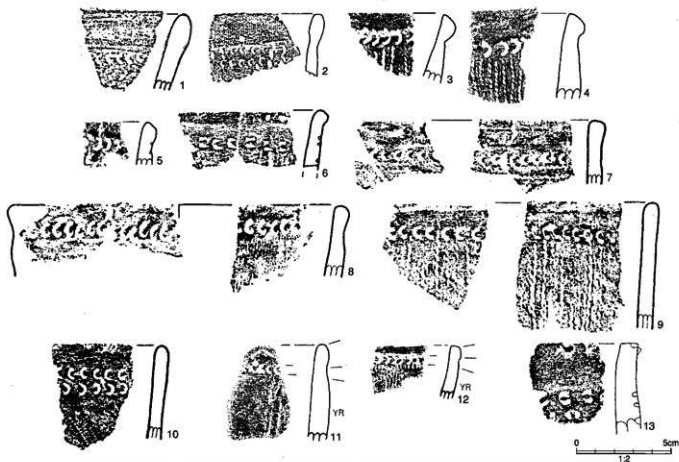


図 3-1-1



1 富里市金堀遺跡 2 長柄町美佐子遺跡 3~5 境塚遺跡 6 八千代市間見穴遺跡 7~10 成田市木の根遺跡
11,12 千葉市東寺山石神遺跡 13 東金市南外輪戸遺跡

図 3-1-2

予察ではあるが、稲荷台式の新しい段階において、口縁下に凹線を廻らし、口縁部と胴部を区画する意識が現れた時、その区画するテクニックの1つとしてC字刺突文があり、花輪台式の段階で原体の側面横圧を用いて胴部との区画をする手法が定着し、稲荷原式では、沈線を用いて区画する手法が定着したのではないだろうか。向境遺跡では、口縁部下端の区画に沈線、原体側面圧痕の双方を用いたタイプの土器が出土したが、それもこうした状況を反映し、双方の折衷する土器として生成されたと考えると、整合性が生まれる。いづれにしても類例を増やし検討していかなければならないと考えている。

今回の境堀遺跡の調査において、熱糸文系土器が多く出土した地点は、台地平坦部で、その先の台地先端部は未調査区域で幸いなことに開発から逃れている。その地点こそ稲荷台式土器と花輪台式土器の関係、更にはC字刺突文を施す土器と両者の関係等を明らかに出来る可能性を秘めている。今回、境堀遺跡で検討したことは、従来説かれたことと抵触する部分が多々あったかと思う。筆者の目的は、従来の説に異を唱えることではなく、従来の考え方に対する若干の微修正、再検討の必要性を指摘したいことにある。近年、境堀遺跡が位置する印旛沼南岸地域において熱糸文期の調査、報告例が増えてきている。従来の既製概念に捕らわれず、各調査における出土状況に即した新たな分析、再検討が必要とされてきているのではないだろうか。

註

1) 宮澤久史 2004 「向境遺跡」 八千代市遺跡調査会

熱糸文系土器についての関連諸文献については、上記文献を参照されたい。今回新たに参考としたものは下記の通りである。また、今回、熱糸文系土器の整理にあたり、小倉均、金子直行、上守秀明、篠原正、田形孝一、高橋一夫、田中啓之、原田昌幸、峰村篤、宮崎朝雄、の諸氏に関連資料の実見の便宜及び有益なご助言を賜った。記して謝意を表す次第である。また、有益なご教示に関わらず諸氏の意図を酌み取れない部分も多々あるかと思う。それらは全て浅学である筆者の責に帰する所である。

中野修秀ほか 1985 「東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡 滝・木浦 2 遺跡発掘調査報告書」
菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡調査会

原田昌幸 1988 「東金市久我台遺跡」 財団法人千葉県文化財センター

菅谷通保ほか 1997 「[サウザンドリープスゴルフクラブ建設に伴う埋蔵文化財調査] 報告書
—美佐子遺跡ほか—」 財団法人長生郡市文化財センター

大内千年 2004 「船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3—八千代市間見穴遺跡—」 財団法人
千葉県文化財センター

2) C字刺突文を有する熱糸文土器と稲荷台式、稲荷原式土器との関連については上記、美佐子遺跡の報告においても指摘されている。

2) 早期後半の評価

ここでは、主として条痕紋土器群の時間的位置づけを行いたい。

1類は子母口式土器で、「D」字状に割った工具により数条の点列状の刺突を施すもので、「日本先史土器図譜」の116大口坂の資料と近似するものである。

2類は野烏式土器であるが、本遺跡での出土例が極めて乏しい時期で、1-051出土土器及び図2-1-26-5が該当すると思われる。

3類はかなりまとまっていた。4基の炉穴から出土した土器は比較的少量で、向境遺跡を含め、鶺ヶ島台式～茅山下層式期の土器廃棄行為は、遺構外の方が専らであったと言える。上谷遺跡では、野烏式期の炉穴群うち、形のわかる土器が廃棄されていた例(かつての「飛の台パターン」)が少なからず見られた。両者は検出遺構数にも差があるとはいえ、廃棄行為そのものが異なると捉えたい。

鶺ヶ島台式土器は、型式設定以来40年が過ぎ、数多の研究があった(註1)が、1990年代以降を振り返ると、喜多裕明の8分案(喜多1992)、渡辺修一の4分案(渡辺1993)、井上 賢の2分案(井上1994・1997)、鈴木啓介の4分案(鈴木1998)などがある。また、早坂広人による埼玉県(南関東)を中心とした、条痕土器全体(鶺ヶ島台式～打越式)の様相の発表(早坂2000)もあった。現状における問題点は、早坂が発表要旨に簡潔にまとめているように、「前後型式との境界や段階の認識方法に差が認められる。」という点に集約される。本稿のスタンスとしては、渡辺修一の細分案に準拠することにした。その理由の一つは、本遺跡の資料が渡辺による千葉市地藏山遺跡と同様に、鶺ヶ島台式後半から茅山下層式期を主体とするからであって、比較検討という点での有効性である。地理的に本遺跡と指呼の間に所在する印旛村トヶ前遺跡は、ほぼ同時期の大集落ではあるが、筆者自身、喜多裕明の8分案を咀嚼しきれていないため、準拠しなかった。もちろん、トヶ前例が参考資料として最重要なのは言うまでもなく、喜多による労作の成果を否定するものではない。以下、渡辺細分案に基づき、他遺跡なども参考にしつつ、本遺跡及び一部向境遺跡の土器群を見てゆくことにする。鶺ヶ島台式と茅山下層式の区分も可能な限り行うことにした。

まず古段階であるが、本遺跡では確実に該当しそうな資料は見あたらない。図2-1-26-6は区画文の起点及び交点に半裁竹管の刺突を施し、今回の中では古手の様相を持つが、区画内の充填が押し文であることなどを見る限り、次の段階として位置づけたい。向境では図2-1-36-2～4及びI-001が該当する。これらはいずれも、円形竹管による刺突を起点に、細隆起線を描線として意匠を描き、区画内の充填は沈線を用いる。これにより、向境遺跡の土器群が粗製土器を含め、本遺跡に先行することが判明した。今回の成果の中で、重要なものの一つである。

中段階は、タイプサイトの三浦市鶺ヶ島台遺跡及び潮来市挾間貝塚の大半が該当するとされる。上記の6(3類aイ種)が該当する。粗製土器に該当するものがあるかも知れないが、精製土器から見る限りでは、向境・境廻河遺跡とも人の活動の痕跡が乏しい時期として捉えられる。

新段階は、比較的資料が豊富な時期の一つである。3類aロ種・3類b種・3類c種が該当する。このうち、3類aロ種は挾間貝塚に近いと推察されるが、佐原市大稲塚遺跡022・023・033炉穴出土資料と比較する限り、この段階にしておきたい。なお、この大稲塚例は、渡辺細分案と鈴木細分案で最も意見が分かれている資料で、鈴木は第4段階(最末期)に位置づけている。筆者は渡辺案に準拠しているだけでなく、茅山下層式へ繋がる要素の萌芽という点を見た場合、いまだに細隆起線及び沈線を文様描線として区画文を構成している点で、鶺ヶ島台式の最終末期の姿とは見なせないため、上記の位置づけにする。また、本段階の資料群は、喜多細分案ではトヶ前第3群2類a種=第2段階としたものにほぼ相当し、本報文とは見解が異なる。大稲塚例の位置づけをはじめ、本段階の資料群は各人で意見が分か

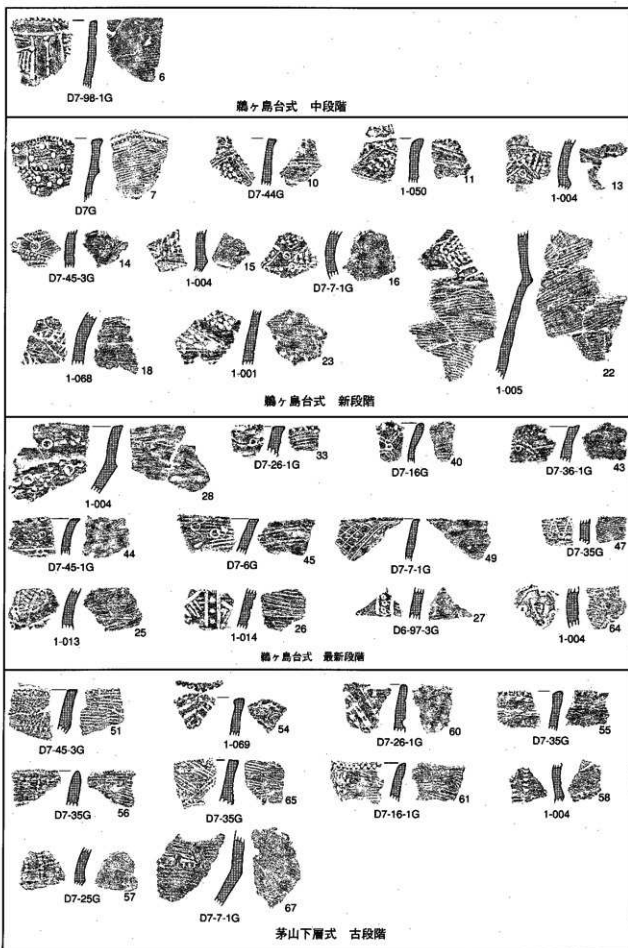


図 3-1-3 藪ヶ台式から茅山下層式の変遷図

れるという点は改めて認識しておきたい。

最新段階は、今回の資料群のなかでは主体を占めるものである。3類d種・3類e種・3類f種・3類g種・3類hイ種・(同ロ種)・(同ハ種)・3類i種・3類k種・3類q種が該当する。千葉市地蔵山遺跡S K-030~032・036出土資料を代表例とする。区画文の文様描線に細隆起線や沈線はわずかに残存するが、刺突列で区画するものが増加し、円形竹管による刺突も文様の起点・交点としての意味合いが希薄化しており、格子目文などを施する個体が増加している。本遺跡のみならず、トヶ前遺跡においても主体を占める段階と思われるが、今後一層の比較検討を加えていきたい。

鶺鴒ヶ島台式と茅山下層式との区分であるが、喜多裕明は「凹線文による施文」を基準の一つにあげている。この属性は、本遺跡にはほとんど見られないものである。本遺跡では、刺突及び押し文を文様描線として意匠を描くものや円形竹管に替わり、貝殻殻頂部の圧痕を施すものが抽出された。

渡辺細分案を咀嚼しきれていない不安は払拭できないが、本節では3類l種・3類m種・3類n種・3類o種・3類p種・3類r種・3類s種を、茅山下層式に比定することにした。上記の鶺鴒ヶ島台式最新段階の中でも、()をつけたものはこの段階に属する可能性がある。1-045土坑出土資料も本段階の所産である。そして、近隣の資料としては、我孫子市久寺家遺跡における1C類(鶺鴒ヶ島台式~茅山下層式)としたもののうち、1C b類に類似資料が多い。久寺家例でも型式を限定できなかったように、この段階の資料も各人の見解が分かれると言えそうである。新井和之による佐倉市上座貝塚の報告のうち、3類を除く大半はこの段階に属する。これは、早坂広人の細分案に従うならば、茅山下層式(古)に相当し、3類m種のうち図2-1-28-57・58及び同図61は、さいたま市(旧 浦和市)大古里遺跡70号・78号炉穴の資料に対比でき、茅山下層式(中)段階に相当する。

以上のように、本遺跡出土条痕文土器の3類の分析・検討から、八千代市内における縄文時代早期後半鶺鴒ヶ島台式土器の終末及び茅山下層式土器の成立という、二つの定点を抽出することができた。さらには、鶺鴒ヶ島台式期では、向境遺跡で先に人が住みはじめ、遅れて境堀遺跡に人が住むことになり、両者には明瞭な時間差が存在することが検証された。それらを時系列で整理すると、次のようになる。

鶺鴒ヶ島台式古段階・・・境堀遺跡1001・遺物包含層

鶺鴒ヶ島台式中段階・・・境堀遺跡遺物包含層

鶺鴒ヶ島台式新段階・・・境堀遺跡1-015・1-037・1-029 b・遺物包含層

鶺鴒ヶ島台式最新段階・・・境堀遺跡遺物包含層

茅山下層式古段階・・・境堀遺跡1-045・遺物包含層

今後は、今回の時間軸の設定がより確実なものにするために、市内外の資料を比較検討してゆきたい。

参考文献

- 赤星直忠・岡本 勇 1957 「茅山貝塚」 『横須賀市博物館研究報告』1 横須賀市博物館
岡本 勇 1961 「三浦市鶺鴒ヶ島台遺跡」 『横須賀市博物館研究報告』5 横須賀市博物館
高野博光 1976 「大古里遺跡調査報告書」 浦和市大古里遺跡調査会
新井和之 1978 「千葉県佐倉市上座貝塚出土土器群について」 『奈和』第16号 奈和同人会
関野哲夫 1980 「鶺鴒ヶ島台式土器細分への覚書」 『古代探源—滝口宏先生古希記念考古学論集—』
佐々木克典ほか 1982 「縄文時代早期の遺構と遺物」 『神谷原遺跡2』八王子市市田遺跡調査会
野口行雄 1983 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書3-N o. 14遺跡」 財団法人千葉県
文化財センター
阿部芳郎 1990 「山崎貝塚出土の土器」 『貝塚博物館紀要』第17号 千葉県立加曾利貝塚博物館

喜多裕明 1992 「2、縄が島台式土器に於ける編年試案」 『千葉県印旛郡印旛村トヶ前遺跡発掘調査報告書』 財団法人印旛郡市文化財センター

渡辺修一ほか 1993 「千葉市地蔵山遺跡(2)」 財団法人千葉県文化財センター

井上 賢ほか 1994 「城ノ台南貝塚発掘調査報告書」 千葉大学考古学研究室

井上 賢 1997 「野島式土器二細分論」 『人間・遺跡・遺物3』 発掘者談話会

鈴木啓介 1998 「縄が島台式土器の変遷」 『法政考古学』第24集 法政考古学会

早坂広人 2000 「埼玉県(南関東)における縄が島台式～打越式の様相」 『第13回縄文セミナー 早期後半の再検討』 縄文セミナーの会

第2項 前期

1) 前期前半の問題

黒浜式土器は新井和之による編年の、第1段階～第4段階が出土している。このうち、第1段階及び第3段階は比較的少量で、第4段階はやまとまりがある。隣接する向境遺跡では、第2段階と第4段階にやまとまりが見られた。本遺跡と向境遺跡は地続きなだけでなく、本来的に同一の集落であるか、少なくとも同じ集団が占有した領域であった可能性が高い。そのようにして見ると、第1段階から第4段階にかけて、向境一境堀間で比較的短期間の滞在を反復的に繰り返した集団がいたことになる。そして、滞在の季節(季節居住など)及び方法も関連すると思われるが、一定量の土器を廃棄しているながら、竪穴式の居住遺構を残すことはなかった。

参考文献

新井和之 1980 「黒浜式土器小考」 『日本考古学研究所集報』2 日本考古学研究所

第3項 中期

1) 中期初頭の土器

本遺跡では細線紋系はわずかに1点のみの出土で、「細線先施文型」である。これでは最初頭期の様相を知るには貧弱ではあるが、集合沈線文系及び八辺系は伴っていない可能性が高い。この次の段階からは八辺系が主体となり、各段階の資料が確認できる。それは、既に小林謙一によって指摘されていたことで、本遺跡でも検証された。これらに伴って縄文系粗製土器が安定して存在する。

それでは、東部遺跡群全体での中期初頭の土器群の様相を概観してみたい。予め断っておくが、包含層からも多量に出土している上谷遺跡は、第4分冊までの既報告分に限り検討の対象とする。今回の時間軸の設定及び土器群の分類は、小林謙一の編年に準拠するものであって、もしも本項の内容に誤りがある場合は、筆者の理解・認識不足に他ならない。

中期最初頭期(CM1・CM2期-八辺1期)は、上谷遺跡において小規模集落(小林のSO型集落)が営まれており、竪穴住居跡・小竪穴及び土坑墓が検出され、遺跡全体から多量の土器が出土し、その総量は他を凌駕する。土器群の組み合わせとして、細線紋系土器を中心に、集合沈線文系土器を伴うのが特徴である。同期の他遺跡を見ると、向境遺跡・境堀遺跡とも細線紋系土器のみが出土している。このうち、向境遺跡の大波状縁の2例は報文に記したとおりであり、市内におけるCM1・CM2期の好資料である。上谷遺跡では今年度報告分の資料を瞥見した限り、一つの竪穴状遺構から細線紋系土器・集合沈線文系土器に伴い、わずか1点ではあるが、アナグラ属の貝殻復縁の押捺を縦位に施した、八辺系土器が確認できた(筆者実見)。このことから、小林謙一による八日市場市八辺貝塚の報告時の分類

段別	境 堀 遺 跡			向 境 遺 跡			上 谷 遺 跡			栗 谷	八 辺 系			
	集合沈線系	細線文系	八 辺 系	集合沈線系	細線文系	八 辺 系	集合沈線系	細線文系	八 辺 系	八 辺 系				
C M I										+		八 辺 I 期		
C M II														
C S I a											+	+	八 辺 II 期	
C S I b					B群 (西関東系) 							+	+	八 辺 III 期
C S II a														八 辺 IV 期
C S II b														

図3-1-4

(以下、小林分類と記す)でいう「七群七類a種」は中期最初頭期、即ち八辺1期に比定される可能性が出てきた。貝殻文を施した土器の共伴例は、遺跡群全体でも唯一である。

上谷遺跡における細線紋系土器は、少なくとも2時期には分かれるようであり、「モチーフ先施文型(小林のCM1期)」に該当するのがA181・A184などで、「細線先施文型(小林CM2期)」に該当するのがA183などである。2点提示した集合沈線文系土器のうち、A183のものは共伴関係として捉えるならば、CM2期併行期の可能性が出てくる。

中期初頭段階(CS1a・1b・1c・2a・2b期-八辺2・3・4期)は、先述のように八辺系土器が主体となるので、同土器群の時間軸に沿って見てゆきたい。八辺2期では、境堀遺跡・向境遺跡とも比較的出土量が多く、好資料も目立つ。境堀遺跡では小林分類の「七群四類b種」を主体として、「七群四類a種」も出土している。向境遺跡も「七群四類b種」が確認できる。この類型は八辺2期の精製深鉢の主体となるものなので、両遺跡とも安定して出土していると判断して良い。この他図示しなかったが、栗谷遺跡及び上谷遺跡からも出土しており、東部遺跡群全体で人々の活動の跡が認められる。八辺3期は、境堀遺跡では1点のみと少量であったが、向境遺跡では小林分類の「七群五類」を安定して出土する他、小林謙一による「B群土器」とした、口縁部文様帯に縦位の沈線を集合させて施す、西関東の五領ヶ台式土器が注目される。この他図示しなかったが、栗谷遺跡及び上谷遺跡からも出土しており、前代同様東部遺跡群全体で人々の活動の跡が認められる。

八辺4期は、境堀遺跡での出土量が目立ち、向境遺跡でも少量見られる。いずれも小林分類の「七群六類」で、波状線の資料はやや乏しいものの、平線は好資料を含む。この時期は栗谷遺跡では1点も抽出できなかった。上谷遺跡は、筆者実見資料中(遺構出土資料中心)には認められなかったが、包含層資料の大半は未実見なので、この段階が空白であったとは断定できない。ただし、隣接する栗谷遺跡での状況を見る限り、(仮称)栗谷・上谷支台での人々の活動の跡は極めて希薄という可能性はある。

最後に境堀遺跡と向境遺跡の関係を少しく述べておきたい。先述した前期前半とほぼ同様で、両者は本来的に同一の集落であるか、少なくとも同じ集団が占有した領域であった可能性が高い。換言すれば、向境-境堀間で比較的短期間の滞在を反復的に繰り返した集団がいたことになる。土器の出土量の多寡などを考慮すると、同一段階と認定された資料でも、別集団が残したと解釈するよりも自然ではある。

参考文献

- 小林謙一 1989 「千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について」 『史学』第58巻2号
小林謙一 1995 「南関東地方の五領ヶ台式土器群」 『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
縄文セミナーの会
縄文セミナーの会 1995 『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相 -記録集-』
小林謙一 1999 「関東・中部地方 中期初頭(五領ヶ台式)」 『縄文時代』10
宮澤久史 2004 「千葉県八千代市栗谷遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡」 八千代市遺跡調査会
朝比奈竹男ほか 2004 「千葉県八千代市上谷遺跡(第4分冊)」 八千代市遺跡調査会

2) 中期前半の土器

今回は、阿玉台式に関しては資料提示のみに留めておきたい。阿玉台1a式~2式期は市内でも出土数が多い時期であるが、今回は比較検討が不十分であったことをお詫び申し上げます。

勝坂式及び勝坂式系土器は、少量ながら好資料があった。図2-1・2は、胎土・焼成・施文から見て勝坂1式(猪沢式)、それもティピカルな資料で搬入品である。同図3~9は勝坂1式に影響を受け

て製作された、勝坂系土器であるが、かなり内容は異なっている。例えば、5～9（同一個体）は、口縁部文様帯と胴部文様帯の二帯構成で、極細い円形竹管による刺突を充填するなど、東京都八王子市神谷原遺跡例に代表されるような、オリジナルにかなり近い。4は横位の区画を重畳させ、胴部をも主要な施文域にしている点などは、勝坂式土器の属性に該当するが、雲母混入型の胎土及び施文工具として竹管1種・ハマグリを用いる点など、阿玉台式土器と共通の属性もまた多い。ある種の「折衷」として解釈される。勝坂式自体、近隣では神野貝塚採集資料が周知であるが、未だに少ない。

参考文献

- 小林謙一 1997 「茨城県宮平貝塚出土土器について（1）」 『民族考古』第4号
慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室「民族考古」編集委員会
- 小林謙一 2001 「茨城県宮平貝塚出土土器について（2）」 『民族考古』第5号
『民族考古』編集委員会
- 大村裕・大内千年 2004 「2、房総半島における縄紋中期中葉の土器群について」 『下総考古学18
下総考古学研究会

3) 中期末葉の評価

紙数の都合もあるので、ここでは8-001の時間的位置づけを行いたい。

同跡の出土遺物は、その状況から「廃棄」されたものと解釈される。即ち、厳密に捉えるならば、そこに居住した人達が使用したものであるというよりは、廃屋後に第三者によって廃棄されたものである。これに加えて、一部は埋没過程での流入も含まれる。図2-1-2-1を見ると、一部の破片は床面密着での出土であるので、少なくとも未だ床面がある程度露呈している状態での廃棄であることがわかる。

この土器は小形の瓢形深鉢で、口縁下に微隆起線を貼付し、「正反の合」を施文する。これは加納 実による編年（以下加納編年）に照合すれば、加曾利E4式に比定される。これと同様の属性を持つ土器を見てゆくと、図2-1-3では7～17・21～27が該当し、大多数を占めていることがわかる。同図の他の土器であるが、19は胴部の磨消懸垂文から見てE3式（古）段階、20は隆線の断面形は微隆起線に近いものの、隆線の両脇に浅いナゾリを施すという点から見れば、E3式（新）段階となろう。4～6はやはり隆線脇にごく浅いナゾリを入れるもので、いずれも「入組懸垂文土器」であって、E4式に比定される。18・28～30・32は隆線脇にごく浅いナゾリを入れるもので、これらもE4式として捉えられる。図2-1-4では、33～37が「沈文系意匠充塙系土器」で、このうち33～35がE3式（新）段階、36・37はE3式（古）段階になろう。その他では、53の条線を施した浅鉢がE3式に比定される。54・55については、E3～E4式としておく。

縄文の施文された胴部片であるが、出土土器の傾向から鑑みれば、E4式に比定されるものがほとんどとなる蓋然性が高い。使用原体で見ると、1段L65点、2段RL（0段多条含む）86点、2段LR（0段多条含む）61点となり、数量的には2段RLが最も多い。ただし、2段LRもかなり拮抗してきており、中期末葉～後期初頭の原体の然り方向の逆転現象の萌芽と見なすことも可能である。他方で、1段Lが他の二者とほぼ同量見られることも注意を払っておきたい。既に向境遺跡報文中で触れたように、同遺跡からも1段Lを施文した加曾利E4式が出土しており、8-001へ土器類を廃棄した人達と無関係ではないと思われる。

図2-1-2-2は小形の精製品である。所謂「瓢形型注口土器」などと伴することがあり、群馬県高崎市下佐野遺跡7区77号土坑例では、石棒も伴っており、加曾利E4式土器（あるいはE3式新か）が